開かれた大学

大学セミナーハウス開館50周年記念誌

1965－2015

公益財団法人　大学セミナーハウス

表紙題字　山﨑みのり

表紙「本館押し花絵」制作　佐藤　桂子

松本　美子

松尾　範子

長南　佳子

公益財団法人 大学セミナーハウスキャンパス全景

（敷地面積約22,400坪）

八重桜
（留学生会館前、4月末満開）

金蘭
（本館裏側、4月末満開）

アジサイ
（さくら館前、6月満開）

山百合
（敷地内、7月満開）

卵茸
（講堂裏側や松下館周辺、9月）

竹の子
（敷地内、4月初め）

キャンパス図(1965-1970)

図書館・講堂落成時(1967)

図書館(70m²)

松下館(1968)

講堂の入口

＊講堂兼体育館として建設された。(288m²)

講堂(1968)

中央セミナー館(1965)

かや橋記念碑(1970)

大麒麟亭(1968)

テニスコート(1968)

ユニットハウス中セミナー室(53m²)

本館(1965)

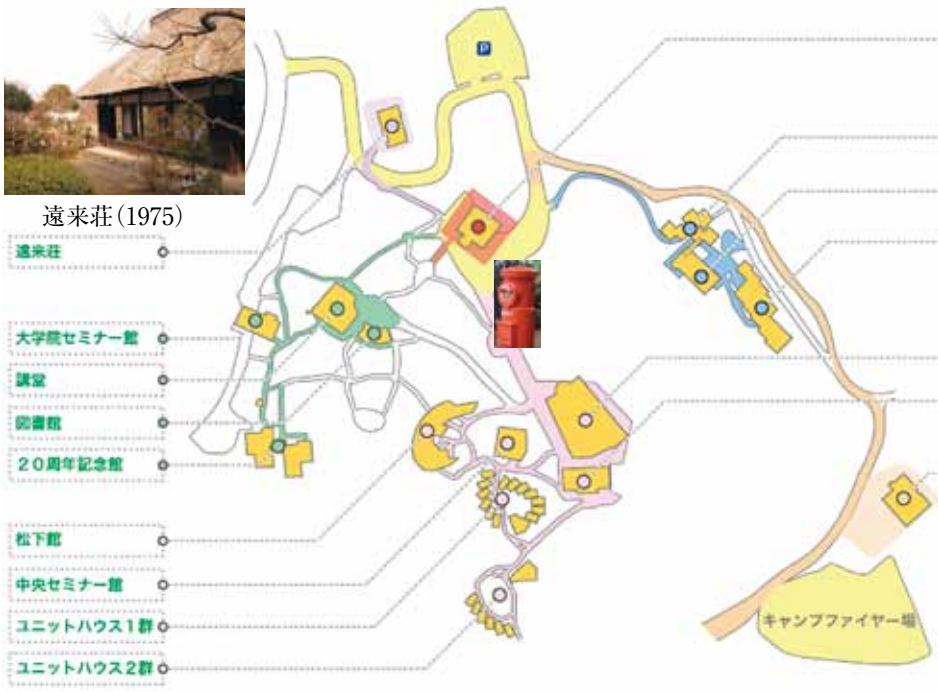
大地に「知のくさび」を打ち込んでいるような形の本館の片面の壁には大きな目のレリーフがついている。ご来館の方々のお出迎えとお見送りの気持ちを表わしていると言う。

ユニットハウス群(1965)

長期セミナー館(1970)

キャンパス図（1970–2004）

遠来荘（1975）



出会いの広場（2004）

国際電話ボックス（2004）

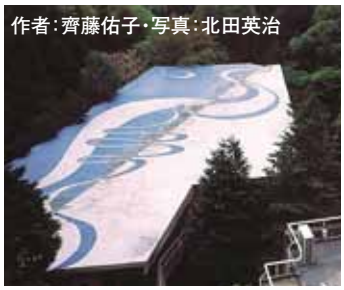
市道開通記念碑（2006）

野外ステージ（1973）

交友館（110m²/別称キリンサロン、1978）
サロンとして建設した交友館は2009年に交友館セミナー室A・Bに改修しご利用頂いています。

大学院セミナー館（151m²/1975）

20周年記念館・インターナショナル・ロッジ（1989）

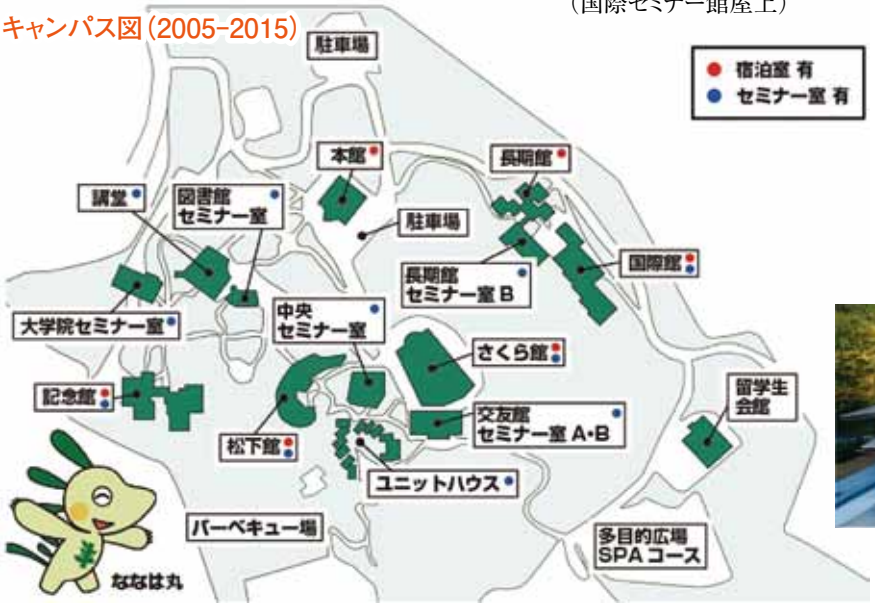


青い地球に流れる天の川
（国際セミナー館屋上）

国際セミナー館（1978）

留学生会館（2005）

キャンパス図（2005–2015）



さくら館（2006）

ダイニングホールやまゆり（572.05m²、2016）
開館50周年記念事業の一つとして新築の食堂棟

大学教員セミナー

右から竹前文夫委員、山本真一委員長、高石道明委員、中嶋嶺雄理事長、田中敬文委員、大星公二氏、横田雅弘委員、荻上紘一館長、吉田文委員、岡村浩委員（ようこそ広場）

大学教員セミナー企画委員と理事長、館長（2005）

↑②分科会模様　③全体会質疑応答↑

第53回大学教員セミナー開催模様（2012）

①基調講演→

（大妻女子大学長・大学セミナーハウス館長荻上紘一氏）

大学共同セミナー

大学共同セミナー企画委員会（2002/図書館）

出席者：中嶋嶺雄理事長・館長、北原和夫委員長、中嶋幹起委員長、伊東孝之委員、本橋哲也委員、市村禎二郎委員、川人博委員、篠田節子委員、園田茂人委員、川田宗鳳委員

②分科会（講師：熊倉功夫）

③分科会議論結果発表（全体会）

①基調講演会（講演者：田坂興亜氏）

第189回大学共同セミナー「食と人間」開催（2003）

国際学生セミナー

「日中・日韓関係をどうみるか」特別講演（講演者：渡辺利夫氏）

②第41回国際学生セミナー・中嶋嶺雄前理事長追悼セミナー「アジア・太平洋の歴史と未来―国際関係論と地域研究の視点から」開催（2014）

③パネルディスカッションにおいて質問する学生

①主催者側挨拶（鈴木康司館長）

④分科会議論結果発表

村田雄二郎氏

2003年度ご来館されたセミナー講師の先生方

国際教養セミナー

①花澤聖子氏講演

②分科会討論（講師：大塚和夫氏）

③分科会議論結果発表

第１回国際教養セミナー（2007）は、船曳建夫氏（日本）、花澤聖子氏（中国）、古矢旬氏（米国）、渡邊啓貴氏（EU）、大塚和夫氏（イスラム）、川田順造氏（アフリカ）を講師としてお招きし、多文化共生の道について熱い討論が展開されました。

古代史セミナー

会場模様

講師の古田武彦氏

第11回古代史セミナー参加者の皆様（2014）

公開セミナー

公開セミナー「わが国の高等教育の将来像」開催（2005）

開館50年記念セミナー「憲法を学問する」

樋口　陽一氏

石川氏(左)と樋口氏(右)の対談

開館50周年記念セミナー「憲法を学問する」は、樋口陽一氏、石川健治氏、蟻川恒正氏、木村草太氏、宍戸常寿氏を講師に、2016年６月11日～12日に開催されました。

右は、パネルディスカッション風景

第４回ＥＵセミナー

EUセミナーは、渡邊啓貴氏をはじめとする日本におけるトップクラスのEU研究者、田中素香氏、太田瑞希子氏、蓮見雄氏、中西優美子氏、福田耕治氏、押村高氏、小久保康之氏に企画いただき、2012年度から年一度開催する学生対象のセミナーです。

特別講演
下は、駐日欧州連合代表部
副代表・公使　ジョナサン・
ハットウェル氏

下は、講師による趣旨説明（講堂）

分科会討論(講師：押村高氏)

第32回大学職員セミナー

大学職員セミナー企画委員長近藤清之氏による開催主旨説明

全参加者(講堂)

ディスカッション風景

近藤清之氏（企画委員長）、山本眞一氏、青木加奈子氏、中山真一氏の企画によるディスカッション。

第５回新任教員研修セミナー

左から講師の有賀清一氏、江夏由樹氏、村山光子氏と、司会の菊地滋夫氏

グループ討論

グループ討論会場(講堂)

右は、参会者への修了証授与

第５回新任教員研修セミナーでもＳＰＡを導入。左は屋内でのＳＰＡ実施風景。

第15回教員免許状更新講習

選択科目「学びの楽しさを伝えるデジタルレポート作成」
(講師：栗野由美氏)

選択科目「異文化コミュニケーション論」(講師：原田淳氏)

ＳＰＡ

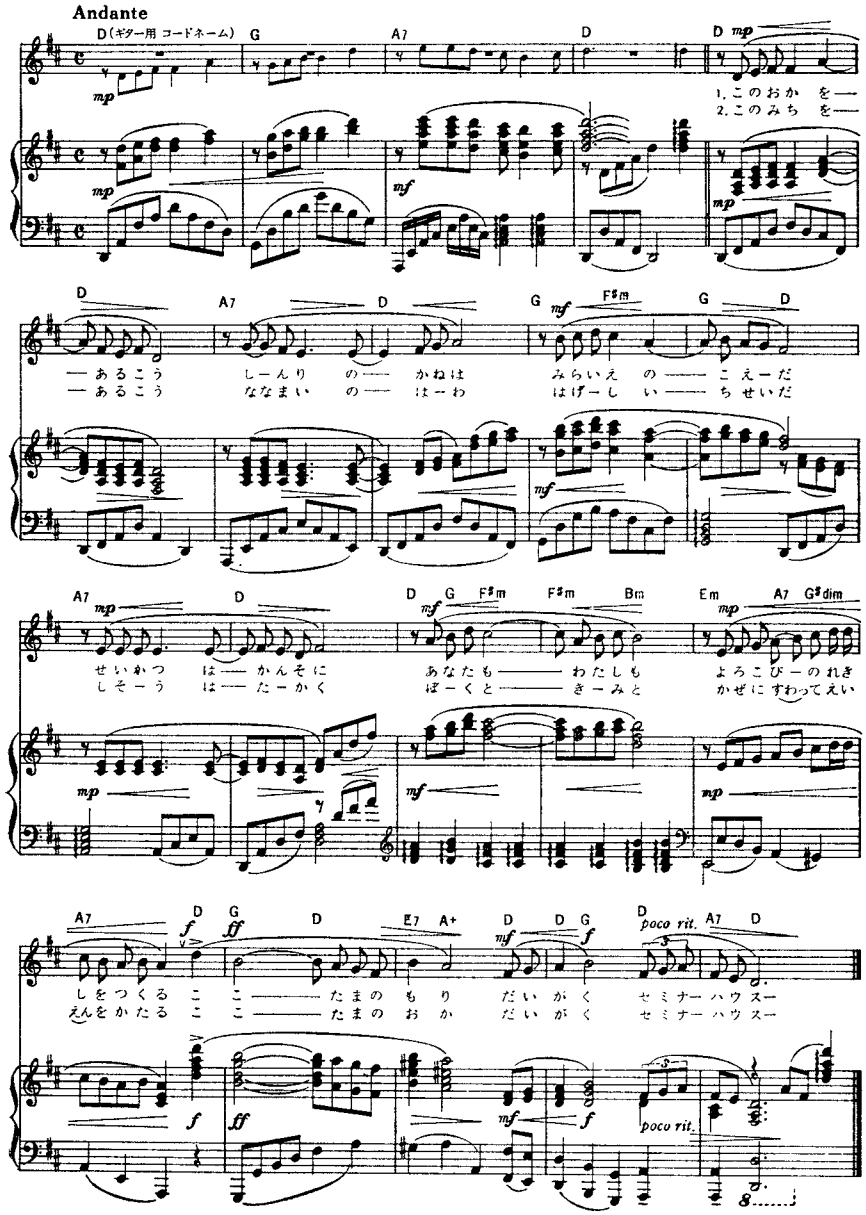
SPA（セミナーハウス・プロジェクトアドベンチャー）は、人との関わり、知識・情報を共有し、課題を解決することを、体験を通して学ぶ新しい教養教育です。

大学セミナー・ハウス讃歌

作詩　藤富保男
作曲　塚谷晃弘

この丘を歩こう
真理の鐘は
未来への声だ
生活は簡素に
あなたもわたしも
歓びの歴史を作る
ここ　多摩の森
大学セミナー・ハウス

この道を歩こう
七枚の葉は
はげしい知性だ
思想は高く
ぼくときみと
風に坐って永遠を語る
ここ　多摩の丘
大学セミナー・ハウス



写真は右から讃歌作曲の塚谷晃弘氏、作詩の藤富保男氏

「教える立場にある者はもちろん、こういう環境で学問を知り、感性にみがきをかける学生諸君には、ここは終生忘れられない思い出の丘になるであろう。」
（1970年10月22日、開館5周年記念式典時に藤富氏より）

目　次

口絵
大学セミナー・ハウス讃歌
50周年記念誌の刊行に当たって ……大学セミナーハウス理事長　佐藤　東洋士
歴代理事長館長 …… i
公益財団法人大学セミナーハウス役員・評議員一覧（平成28年６月30日現在） …… ii
会員校一覧 …… ii
大学セミナーハウス開館50周年に寄せて …… iii

前　史　大学教育に欠かせない新たな場づくり（1962-1965）…… 1
第１節　法人設立の背景…… 1
１．一人の大学人の思い…… 1
２．思いから形へ…… 2
第２節　法人の設立と期待される役割…… 5
１．設立の理念と経営組織…… 5
２．期待される役割…… 6

第１章　注目される時代（1966-1975） …… 8
第１節　一般教養科目を補うセミナー事業の展開…… 8
１．開館・落成記念セミナー…… 8
２．大学共同セミナー…… 8
３．国際学生セミナー…… 10
第２節　賑わう「大学セミナー村」…… 11
１．ゼミ合宿で賑わう「大学セミナー村」…… 11
２．新入生オリエンテーション…… 12
第３節　大学改革と大学セミナー・ハウス…… 12
１．大学教育改革をめざす大学教員懇談会…… 12
２．開かれた大学としての役割…… 13

第２章 「大学の中の“大学”」と呼ばれる時代（1976-1995） …… 15
第１節 「大学の中の“大学”」としての役割…… 15
１．知への探求を誘う場として…… 15
２．先駆けの FD 活動…… 16
第２節　善意の結晶―法人施設の整備…… 17
１．ユニークな建築群の出現…… 17
２．心地よい環境の整備…… 18

第３章　時代の変化に対応して（1996-2015）…… 21
第１節　創始の心を忘れずに公益事業の継続…… 21
１．知的財産としてのセミナー事業の継続…… 21
２．開かれた研修施設としての利用者対策…… 23
第２節　留学生支援事業の展開…… 24
１．留学生会館の開館…… 24
２．留学生論文コンクールの開催…… 26

年　表…… 29
あとがき ……大学セミナーハウス館長　鈴木　康司
資料集…… 37
主催セミナー
大学共同セミナー開催一覧（1965-2003）…… 37
大学院共同セミナー開催一覧（1979-1999）…… 50
国際学生セミナー開催一覧（1972-2014）…… 51
国際教養セミナー開催一覧（2007-2010）…… 54
EU セミナー開催一覧（2012-2016.10） …… 55
大学教員懇談会／大学教員セミナー開催一覧（1970-2012）…… 55
大学職員セミナー開催一覧（1999-2016.10） …… 57
新任教員研修セミナー開催一覧（2011-2016.10） …… 58
古代史セミナー開催一覧（2004-2014）…… 59
教員免許状更新講習開催一覧（2008-2016.10） …… 59
宿泊利用者の推移

大学セミナーハウス50周年記念誌の刊行に当たって

大学セミナーハウスは2015年に開館50周年を迎えました。50年前を振り返りますと、新制大学教育制度が定着し団塊の世代を大学に迎え入れた時でした。それまでは同年代の1割に満たない人達が大学へ進学していましたが、1948年生まれの人達が大学入試を迎えた時には15% の進学率となっていました。そういった環境の中で多くの大学が申請・認可され、その規模の拡大とともに学生数は増加し、教授と学生との関係が希薄になり、また国公私立大学の間にも壁ができました。1965年に設立されたセミナーハウスは、そのような戦後大学のエリート教育からマスプロ教育へと移行したことによる弊害を取りはらい、国公私立大学の壁を超えた交流を目的とし､大学教員と学生が宿泊を共にして学ぶ場として、日本高等教育の発展に少なからぬ貢献をしてまいりました。

さらにセミナーハウスは、日本の大学の国際化とグローバル化の流れの中、40周年の2005年に留学生会館を建設するとともに留学生論文コンクール等も開催し、会員校大学の中での国際化に貢献して参りました。また老朽化した建物についても環境整備などにおいて努力をしているところです。

この度50周年記念事業として、キャンパスの多摩丘陵の景色を眺望する場所に新たな食堂棟を建設いたしました。今後も既存の宿泊研修施設等のリニューアルにおいて豊かな自然環境を守り、「学生と教員が寝食を共にして学び合う場」と「国公私立の壁を超えたネットワーク構築の場」の充実と発展に努力していきたいと考えております。また次の50年に向けての礎を築くべく、日本の高等教育の発展、大学教育の質保証、グローバル化対応、地域との連携などを視野に、新たなプログラムの展開を検討し、今後の新しい時代に求められる人材育成に貢献していく所存です。

公益財団法人 大学セミナーハウス
理事長　**佐藤　東洋士**

歴代理事長・館長

●歴代理事長

1962．4～1964．9　石館　守三（東京大学名誉教授）
1964.10～1966．9　大浜　信泉（早稲田大学総長）
1966.10～1970．3　増田　四郎（一橋大学学長）
1970．4～1971．4　高村　象平（慶応義塾大学塾長）
1971．5～1972．3　大浜　信泉（早稲田大学総長）
1972．4～1974．1　加藤　六美（東京工業大学学長）
1974．2～1977．5　正田健次郎（武蔵大学学長）
1977．6～1979．3　川喜田愛郎（千葉大学名誉教授）
1979．4～1982．6　茅　　誠司（東京大学元総長）
1982．7～1995．7　中川　秀恭（大妻女子大学学長）
1995．8～2000．5　佐野　博敏（東京都立大学前総長）
2000．6～2006．5　中嶋　嶺雄（東京外国語大学学長）
2006．6～　　佐藤　東洋士
（桜美林学園理事長・学園長）

（　）内は就任時の職名

●館　長

1964.10～1970．3　茅　　誠司（東京大学前総長）
1970．4～1971．5　増田　四郎（一橋大学学長）
1971．5～1972．3　大浜　信泉（早稲田大学前総長）
1972．4～1974．1　加藤　六美（東京工業大学学長）
1974．2～1974．5　正田健次郎（武蔵大学学長）
1974．6～1980．6　飯田宗一郎
（大学セミナー・ハウス専務理事）
1980．6～1981．1　茅　　誠司（東京大学元総長）
1981．2～1990．5　中川　秀恭（国際基督教大学学長）
1990．6～1998．4　岡　　宏子
（聖心女子大学名誉教授）
1998．6～2000．5　佐野　博敏（東京都立大学前総長）
2000．6～2002．2　絹川　正吉（国際基督教大学学長）
2002．3～2004．3　中嶋　嶺雄
（東京外国語大学前学長）
2004．4～2013．6　荻上　紘一
（東京都都立大学前総長）
2013．6～　　鈴木　康司（中央大学元学長）

公益財団法人大学セミナーハウス役員・評議員一覧

※平成28年6月30日現在

理事	
理事長（代表理事）	佐藤　東洋士　桜美林学園理事長・学園長
館長	鈴木　康司　元中央大学学長
専務理事	外村　幸雄　元中央大学広報室長
常務理事	白井　克彦　元早稲田大学総長、放送大学学園理事長
理事	
上野　　淳	首都大学東京学長
小川　哲生	明星学苑副理事長
萩上　紘一	大妻女子大学前学長
佐藤　和人	日本女子大学理事長・学長
仙波　憲一	青山学院大学前学長
蓼沼　宏一	一橋大学学長
新田　誠吾	法政大学副学長
監事	
冲永　佳史	帝京大学理事長・学長
光田　明正	桜美林大学孔子学院名誉学院長
評議員	
鷲山　恭彦	東京学芸大学名誉教授（評議員会議長）
石森　孝志	八王子市長
大井　　孝	一般社団法人日米協会理事
高祖　敏明	上智学院理事長
小畑　秀文	国立高等専門学校機構前理事長
篠田　節子	作家
清家　　篤	慶應義塾長
高石　道明	信州大学元教授
土屋　惠一郎	明治大学学長
馬場　善久	創価大学学長
日比谷　潤子	国際基督教大学学長
ピーター・マッキャグ	国際教養大学副学長
村田　雄二郎	東京大学大学院教授
八木　敏郎	多摩信用金庫理事長
山本　眞一	桜美林大学教授
吉岡　知哉	立教大学総長

会員一覧

＊協力会員			**＊準協力会員**
青山学院大学	上智大学	東京農工大学	白梅学園短期大学
桜美林大学	創価大学	東洋大学	東京工業高等専門学校
大妻女子大学	千葉大学	東洋英和女学院大学	
お茶の水女子大学	中央大学	日本女子大学	**＊賛助会員**
慶應義塾大学	帝京大学	一橋大学	安藤物産株式会社
工学院大学	電気通信大学	法政大学	株式会社スリーボンド
国際教養大学	東京外国語大学	明治大学	多摩信用金庫
国際基督教大学	東京学芸大学	明星大学	ユニバーサルプロジェクト株式会社
駒澤大学	東京経済大学	立教大学	株式会社幼体連スポーツクラブ
埼玉大学	東京工科大学	立正大学	
首都大学東京	東京工業大学	早稲田大学	
順天堂大学	東京都市大学		

大学セミナーハウス開館50周年特別寄稿

日本の教育の新しい柱の誕生

大学セミナーハウス元常務理事、成蹊大学元学長　千人会会員　　**宇野　重昭**

大学セミナーハウスにはじめて参上したのは1967年助教授３年目の時で、安藤英治先生にお誘いを受けたのがきっかけである。まだ本館やユニットハウスなどがあるだけで、建設中の赤土が強く印象に残った。これから講堂・図書館が建つという。しかし当時はまだ若かった飯田宗一郎専務理事や数名の事務局の人は共に新しい教育の場に情熱を燃やしていた。事務局の人たちとほぼ同年輩の私は、その雰囲気にすぐ溶け込んだ。当時は学生運動が盛んで優れた指導者の言論も軽視されがちであったが、ここでは大浜信泉先生や茅誠治先生などの考え方も面白く伝えられた。私は委員になる前であったが、千人会や共同セミナー委員会などの設立の議論にも参加した。まさに独創的な教育方法の場である。ここから初めての教育方法が提起され、やがて大学の講義や教員主導のセミナーと並置されて、新しい日本の教育の柱が築かれた。いまやおおいに発展してその教育の場の歴史が50年となったことを祝福したい。

セミナーハウスの効用

大学セミナーハウス元常務理事、早稲田大学元総長、白鴎大学学長、千人会会員　　**奥島　孝康**

ぼくほど、セミナーハウスを活用した者は少ないのではないか。もっとも、それは数回しか利用したことのないこの「大学セミナーハウス」ではなく、勤務先のセミナーハウスであったが。

学部のゼミ、外図書購読などはそれぞれ二泊三日の合宿で大学での優に十回分以上の内容をこなすことができ、全員に発表の機会を二回程度は与えることができた。しかも、年二回の合宿なので、その学習効果は抜群であった。

大学院生ともなると、年に三回程度の合宿研究会を行うので、これなくしては授業そのものが成り立たない感すらあった。

もとより、その効果は勉強の面だけではない。学生一人ひとりについてその人となりを知ることができ、進路について相談に乗ったり、アドバイスを与えることもでき、卒業時には全員を家族の一員のように思えた。いまでも、寝食を共にした約千二百人の卒業生との親密な交流は絶えることなく続いている。

大学セミナーハウス開館50周年記念によせて

大学セミナーハウス元顧問、国際司法裁判所裁判官、千人会会員　　**小和田　恆**

大学セミナーハウスの関係者の皆様、50周年の誕生日おめでとうございます。

1966年に大学セミナーハウスが創設されてからもう半世紀の歳月が流れたことを思うと、深い感懐を禁じえません。思い起こしてみますと、私が大学セミナーハウスとお近づきになったのは1974年のことでありました。創設後わずかに10年にも満たない、セミナーハウス草創の時期に当たります。1971年に国連日本政府代表部勤務から帰国して外務省国際連合局政治課長の職にあった私は「国連の当面する課題」をテーマとした大学共同セミナーに招かれて、「日本と国連」というセクションを担当したのです。国際基督教大学、津田塾大学、東京外語大学、東京大学など多様な大学から参加した若い皆さんと一緒に週末の一夜を語り明かしたのがつい昨日のことのように思い出されます。（このセミナーで識りあった学生の一人が、最近まで国連日本政府常駐代表として活躍して来られた吉川元偉国連大使だったのもセミナーハウスがとり結んだ奇縁でした。）

日本での単調な大学生活を終えて英国のケンブリッジ大学で過ごすことになった四年間の経験は、私に大学とはいかにあるべきものかということについていろいろと考えさせる契機となりました。大学間の相互交流の機会がきわめて乏しかった当時の日本の状況の中で、大学間の枠を超えて若者たちが切磋琢磨しあう場を提供するこの大学共同セミナーの場は、私にとって極めて新鮮な驚きだったのです。

この大学共同セミナーを創設するという構想をほとんど独力で企画し推進されたのが飯田宗一郎先生であったことは、私どものよく知るところです。このときの体験に深く感銘を受けた私は、その後何度かセミナーハウスにお招きを受け、また飯田宗一郎先生の知己を得て大学というもののあり方について語り合い、大学セミナーハウスの設立に至る歴史についてお話を伺い、考えをともにする Comrade-in-arms の一人となったのです。その後も、岡　宏子館長のお手伝いをして何回かの大学共同セミナーに参画したこと、また私の東大国際関係論学科の学生と一緒にこの多摩下柚木の丘で過ごした週末の集中セミナーのことなどを懐かしく思い起こします。

このような飯田さんの熱い思いと並外れた行動力と、それに加えて飯田さんの高い志に深く共鳴されてその理想実現に不可欠だった基金の実現のために尽力を惜しまれなかった当時の三井銀行社長佐藤喜一郎氏の献身的なコミットメン

トとがなかったならば、この事業は実現しなかったでありましょう。今こうしてさくら館、国際館、交友館さらには新食堂棟と発展した校舎群を見ると、40年前のことを思い今昔の感に堪えないものがあります。さらにそういう外見的な変貌だけではなく、大学間の枠を超えたインターカレッジの学生交流の思想が着実に根づきつつあることに深い感銘を覚えるのです。

世界が政治面でも経済面でもグローバル社会として一体化しつつある今日、逆説的に聞こえるかもしれませんがそれだからこそ、歴史、風土の異なる社会の中で人々が作り出してきた異なった文明、多様な文化の間の接触から生まれる相互作用が我々の生活をいっそう豊かなものにしているということが言えると思うのです。狭い縦割り社会の中で、いわば「均質の調和」の文化の中で生きてきたこの国の人々が、異なった社会に存在する多様な考え方、感じ方に触れることは、これからの日本がグローバル化する世界の中で生きてゆくために最も大切なことではないでしょうか。そして、そういう感受性を錬磨する上で重要なのは、大学であれ、職域であれ、また地域であれ、民族であれ、異なった社会集団に固有な文化的土壌の間での交流、いわば「文化における他流試合」を活発にすることではないかと思うのです。

大学セミナーハウスがそうした他流試合を実践する場として今後ますます大きな役割を果たすことを心から期待いたします。

大学セミナー・ハウス創設者飯田宗一郎とICU

大学セミナーハウス元館長、国際基督教大学（ICU）元学長、千人会会員　**絹川　正吉**

大学セミナー・ハウス創設者・飯田宗一郎はICU（国際基督教大学）と深い関わりがあった。ICUの開学は1953年である。飯田宗一郎は東京女子大学の事務局長であったが、ICUが第4年次を迎えた時にICUに就職部長として着任した。これは、当時は珍しいスカウトのたぐいであった。それというのも、ICUは、初めての卒業生の就職という試練に直面していた。旧来の日本の大学の範疇から大きくはみ出していたICUの教育の成果が、第一期生の就職ということによって、社会的評価に直面していた。したがって、就職部長という職責は極めて重いものであった。そういう重責を担い得る人物として、飯田宗一郎はスカウトされたのであった。

ICUの創設には、当時「法王」とよばれ、日本の財界に重きをなしていた一万田尚登日本銀行総裁の尽力が特筆される。その一万田総裁が、ICU一期生の就職のために、実業界の大物を歴訪して回った。その歴訪に一万田総裁は飯田宗一郎就職部長を帯同したのである。

飯田宗一郎が大学セミナー・ハウス創設に際して、財界の支援を得ることができたのには、上記のICUでの経験が大いに役だったと想定することは、極めて自然であろう。

星霜移り
大学セミナーハウス50周年記念

大学セミナーハウス元理事・評議員、上智大学名誉教授、千人会会員　**鈴木　皇**

セミナーハウスも設立から50年になる。50年とは半世紀だから［星霜移り］と言ってもよいだろう。設立以来運営に関係していたのは、たぶん、もう私一人だけだろうから、個人的な感慨を述べさせていただきたい。［敬称　略］

設立委員会には東大教養学部学生部委員として参画した。以降、各種セミナーの運営委員や評議員、最後は［南紀に転住するまで］常任理事として中川秀恭理事長の職場の綱紀粛正の熱意に協力して少なからぬ時間を費やした。

設立当初のハウスの周りの景観は、今でも昔の面影が十分残っているが、緑の丘陵に囲まれた別天地であった。

185号ニュースのメッセージで芳賀徹が述べているようにセミナーのたびに［しきりに通った若葉の光の中のハウスは愉快な］討論啓発の時間と場所であった。緑の木陰あるいは深夜の灯光の下で、専門を超えた諸先生や大学の隔てのない学生諸君との果ない討論や懇親に時が過ぎた。最初の設立委員会では、労働法の闘士の少壮教授が、大学が財界の支援を受けるのは［大学の自由の理念に反する］と激しく反対した。現在望まれている、社会と大学の関係からは、想像もつかないことで、まさに昔日の感である。

表題の［星霜移り］は、ご存じ有名な旧制高校の寮歌の一節で、この後には［梶とる船師は変わるとも、我が乗る船は常へに、理想（の自治）をさして進むなり］と続く。

理事長・館長はじめハウスの運営者は当然つぎつぎに変わる。ハウスがめざして進む理念は何であろうか。それは［50周年記念事業のビジョン1］に簡潔に明記されている。それは変わらないだろうし、今後も変わる必要はない。

このような理念が実現され、50年も運営されているのは、たぶん世界でも稀ではなかろうか。

私は偶然、初代の石館守三をはじめ、茅誠司・増田四郎・川喜田愛郎など初期の理事長とハウスと別の関係で親しくさせていただいていた。それぞれの専門分野の碩学と、ハウスの縁で、改めてお付き合い出来たのも楽しかったが、ハ

ウス運営の実務になるとそれなりの問題があった。理事長の私宅に招かれ夜おそくまで、学問と無関係の次元で、苦慮を重ねたこともしばしばあった。

改めて言うまでもない事だけれど、ハウス設立の第一の功労者は飯田宗一郎である。彼は真摯なクエーカー。今の茨城県つくば市の出身。上州人に似た人情と一徹な人柄で、同志社で学び、創意に溢れていた。東京女子大の事務長の後、当時設立されたICUの初代学生部就職部長であった。

ICUの学生部に勤めていたのも学際的な教育への視野を広げるのに役立ったであろう。大学間の交流をめざした［大学セミナーハウス］の設立を思い立ち、現在の八王子市下柚木の地に思いを定めた。その狙いは的確であった。今では、このような広大な用地の取得は不可能であろう。財政面では、主に三井銀行の頭取佐藤喜一郎が長く強力な援助をし、飯田自身も募金に奔走した。大学関係では、茅誠司や石館守三が幅広く協賛した。飯田はICUを辞し、一家［八千代夫人・能子・恵の姉弟］をあげてハウスの建設に献身した。

今でも鮮明に思い出すのは、1965年の開館記念の第一回共同セミナーである。講師は西谷啓次・山内恭彦・中村元。セミナー担当は川原栄峰［早大 哲学 比較思想］・三枝充悳［国学院大 仏教学 比較思想］・鈴木皇［東大・上智大 物理］。川原と三枝は仏教に詳しく僧籍にあり、私は三枝と高校の同級、川原とは早大関係の知友。三人とも相いついでドイツに留学し、研究はドイツ系であった。このような知り合いなので、ハウスで出会った以降も、親交を温めた。PRに応じて集まって来た学生は既存の大学の枠にあきたらず、進取の活気にあふれていた。学生たちは、飯田の熱意と独特な人情に魅されてハウスのファンになった。

創意豊かな飯田は、建物や運営に、次々と新しい構想を打ち出し、来館者を楽しませ元気づけた。山小屋を模した一人用のユニットハウスは斬新であった。しかし新しい構想は、それなりの不便を伴い、身障者の利用には不適で問題を生じた。幸い現在はアトリエとして活用されている。［千人会］も飯田の秀れた創案で、参加者の協力の意欲をもり立て、現実にも少なからぬ寄与をしている。

創設の初期、私も、用事があったとはいえ、都心からはかなり離れた八王子のハウスに、よくもしばしば、通ったものである（前に引用した芳賀のメッセージ）。私は正月休に家族で泊まり込んで、子供たちに［お書き初め］の練習をさせた事もあった。

通館仲間であった芳賀徹は比較文化学の重鎮で美術館長などを歴任しておられるが、当時は東大駒場の少壮教授で、私とは、勤務が同じだけでなく住居がごく近かったので、夜おそくなったセミナーの帰りには、しばしば同行して歓談した。なお、ここで特記しておきたいのは、この時期の学生との交流への山内恭彦の大きな貢献である。山内先生とは風貌と気質が少し似た、芳賀と私は先生を深く敬愛し、学生との歓談に同席した。山内先生は独特の信条から、東大退職の後は、上智大で物理の講義を受け持たれていた他一切の管理職を（単なる名誉職でも）厳しく拒否されたが学生との交流には率先参加された。先生の学識の深さや極めて厳しい言動を全く知らない学生たちは臆することなく先生の身近で学んでいた。これこそセミナーハウスの理念であり実践目標であった。

創設期は目標を上回る成果を達成した。誰でも、新しい事業に携わると、新しい熱意に燃えて熱心に働く。しかし創設が過ぎて定常的な実務を遂行する場合は、それなりの問題が生まれる。特に、大学関係で、職員の数も少なく、大会社や工場のような牢固たる組織体制がない職場では、個性が働く。首脳部は兼任で常駐しない。そして、運営が円滑でなくなる。創立者が独創的で強力な場合に、現場の対応が微温的に思われる。ともすれば、創立者の独善が表面に出て、確執が生まれる。兼任の首脳部には舵取が容易ではない。残念ながら、まぎれもない、そのような兆候がハウスにも現れてしまった。山内先生と私は、飯田に直接忠告助言したが、耳をかしてもらえなかった。私は、飯田の功績を高く評価し、彼の人柄も知悉しており、一方、上智大では教職員組合の委員長も勤め、現場の職員の苦労も理解していたから、中立で和解にかなり努力したが、全く効果はなかった。しかし、飯田と私個人との交友は変わらなかった。創設期に、家の庭の椿の大木を寄贈したら、代わりに、武蔵野の情緒を偲ばせる［ソロの木］を移植してくれた。

結局、創設の功労者であった飯田はハウスを去り、中村元先生の英知で［三輪学苑］と名づけられ、ハウスと似た［学苑］を主宰する事になった。それはそれで良かった。

幸い、定常状態になったハウスは、諸大学の連携支援が確立されたので、財政的には安定し、学際的また社会との交流は、ますます必要性を増し発展を続けている。しかし、言うまでもなく、設立の時代と情勢は一変している。大学の学制や組織も大きく変わり、社会の大学に対する要請はグローバルに変転する。そして、なによりも、学生の気質や大学に対する期待も、半世紀前とは全く異なっている。

当然、セミナーハウスは、このような事態に柔軟に対応しなければならない。しかし、学問の真理の追究と教育［この意味も検討を要する］の真締の把握は、万古不易であることを忘れてはならないであろう。大学セミナーハウスのさらなる発展を期待する。（2015年10月10日　南紀にて）

大学セミナーハウス開館50周年に寄せて

思い出の大学共同セミナー

株式会社主婦の友社元監査役、千人会会員　　**青柳　総太郎**

千人会の会員として大学セミナーハウスとささやかな関わりを持つのは、ゼミなし卒論なしの大学生活の中で何度か参加した大学共同セミナーの縁である。手元に19枚の講師と参加者の住所カードがある。卒業間近の最後となった大学共同セミナー参加者のものである。テーマは女性関連であったが、関心があり女性誌を発行する出版社の就職試験中でもあり参加した。せっかくの住所カードも数人の方と連絡を取り合うくらいで、一同再会の機会もなく瞬く間に40年がすぎた。その後作家になられ、大学セミナーハウスの運営に力を惜しまない篠田節子さんのお名前もある。就職し大学セミナーハウス訪問の機会もなく、出版社を定年退職し現在は「読み」「考え」「動く」…地域の人々と共生の日々である。11月に開館50周年記念会を開催するとの案内をいただいている。八王子の丘を再訪し「思い出し」「振り返る」一日を過ごしたいと考えている。

私の地域史研究の原点

専修大学元教授、千人会会員　　**新井　勝紘**

私が大学セミナーハウスを最初に利用させてもらったのは、1968年の事なので、すでに半世紀近い歳月が経過した。東京経済大学の４年時で、色川大吉教授のもとで近代日本史を学ぶゼミナールの合宿であった。ゼミ長として宿泊交渉をしたが、東経大は会員校としてまだ登録されていないことが判明し、戸惑ったことを思い出す。東経大としては最初の利用だったかもしれない。この年の夏の色川ゼミの調査は、八王子の西部に隣接する五日市町の深澤家土蔵調査で「五日市憲法」を発見する機会に恵まれ、それを卒論としてとりあげた私にはいまでも強烈な記憶として残っている。以来、八王子を中心にした地元研究者の集まりの多摩史研究会でも、利用する機会が増え、夜を徹しての報告や議論の場が思い出される。疲れると、そっと抜け出して多摩の夜空に満天の星を見た。今、多摩史研究会の同志の訃報が次々と届いているが、私の地域史研究の原点がセミナーハウスである。

大学セミナーハウス開館50周年に寄せて

電気通信大学名誉教授、千人会会員　　**有山　正孝**

草深く人家も稀であった野猿峠に「大地に楔を打ち込んだような」と形容された倒立正四角錐の本館を象徴とする大学セミナーハウスが開設された時には、素晴らしい施設が出来たものだと嬉しかった。以来、様々な形で利用させていただき、評議員を務めさせていただいたこともあった。今も関わりを持つ事業として「国際物理オリンピック」に派遣する日本代表の高校生の合宿研修で毎年12月と３月に利用させていただいている。

この50年の間にセミナーハウスを取り巻く自然環境は大きく変わったが、その利用者である大学もそれ以上に大きく変わった。その変化が進歩なのか変容なのか頽廃なのか、篤と考え見極める場を、大学セミナーハウスには提供し続けていただきたいと願っている。

大学セミナーハウスと私

千人会会員　　**生山　智己**

大学セミナーハウスとくればまず芳賀徹先生を思い出す。昭和４８年４月に東大の駒場に入学した僕は、比較文化の全学ゼミナールに参加した。当時少壮の学者として活躍中の芳賀先生が担当された。そして早速泊りがけで議論するセミナーハウスに連れて行かれた。そこでは学問のぜいたくさや議論の面白さを学ばせて頂いたように思う。

そしてハウスの食堂に、大浜信泉、飯田宗一郎先生の筆になるワーズワースの詩、「Plain living and high thinking. 思想は高潔に 生活は簡素に」がかけられていたのを思い出す。セミナーハウスは僕に学問の在り方や生きていく指針を教えてくれたように思う。そしてそれは質素な生活とともに精神の貴族性に通じるものなのだろう。

セミナーハウスの思い出

藤田保健衛生大学医療科学部看護学科・特任教授、千人会会員　　**石川　道夫**

大学セミナーハウスとの出会いは、もう40年前の事になります。私は、大学院修士課程に入ったばかりでした。誰かの勧めでも、誰かの連れでもなく、ただ１人、物足りなかった学生時代のなにかを取り戻せたらという期待で参加しました。その時の共同セミナーのテーマは、実存哲学でした。学園紛争が漸く終息して、落ち着いてきた頃で、何を支えにしていけばいいのか、手探りの日々でした。芸術の楽しみ、新しい社会主義、近代の冒険、中世ヨーロッパの社会と生活、…。そのうちに共同セミナーの参加者として、どこかであったことのある顔と遭遇、それも何度かめとなると、徐々につながりも出来てきて、それが学生年輪の会の始まりでした。いま子どもが、地元のまちおこしやボランティアグループのネットワークづくりをしていますが、自分の歩いてきた道を踏襲しているみたいで不思議な感じがします。

大学セミナーハウスの思い出

長岡技術科学大学入試課入試広報担当、千人会会員　　**泉　敏彦**

私が大学セミナーハウス主催のセミナーに参加したのは、1979年の秋か翌年の冬だったように記憶している。「南北問題」がテーマで、講師は東京大学経済学部教授の森田桐朗先生（故人）他で、著書を通してしか知らない先生方に直接お会いして講義を聞けたことに感動した。

卒業論文で南北問題について書こうと決め、２／３位書き終えていたが、講師の話や、セミナーに参加した各大学の学生との議論の中で、自分の理解が不足していることを痛感し、セミナー終了後書き直して大学に提出した。

卒業後、私は郷里の新潟県に戻り、大学の職員として入試広報業務を担当している。グローバル化や少子高齢化の進展で、これからの学生に求められる能力は、自分の頭で考え解決策を見出していく力と言われている。一方で、少子化のためか、受験生も保護者も内向き・地元志向の者が増えているように感じ、日本の将来に少し不安も感じている今日この頃である。

貴ハウスの創立50周年を祝して。

電気通信大学（応用物理学）教授、千人会会員　　**上野　芳康**

創立50周年、おめでとうございます。私が初めて貴ハウスで合宿したのは1980年木村尚三郎教授（西洋史）の全学ゼミナール学生としてでした。10年前からほぼ毎年学生10名前後を引率して合宿しています。今回の50周年記念誌にというお誘いを頂き、我々の祖父母世代の1965年を振り返ってみます。彼らは1910年前後に生まれ、江戸時代生まれの老人たちが生きていた時代に成人した世代です。彼らのアジア・アメリカ・ヨーロッパでの1915年～1965年は、我々より遥かに困難な50年間でした。当時のオトナたちが現代社会の google、自動運転技術、代替エネルギー技術を眺めたとしたら？　それらは道具の進歩であって、根本の人類の知恵や工夫については…「進歩しているのかな、わからんねえ」と言われそうですね。大学は大学で impact factor という世界標準尺度に追われがち。「人類は進歩している」と思い違いしていたかもしれません。若者たちの21世紀は、人類の英知や努力のありかたについて謙虚に省みる時代であり、ボーダーレスで率直な話し合いは増々不可欠と思われます。貴ハウスが1965年という大混乱時代の有志飯田宗一郎さんらに発案され、有志らと産業界から寄付を受け、脈々と受け継がれてきたことは凄いことだと感じています。ボストンやハーグから来訪した研究者らに日本国内の1960年代を様々語ると「それは初めて聞きました、驚きました」と印象深い様子でした。次の50年後の世界各地の孫たち世代に思いを馳せながら、増々のご活躍を期待しています！

リベラルアーツ・アンド・サイエンシスは「何処へ行った」

合同会社　K&K エンジニアリング代表社員、国際熱核融合実験炉 ITER 外部評価委員、千人会会員
海老澤　克之

篤志の教育者飯田宗一郎氏が提唱し東工大の永井道雄教授や東大教養学部の西村秀夫助教授などが指導した大学共同セミナーで理工学部の私が出会ったのは、華やかな女子大生ばかりでなく、先生方から教えられた現代の思想家たち、デイヴィッド・リースマン、エーリッヒ・フロム、ヴィクトール・フランクル、マルチン・ブーバー、シモーヌ・ヴェーユ、などなど。短くも充実した共同セミナーで学んだことは、著書の解説ではなく、いかにこれらの先達が掲げる課題と向き合うかということ。今もって紐解く度に学ぶことが多いが、スマートホーンもロボットも会得の助けにはならない。大学、学科、学年の枠を超えて、学生が教師と共に智とは何かを議論する、これこそリベラルアーツ・アンド・サイエンシスであり、大学共同セミナーが実践してきた功績は計り知れない。教師が大学院大学教授と非常勤講師に分極化し学生は学力よりも儚い即戦力を追い求める昨今、それは「何処へ行った」？

祝50周年、一層のご発展を！

教育学博士・エッセイスト、米国州立シンシナティ大学元准教授、千人会会員　　**小川　彩子**

開館50周年達成とは素晴らしい。諸事業や充実したプログラムのご成果だろう。私はある時期教員免許状更新講習の講師をさせていただいた。緑に囲まれた広大な敷地とスタッフの皆さまの笑顔が印象に残っている。私は最近も「異文化理解と共生の教育」、「足元から見たアメリカ文化」や「挑戦に適齢期無し」をテーマに講演活動、また塾長として小川地球村塾の学習会・交流会も継続、多文化共生の発信に情熱を傾けている。その傍らバックパックの旅も120か国、アメリカ在住の日本人が読む新聞に「地球千鳥足」を書き続け10年になる。10年有効のパスポートが７年で満杯になり先日40頁の増補をしたところだ。「体験こそ財産なり」、異文化での出会いと交流の収穫は計り知れない。お金をやりくりし途上国を彷徨する丸腰人生だが、豊かな体験は心身の活性化を齎すゆえ貯金以上の財産だ。人生は１度きり、死期には資産ゼロで OK だ。セミナーハウスの一層のご発展を祈念している。

村の日々

はるなキリストの教会牧師、千人会会員　　**小幡　史朗**

開館して、幾年もたたぬある日、飯田さんにお会いしたが、あなたがたは大学ではないけれど、準会員校なみにどうぞとお誘いをいただき、今まで神学校教師会や研究会、教会の全国規模の研究会にとお世話になってきた。それは飯田さんの思想に共鳴したからだ。

高校まで、榛名山麓で暮らしていたので、水は井戸、炊事や風呂は薪であったから、勉学で上京し、やがて牧師として御茶の水の教会に仕えるようになっても、木々や土は懐かしかった。

初めの頃は、ユニットハウスに泊まり、洗面所は外であった。勿論、電灯はなかったから、ある暗い朝、間違ってベンゲイを歯ブラシにつけて口に入れ、あわてた懐かしい思い出もある。

深い思索は大自然に抱かれるときに可能になると信じている。環境はすっかり変わったが、それでも、朝に夕に若者に峠道を考えながら歩いて欲しいと元若者は願っている。

セミナーハウスでの心に残る様々な「出会い」

中央大学元教授、千人会会員　　**甲斐　義幸**

開館50周年。その間、約20年近く、ほぼ毎年約20名のゼミ学生と共に秋の合宿を行った。豊かな自然の中、地の利も良く（中大に近く、都心から電車で１時間ほど）他では得られない様々な「出会い」があり私達の宝庫である。

合宿初日、地元の白山神社周辺で自然観察をし、帰りに水子地蔵に立寄り、昔の暮らしに想いをはせた。翌日、２㎞程離れた小学校での子供達との交流は宝物だった。

ゼミでは、半年間、合宿について議論をして役割を決め（全体に目を配る幹事や会計係、交流係は副校長先生との事前打ち合わせ、その他、行動計画、パンフレット係等）全員の組織的行動で合宿を成功させた。当日は一切、教員は手伝わなかった。学生主体も活動でこそ、様々な「出会い」があり、見違える程に生き生きとした姿を見せてくれた。中にはその後（小学校教員免許を取得）教員として活躍している人もいて、今でも強く心に焼き付いている。

今後も「学び」や「活動の場」である事を期待している。

開館50周年を祝して

国際基督教大学名誉教授、千人会会員　　**勝見　允行**

開館50周年記念お祝い申し上げます。

飯田さんが館長だった初期の頃、「科学と社会」に関するテーマだったと記憶していますが、シンポジュウムが企画され、私もグループ指導の一人として参加しました。現役の若手だった私は、参加した学生さん達と熱の籠った討論を続けました。現在たまたま「科学者の社会的責任」ということに関心があって、資料を読んだり、メモをとったりしていますが、その当時のことを思い出します。その時のグループの学生だった一部の方々とは今でも親しくしております。ところで、現代は第４次産業革命の時代と言われています。今後、AI技術と生命（特にヒトの）科学は急速な展開を遂げ、それに伴って、「ヒトとは何か」・「生命とは何か」をあらためて問い直さざるを得ないことになるでしょう。こんなことをテーマにした企画があってもいいのではないでしょうか。

セミナーハウスの設計者吉阪隆正

早稲田大学名誉教授、千人会会員　　**木村　建一**

広い敷地の小高い丘に聳えるセミナーハウス本館は、ピラミッドをひっくり返したような形だった。それは大地に楔を打ち込んだのだと設計者の吉阪隆正は嘯いたが、実は大勢が集う食堂を見晴らしの良い最上階に配した形になっていた。傾斜地の整地をせずに環状に配置した学生達の宿舎群は一本の柱で支えられた個室もあり、変化のある景観を醸し出していた。吉阪先生は、コルビュジェの薫陶を受けた新進気鋭の建築家で、1953年フランス留学から帰国早々私ども新入生のクラス担任となり、その第一声は、「何でもいいから皆一番になれ」だった。学生はキョトンとしていたが、先生は「それには他の人がしないことをすることだ」と。吉阪先生は、よく「人の話を聞いたら、まずその反対のことを考えてみると、その方が正しいことがよくある」とも言われた。文章も能くし、世界中を飛び回り、寸暇を惜しんで活動され､63歳で人の三生分を全うされた稀有の人だった。後に私自身も先生の同僚となり､よく學生達を連れて行き、静かな自然環境に浸る時を楽しんだ。

夏季セミナーの価値

大学英語教育学会名誉会長、千人会会員　　**小池　生夫**

このたび大学セミナーハウス開館50周年記念会を開催されるのは誠に慶賀に堪えない。この機会に JACET の発展の基礎になったサマーセミナーの活動を思い出し、大変お世話になった大学セミナーハウスに厚く御礼を申し上げたい。

本学会は1962年創立の大学英語教育発展のための研究と教育の「運動体」として、本年第55回年次大会を開催した会員2,800を擁する国際学会である。当時、大学では一般教育としての外国語の必修担当の英語教員の多くは英米文学の専門家として自負を持ち、英語を一般教育課程で教えるのは仮の姿であると自任していた。この中で、一部の先導的な英語教員がこの風潮を憂いて本学会を創設したものである。発足時、会員は120名であり、特に若手の不足は最大の問題であった。この中で、米国在日フルブライド委員会は日本の英語教育改革を目指し、JACET に若手の大学英語教員の研修を国内で実施することへの協力依頼をしてきた。理事会はこれを受けて、共催でサマーセミナーを実施することを決定し、同委員会は当時オープンして２年目の大学セミナーハウスに利用を申し入れたのである。1967年７月17日から８月４日まで30名の全国から選ばれた若手の英語教員がユニットハウスに泊まりこみ、著名な W. Nelson Francis 教授（Brown Univ.）の講義、若手の米国人教授による英語の訓練、大学英語教育改革の自主討論などを集中訓練方式で実施した。こうして JACET セミナーは1991年頃まで飯田専務理事他の事務職員の皆さまにお世話になったのである。これは今夏第43回セミナーを京都大学で実施した。この間のセミナー参加者は同じ釜の飯を食べた経験を大事にし、本学会活動の中核として日本の英語教育改革のために活躍した。セミナーハウスの支援がなければ、このような長期の泊まり込みセミナーは実現せず、JACET の発展、ひいては日本の英語教育の改革もなかったであろう。

大学セミナーハウスのご発展を

千人会会員　　**後藤　敏明**

大学セミナーハウス開館50周年おめでとうございます。

私の父が八王子市教育長時代にセミナーハウスが開館し、父の送迎を行ったことがありました。当時、大学生だった私は、特徴のある建物と小鳥が囀る静かなところだったと覚えていました。

その後、八王子市長を３期務め、平成15年３月に亡くなった父に誕生日カードが届き、千人会の存在を知りました。私の住まいがセミナーハウスから約１キロの距離にあり、カードを持って亡くなったことを伝えました。すると対応された担当者の熱意におされ、その場で千人会に入ることになり、２代目としてバトンタッチした次第です。あれから十数年、毎年会費を納めに散歩がてら立ち寄らせていただき、まわりの施設の充実ぶりに驚いています。

地元の人間として、今後セミナーハウスと地域の交流を増やし、活性化を図っていただき、益々のご発展を祈っています。

大学セミナーハウスとの出会い

国立音楽大学名誉教授、千人会会員　　**佐藤　公孝**

それは七周年記念式典の参加から始まります。

飯田宗一郎先生（専務理事→館長）から、音楽での式典参加のご依頼があり、私の指揮のもと、国立音楽大学イリス合唱団と共に、参列させて頂きました。

国立音楽大学は、協力会員校ではありませんでしたが、度々お声をかけて頂き、微力ながら幾つかの式典で、合唱演

奏をさせて頂きました。これらに関しては、創立十年史・開館七年史『大學を開く』飯田先生により書かれています。

その様な関係から、千人会へお誘いを受けて、入会をさせて頂きました。数々の行事に参加、勉強をさせて頂きました。

指導を致しております、幾つかの合唱団の、合宿をさせて頂き、緑溢れる樹々に囲まれて、良い練習が出来た、思い出があります。

今は、定年退職して数年後に、イリス合唱団は、人数が集まらず廃部になりました。

大学セミナーハウスから、何時も、歌声が絶えない様な、文化、芸術に包まれたキャンパスで、賑わってくれると良いですね。

この三月で、千人会を退会致しましたが、大学セミナーハウスにおかれましては、学生、教員はじめ、沢山の関わりを持たれた方々の、研究・研鑽の機関として、益々ご発展されます事を願っています。

大学セミナーハウスと私

恵泉女学園大学短期大学部元事務長、千人会会員　　**島田　治夫**

記憶が定かでない年齢になったので、最初の関わりも何であったかはっきりしない。ただ、創設者の一人が熱心なクリスチャンであったと聞いている。私もクリスチャンの端くれとして、感銘を受け応援しだしたのかも知れない。一人の熱意が多くの人を巻き込んで無から有を作り出すことは、何時の世でも起こりうることではあるが、私にとって感動的であったのであろう。

その後、現在に至るまで多くの若い人が集い、多くのことを学びあい刺激を与えあう良き場となったことと信じている。この伝統と使命が、今後さらにグローバルに展開され、結果的に世界平和に貢献することを期待している。

大学セミナーハウス50周年を祝して

大学セミナーハウス元食堂業務課長、千人会会員　　**酢屋　善元**

昭和40年11月１日、大学セミナーハウスの落成式に、最初の企画から財団の設立に尽力され、当日は健康がすぐれず、祝電披露のみとなった日本女子大学の上代たの先生が、後日【セミナー・ハウス】第４号に、メッセージを寄せられました。以下はその一節です。

先生は、「今後、この丘の上でどのような新しい生命の芽がはぐくみ育てられることであろうか。どのような奇跡的そして偉大な仕事をなし得る力の基礎が築かれることであろうか。大いなる精神のめざめと躍動がここに生まれ有形無形に新しい日本を reshape し、またひいては人類の幸福と繁栄のために直接間接に貢献しうる人をこの丘の上から社会に送りだすことが出来るであろうか。私の夢は限りなく大きくひろがって行く。」とセミナーハウスの前途を祝福されました。今、自分がセミナーハウスの50周年を心から喜んでいる一人として、しみじみとした充足感を味わっています。感謝。

「時間がない」という貧困をこえて

駒沢大学名誉教授、千人会会員　　**瀬戸岡　紘**

ここ数十年、世のなかは随分忙しくなりました。その結果、生産性はあがり、科学も技術も加速度的に進歩し、人々は豊かになったかに思われるかもしれません。しかし、優れた芸術作品が多く生みだされたヨーロッパのルネッサンス期、クラシック音楽の名曲があいついで作曲された18～19世紀、個性的な科学的発見がつづいた19世紀などと比べると、現代はどうでしょうか。

豊かさの内容として大切なものは、物的・金銭的なもの以上に「時間の豊かさ」にある、と私は考えています。「術」の字のつくもの「芸術・学術・技術」で優れたものを創りだそうとするとき、「時間がない」ことは最悪の環境です。そう考えるとき、われわれは、現代という時代が案外貧しい時代になっていることに気がつきます。

大学セミナーハウスの大食堂には「思想は高潔に　生活は簡素に」、“Plain living and high thinking”の標語がかかげられています。この標語が暗に語っていることは、まずは「落ち着いた、ゆったりした時間をもとう」ということです。あわただしい現代、われわれは、あらためてその意味を深く理解したいものです。

教育研修の最適な場

放送大学名誉教授、千人会会員　　**滝口　俊子**

私が初めて大学セミナーハウスを知ったのは、大学の先輩教員（故村上泰治先生）から千人会に誘われた、30代のことでした。その後、日本心理臨床学会の教育・研修委員長を務めるようになって、理事長河合隼雄先生が若手会員の資

質向上に熱心でいらしたこともあり、全国の大学院生を対象にセミナーハウスに宿泊して研修会を開催しました。

学問の発展に意欲を燃やしていた教育・研修委員は全員、故人になられた河合隼雄先生・小川捷之先生や、新進気鋭の北山修先生も、学生たちと寝食を共にしてくださいました。

グループに分かれての、各リーダーは、大学院の助手さんたちに依頼しました。グループリーダーの方々は、今、大学教授として活躍しておられます。学生であった参加者たちも、社会的に責任ある立場で頑張っています。

各地から集まるのに便利で、木々に囲まれ、小鳥たちのさえずりの声の聴こえるセミナーハウスは、学び合うのに最適な場所でした。

大学セミナーハウスとアクティブ・ラーニング

中央大学名誉教授　**田中　拓男**

セミナーハウスは、建設の当初からゼミ学生たちの自主的能動的なアクティブ・ラーニングにとって必要不可欠な作業場でした。30数年のゼミ活動を振り返って先日『アクティブ・ラーニング』(Amazon 販売)を上梓しましたが、セミナーハウスのお陰でゼミの自主的な学習活動を成功裡に展開することができたこと、深い感謝の気持ちでいっぱいです。

入ゼミ試験が終わるとすぐにセミナーハウスに行き、田中ゼミ独特のアクティブ・ラーニング、すなわち、５つ程度の課題別チームの自主的な学習方法や先輩チームの活動実績などについて説明し、その後も必要に応じて学生の自主的チーム活動の相談指導を繰り返したが、秋には、各チームが夏季休暇中に行った海外現地調査の成果を持ち寄り、各部屋に分かれてチーム論文の執筆作業に懸命に取り組みました。私も夜を徹して添削指導に忙しく、虫の鳴き声に疲れを癒していました。懐かしい思い出がいっぱいのセミナーハウスです。

大学セミナーハウスの思い出

東京大学名誉教授、千人会会員　**肥前　榮一**

松田智雄（東大)、大野英二（京大）の両先生のお供をして、セミナーハウスにはじめてお邪魔したのはいまから半世紀も前、開館直後の、まだ本館しかなかった頃のことだ。

それ以来ずいぶんお世話になったのだが、一番思い出深かったのは1990年代に、気の合った３人の若い友人たち（鈴木健夫［早大]、小島修一［甲南大]、佐藤芳行［新潟大]）とウェーバー「ロシアの外見的立憲制への移行」の研究会を長期にわたって開催したことだ。閑静な環境の中で朝から自由闊達に議論し、午後には疲れると散歩し、夜に入っては氷片の浮かんだウィスキーも加わって、作業は快調にはかどったものだ。その成果を訳業として上梓することができた（マックス・ウェーバー『ロシア革命論Ⅱ』名大出版会、1998年)。翻訳の共同作業の成功にはメンバーの人選が決定的に重要であることをこの時に知ったが、同時にセミナーハウスの環境の良さもそれに劣らず重要であったと思う。

国際的な発展

中央大学名誉教授、千人会会員　**檜田　信男**

1965年頃から相当回数にわたり私の所属大学セミナーの春期合宿ということで利用させていただきました。飯田先生の御発想かと思うのですが逆ピラミッドの本館に接して度肝を抜かれたり、ときには降雪の日に日程の予約をしてありその時には失敗したと思ったのでしたが学生諸君と一緒に本館の前の丘の雪かきをしたりしたことが、最早半世紀近く前になるのですが、懐かしく想い出されます。当時の学生諸君もすでに還暦を過ぎ、激烈な就職試験を経て入社した会社も定年になる方がおられると聞いています。八王子の千人同心にちなんで千人会会員に誘われてからも相当年数になってしましました。私の教員生活で大きな精神的な支えになったセミナーハウスには心から感謝しております。今後も国際的な輪を広げて一層発展されますことを願っております。

私とセミナーハウス

名城大学経済学部教授、千人会会員　**松尾　秀雄**

あれはいつのことだっただろうか。私は、大学の３年生で、東大経済学部の山口ゼミに所属し、ゼミ合宿に参加していた。その時のゼミでは、西伊豆の戸田寮に行き、戸田の港を泳いでいた。あの夏の日が鮮やかに甦る。

私が大学院に進学してから、山口重克先生から、君も学部のゼミに参加してくれ、と言われて行ったのが、八王子の大学セミナーハウスであった。これがセミナーハウスとの関わりの始まりであった。1975年の夏のことだったと思う。この時は、大学の個々の枠が外されたセミナーハウスがあることに感動し、また、合宿専用の施設としての風格、施設としての規模の大きさと質素な生活リズム、これらに驚いた。山というか丘というか、一つの有機体を形成していた。

ノアの箱船を想像させる本館の建築美にも共鳴した。皆で支え合うという趣旨に賛同し、千人会に入会させていただいた。今では、名古屋の名城大学の松尾ゼミの学生と、合宿研究会の場として、故郷に帰る思いで、利用させていただいている。

輝かしいセミナーハウス

神奈川大学外国語学部名誉教授、千人会会員　　**松山　正男**

敗戦後、新制大学は発足したが、最も必要とされた英語教育は混乱をきわめていた。そこで大学教員の有志200名が立ち上がり、1962年に大学英語教育学会（JACET）が発足した。東大教養学部長朱牟田夏雄先生が初代会長として最も効果的に改善する方法として若手教員30名を募集し３週間の英米の一流学者の指導のもとで留学したのと同様な厳しい訓練をおこなった。東京外語大学長小川芳男先生が第二代会長となり英米の大使館の協力で海外の最高の学者を次々と招聘しセミナーはさらに、20回以後は会場をハワイ大学、ケンブリッジ大学２回、オランダ、北欧で開催、それ以後は日本各地、特に草津で40回以上夏期セミナーを現在も続けている。過去50年前を振り返ってみると主要な大学英語教員が八王子大学セミナーハウスでの合宿の経験者であり、創立者の飯田館長に心から感謝している。私どもと同じように八王子セミナーハウスで充実した研修を後輩たちが味わい我が国の教育に貢献することを切に期待している。日本の教育の未来はセミナーハウスの発展にかかっていると確認する。

颱風・青空・初合宿～1970年代初めの思い出～

津田塾大学英文学科教授、千人会会員　　**村上　健**

夜を徹した議論が一段落した早朝、ユニットハウスのセミナー室の扉を開けると、颱風一過、初秋の冷気の向こうに高く澄んだ青空が拡がっていた。入口の斜め前の立木が、少し見上げる程の位置で折れて倒れ、眼前の小径をふさいでいる。昨夜の嵐はとても激しかったが、私達の仲間で、倒木に気付いた者は誰一人いなかった。

あれは1970年代初めのことだから、1965年開館のセミナーハウスが７周年を迎えた頃だったろうか。文系・理系を問わず集まった１～２年生が半年間参加したのは、松尾浩也先生（刑事訴訟法）主催の≪生命の尊厳と法律≫という「自主ゼミ」で、その１泊２日の合宿が、私にとっての今でも忘れられぬセミナーハウス初体験となった。

当時は出雲から上京するのにほぼ丸一日を要したが、都心から一時間程の移動で、野猿でも出そうな自然の中で徹夜の議論を交わす合宿が出来ることだけでも、大きな驚きであり、この上もない幸せだったことを想い出す。

私にとっての大学セミナーハウス

東京農工大学名誉教授、千人会会員　　**柳下　登**

開館50周年をお祝い申し上げます。

貴館にゼミ合宿、一般教育学会などでお世話になった。大学セミナーハウスについては、亡き兄（横浜市立大学名誉教授）によい所だからと勧められていた。多摩在住の私が横浜の兄に先を越され感じであった。そこで早速ゼミ合宿を行うことにした。

行ってみると逆三角の奇異な建物に驚かされた。学問をするには既成の考えに囚われるなと教えられた感があった。その後大学セミナーハウスの反対側の丘にある農工大学の研究圃場を使って私の育種事業が行われた。そのこともあり学生とよく「交友館」で飲食と交流を楽しんだ。いつしかそこを「峠の茶屋」と呼ぶようになった。行く途中「いろは坂」を通り抜けて行くので「峠の茶屋」がふさわしかった。茶屋で丹沢の山々も展望できた。

大学セミナーハウスに通うことで、逆三角形に刺激され、峠の茶屋で癒された私たちは30年以上経った今もそこを忘れられない。

思い出の書物ーアルカディアー

慶應義塾大学名誉教授、大妻女子大学名誉教授、千人会会員　　**山岸　健**

大学セミナーハウスについては、あふれるばかりの思いを抱いている。このハウスは、その立地と地形、景観と風景、さまざまな企画とセミナーの運営という点においてすばらしいアルカディア（平和郷・理想郷）だ。ハウスは家、住居－サン＝テグジュペリは、ハウスは夕べには思い出の書物になるという。八王子の丘陵地に姿を見せているこのハウス－書物は数々のエピソードやドラマによって彩られている特別な書物なのである。

草創期からこれまでさまざまなかたちでセミナーハウスと深い縁があったことを思い出す。感謝の念が強い。共同セミナーの委員として「ロビンソン・クルーソーと現代」を初めとして映画のセミナーなどいくつものプランを実施した。

岡 宏子先生が委員長、私が副委員長だった。社会学の大学合同セミナーを計画して教員や学生の方々と意義深い日々を過ごすことができた。

中川秀恭先生や飯田宗一郎氏、数々の先生方やセミナーに参加した各大学の学生の姿をなつかしく思い浮かべている。このハウスはあらゆる意味で〈記念〉そのものだ。このハウス－書物は私自身の生活史の大切なひとつの支柱となっている。特別な大地である。

大学セミナーハウス開館50周年を祝って

東京大学名誉教授、青山学院大学名誉教授、千人会会員　**渡邉　昭夫**

私と八王子大学セミナーハウスとの関係は約40年前にさかのぼる。オーストラリアと香港で数年を過ごしてから明治大学に職を得て帰国したのが、1971年の春であった。すぐに国際政治のゼミを持ち、関東地区の幾つかの大学で外交や国際関係のゼミを持っている先生方との関係ができた。慶応大学の池井優、成蹊大学の宇野重昭、一橋大学の細谷千博などの諸先生である。これらの先生方が７大学共同セミナーと称してセミナーハウスで毎年勉強会を開いていた。１年か２年遅れて明治大学の渡邉ゼミもそれに加えていただき、８大学、やがては他の大学も加わり最近では10大ゼミの名でその伝統は続いている。明治を辞めてから青山学院大学にうつってからも、二つの大学の渡邉ゼミがこれに参加してきた。10大ゼミの卒業生の総数は正確にはしらないが、相当な数に上り、今日の学界の最前線で活躍中の人も少なくない。私が参加した当時は飯田宗一郎館長の時代で、共同ゼミの打ち上げの際に館長から「生活は質素に、思想は高く」のモットーに基づく訓話をお聞きするのが例であった。このことを知るだけでも、過去50年間に、八王子大学セミナーハウスの果たした役割は小さいものでないことがわかる。次の50年間にもこの伝統は受け継がれていくのは間違いないと信じている。

「大学セミナー・ハウス」資金ぐりにメド

〝対話の場守ろう〟と

支援の「千人会」誕生　学者ら財界人寄金

写真は1968年５月６日付けの読売新聞の千人会を報道する記事である。1967年７月に大学セミナーハウスの運営を支えるための個人からなる後援組織としての千人会が発足し、２か月足らずの間に100件を超える申し込みがあり、1975年７月には加入者が千人に達した。

前　史　大学教育に欠かせない新たな場づくり……法人設立から開館まで（1962-1965）

第１節　法人設立の背景

１．一人の大学人の思い

大学セミナー・ハウスの構想は、一人の大学人の思いが、当時の教育界と財界有力者の方々の理解と共感をえて実現したものである。

時は戦後の昭和三十年代、ベビーブーム世代が成長した時期にあたり、就学児童数の急増に伴い、高校の進学率が高くなり、大学の入学定員も拡大された。学生数の増加によって大学教育の規模は大きくなったものの、教育環境の改善がそれに追いつかず、教授と学生とのコミュニケーションがうまく取れない状態にあった。このような大学教育の在り方に強く疑問を感じる一人の大学人がいた。飯田宗一郎（1910～2000）である。

飯田　宗一郎

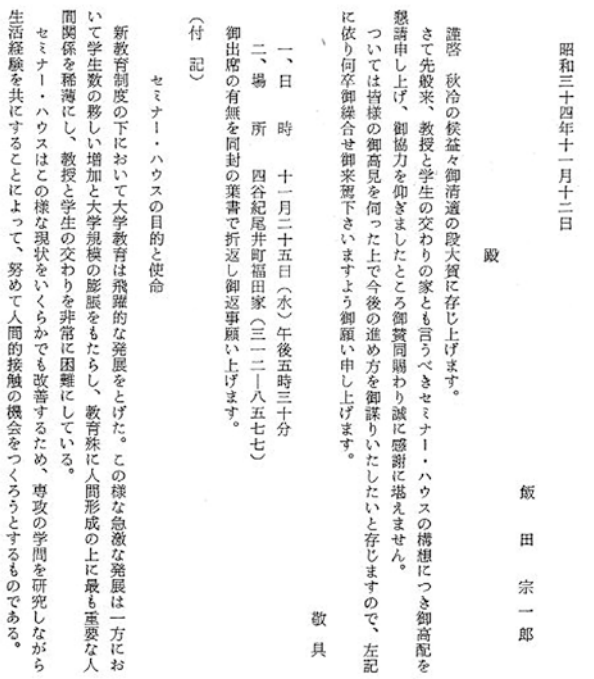
飯田は同志社大学を卒業後、大学の職員として勤務していた。戦後大学のマスプロ教育の弊害を目のあたりにして、この閉ざされた日本の大学社会を変えるべきだと考えた。

1959年、安保改正反対運動が始まった年、50歳になった飯田は、大学職員の職を辞し、日本の大学教育に欠けたものを補うための独自の改革案を抱え、その実現のために理解者を求めて動き出した。彼はまず、自分と同じクエーカー教徒で当時日本女子大学学長の上代たの（1882-1982）氏に自分の構想を書き送ったうえ、上代氏を訪ねた。自分の構想に共感を示された上代氏に会ったことで、飯田は具体的に計画を立てて推進しようと思った。

上代　たの

戦後大学の「マスプロ教育の弊害と、閉ざされた日本の大学社会を内面的に改革する道」として「日本流の塾とヨーロッパ流のゼミナールを合わせたような学舎」を作り、その学舎に全国の大学から多分野の先生、学生が来てくれれば、閉鎖的な大学の壁がここで取り除かれ、「人間不信、教育不在」、日ごろ話し合いも少なくなりがちな教室の雰囲気を変え、親密な人間関係を作ってもらうようになるというのが飯田の考えだった。そのような「教師と学生との心の交流を作る合宿研修センター」の設立には、国公私立大学が共同で当たる必要があり、飯田は東京大学と早稲田大学に協力を求めて、当時の茅誠司（1898-1988）東大総長と大浜信泉（1891-1976）早稲田大学総長を訪ね、両総長の理解と関心をうることができた。こうして、国公私立の枠組を超えた大学共同の施設にふさわしい強力な支援者がえられ、飯田の大学セミナー・ハウスの構想が実現可能なものとなり、彼の努力も「inter-personal」から「inter-university」へと一歩進んだ。

茅　誠司



昭和三十四年十一月十二日

殿

飯田　宗一郎

謹啓　秋冷の候益々御清適の段大賀に存じ上げます。

さて先般来、教授と学生の交わりの家とも言うべきセミナー・ハウスの構想につき御高配を懇請申し上げ、御協力を仰ぎましたところ御賛同賜わり誠に感謝に堪えません。

ついては皆様の御高見を伺った上で今後の進め方を御謀りいたしたいと存じますので、左記に依り何卒御繰合せ御来駕下さいますよう御願い申し上げます。

敬具

一、日　時　十一月二十五日（水）午後五時三十分

二、場　所　四谷紀尾井町福田家（三一二―八五七七）

御出席の有無を同封の葉書で折返し御返事願い上げます。

（付　記）

セミナー・ハウスの目的と使命

新教育制度の下において大学教育は飛躍的な発展をとげた。この様な急激な発展は一方において学生数の夥しい増加と大学規模の膨脹をもたらし、教育殊に人間形成の上に最も重要な人間関係を稀薄にし、教授と学生の交わりを非常に困難にしている。

セミナー・ハウスはこの様な現状をいくらかでも改善するため、専攻の学問を研究しながら生活経験を共にすることによって、努めて人間的接触の機会をつくろうとするものである。

同志会招待状

同じ年の11月25日、大学セミナー・ハウス建設の気運を作るために、飯田が一提唱者の名義で東京大学総長、早稲田大学総長、日本女子大学学長、自分の構想に共感もつ慶應義塾・一橋・東京・東京教育大学の教授ら宛に招待状を送り、四谷の福田家に最初の同志会を開いた。その会合で、来会者全員が飯田の「セミナー・ハウスの目的と使命」に賛同を示した。同志会の後、大学セミナー・ハウスの構想が大学人の間で幅広く伝わっていった。

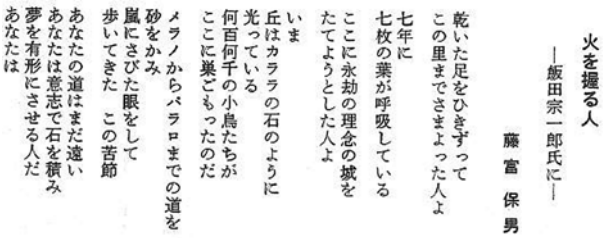
しかし、構想の実現には大きな資金が必要となる。飯田にとっては財界の協力者を探すことが焦眉の急であった。

のちに、大学セミナー・ハウス理事長となった早稲田大学大浜総長が「開館三周年と私の期待－標語の額面にそえて」の一文を書き、当時のことについて次のように述べられている。

大浜　信泉

「はじめてその構想をきいたとき、現代の大学教育にかけているものを補う意味で、まことに望ましいことではあるが、さて、その実現となると、まったく雲をつかむようなもので、正直なところ自信がもてなかった。ところで、人間の一念はおそろしいもので、飯田氏の執拗なほどの熱心な勧誘によって、大学の関係者の間にだんだん共鳴者が増え、これに対応して財界にも応援者が現れてとにかくあれだけの施設が出来上がり、さらに年を追うて拡充されつつあるのである。」（『セミナー・ハウス』第14号）

また、飯田宗一郎の熱意を称える詩がある。開館七周年記念の時に「大学セミナー・ハウス賛歌」を作詞した藤富保男氏より「火を握る人」という題の詩を当時の専務理事飯田宗一郎宛に贈られた。そして、開館９周年時に製作した銅板レリーフにこの詩を刻み、ようこそ広場に建てられている。


火を握る人
―飯田宗一郎氏に―
藤富保男
乾いた足をひきずって
この里までさまよった人よ
七年に
七枚の葉が呼吸している
ここに永劫の理念の城を
たてようとした人よ
いま
丘はカラの石のように
光っている
何百何千の小鳥たちが
ここに巣ごもったのだ
メラノからパラロまでの道を
砂をかみ
嵐にさびた眼をして
歩いてきた　この苦節
あなたの道はまだ遠い
あなたは意志で石を積み
夢を有形にさせる人だ
あなたは

２．思いから形へ

1961年７月21日、飯田は茅・大浜両総長とともに、当時三井銀行会長の佐藤喜一郎氏（1894-1974）を訪ね、募金活動の協力を懇請した。佐藤氏は、大学セミナー・ハウス建設の構想が国公私立の共同使用に益する点に共鳴を示され、協力の要請を受け入れた。時あたかも安保改正反対運動が過激化し国会周辺で学生が警官と衝突するような大事件もあって、大学総長である茅・大浜両氏は学の内外に発生する事態に対処せねばならず計画は一年遅れの進行だった。

佐藤　喜一郎

財界の協力をえたことにより、大学セミナー・ハウスの建設は可能になったが、思いを形にするには、計画をステップバイステップで進めなければならなかった。

まずは法人をつくり、募金活動を開始することである。しかし、法人の設立や寄附金免税の許可をえるためには次の３つの条件を揃えなければならない。

一、法人基本金として最低500万円が必要であること。

二、法人が財団法人でなければ、大蔵省から免税取扱の許可がえられないこと。

三、施設を作る建設用地が確保されていること。

建設資金の募金について、８月18日に当時の有力な財界人を銀行倶楽部に招き、大学セミナー・ハウス建設計画と事業の目的についての説明会を開いた。財団法人の設立に向けて、９月４日に大学側の法人設立準備委員会を四谷の福田家で開催し、11月１日に三井銀行本町支店ビル内に「財団法人大学セミナー・ハウス」設立準備事務所を開設した。また、同30日に丸の内の日本工業倶楽部において財団法人設立発起人会を開き、国公私立大学13校をもって法人を発足することがそこに議決された。

財団法人設立発起人会メンバー写真　1961年11月30日

1962年３月19日に文部省に申請書を提出し、３月31日付をもって「財団法人大学セミナー・ハウス」設立が許可された。法人の設立の許可後まもなく、建設用地も京王電鉄から譲渡（公簿面積は14,985坪、譲渡価格は49,772,476円）を受け、大学セミナー・ハウス建設地は八王子の柚木村下柚木の中山地区に決められた。

法人を設立し、建設地も決めたので、いよいよ大学セミナー・ハウス施設の建設に着手する段階となった。

後援会の発会（1962年９月19日・東京大学懐徳館）

資金の工面について、５月30日に東京都知事の寄附募集許可、８月11日に大蔵大臣の免税取扱許可をいただき、９月19日に東京大学懐徳館で佐藤喜一郎氏を座長（主宰）とする建設後援会の創立総会兼発会祝賀パーティーが開かれ、三億円募金活動が開始された。建設後援会のメン

大学セミナー・ハウス建設資金募集趣意書

財団法人大学セミナー・ハウスは，わが国の大学教育の向上発展を目指して，昭和37年３月31日，国公私立大学有志校の発起によって設立されました。今回この法人の重要な事業である学生のためのセミナー・ハウスの建設を計画いたします。一言にしていえばセミナー・ハウスは教授と学生が研究をともにし，生活をともにする場所であります。

新制大学が豊かな教養と広い知見，健全な人世観と世界観との涵養を目的として発足いたしましたが，単なる教室の時間だけでは，このような目的を達成することは困難であります。近年わが国の大学において教授と学生との人格的交わりの薄いことや，人間をつくる修練の機会の少ないことが問題としてとり上げられるようになり，このような現状に対処して，何かが為さるべきではなかろうかと要望されているが，その何かに対する具体的な一つの試みが，セミナー・ハウスの構想なのであります。本法人の刊行になる「大学と人間」をご高読下さいますならば，主なる国公私立大学の主脳者が思いを一つにし，学生を対象とするこのような施設の必要を提唱する理由をご了承いただけると存じます。

またこのセミナー・ハウスは国公私立にわたる諸大学が使用する共同の施設であり，関連のある学問分野の研究者や学生などが共同のセミナーを開く場所であることに一大特色があります。このことは大学相互の理解を深め，かつ精神的交流を円滑にするからであります。

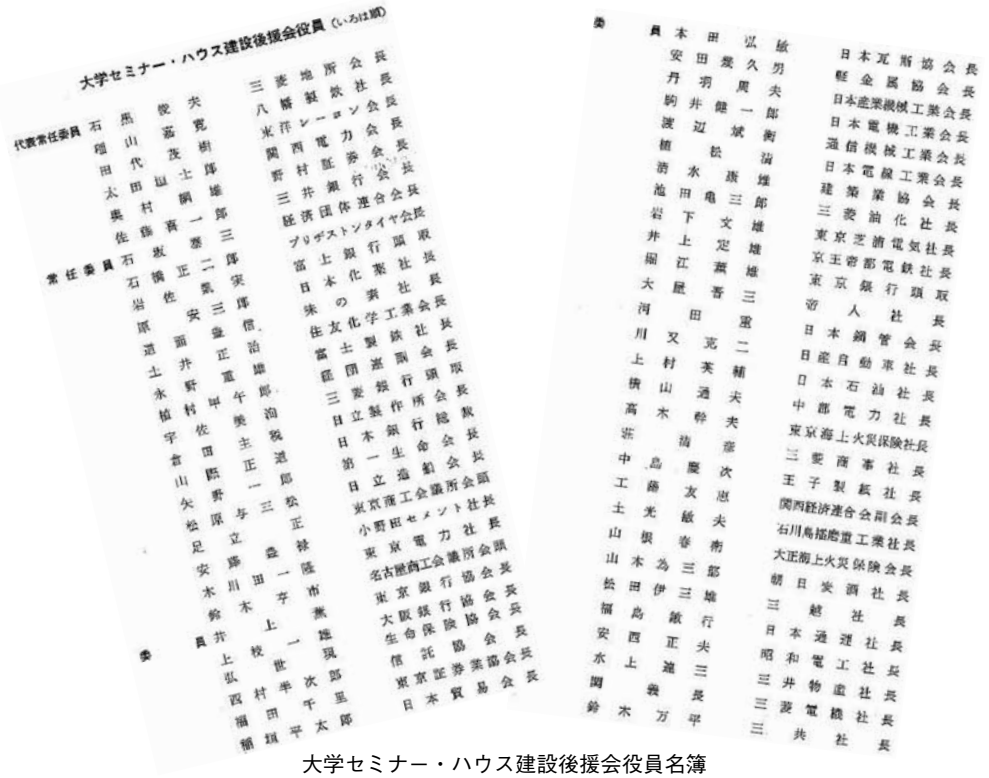
何とぞセミナー・ハウスの建設の重要性をご認識下され，開拓者的構想の実現にご支援賜わるよう諸賢のご協力を期待して已みません。

バーは三井銀行会長の佐藤喜一郎氏をはじめ、三菱地所石黒俊夫会長、八幡製鉄稲山嘉寛社長、東洋レーヨン田代茂樹会長、関西電力太田垣士郎会長、野村証券奥村綱雄会長、経団連石坂泰三会長等50名、当時の日本財界のトップクラスと言える名士がそろった。その後は三つの指定寄付期間を経て、1965年５月に法人及び個人寄附合わせて260,073,851円、文部省補助金30,000,000円、計290,073,851円の資金が集まった。

施設建築の設計は早稲田大学の吉阪隆正教授（1917-1980）に依頼した。吉阪教授はＵ研究室の創設者で、フランスの有名な建築家、近代建築の巨匠ル・コルビュジエ（1887-1965）のもとで学び働いたことがあり、マルセイユのユニテ・ダビタシオンの工事監理を担当し、ヴェネチア・ビエンナーレ日本館、浦邸、アテネ・フランセ等の代表作がある方であった。吉阪教授は建築設計の際、大学セミナー・ハウスの構想を念頭にまずは大学セミナー・ハウスを象徴できる形はなにかを考え、そのうえ、多摩丘陵の自然を生かし、200名の教職員がグループに分けて同時に滞在できる宿舎とセミナー室の配置を考えた。

吉阪　隆正

施設の建築を手掛けてからはや三年近くの歳月が過ぎ、八王子下柚木14,985坪の多摩丘陵の上に大学セミナー・ハウスの建物が完成した。「建築群は多摩丘陵の最高地点と稜線を虚にして、二つの谷間に施設を振り分け、その交点で立体交差をさせた」。宿舎は多数の独立建てとし、全体として村のようにし、人々の集まりの大小に応じやすく、自然への接触が十分にできるようになっていた。最も注目されるのが楔を大地に打ち込むような形の本館だった。まさに飯田の「こころ」は吉阪の手によって「かたち」となった。



大学セミナー・ハウス建設後援会役員名簿

落成時の写真（1965年）

開館２年後の写真（1967年）

後年、建築業界誌の編集長が大学セミナー・ハウスの建築群について、次のように語っている。

「そもそも大学セミナー・ハウスとは何なのか？それはひとりの男の夢が現実のものとなった新しい学問の場であった。（略）吉阪は飯田の『こころ』を見事に『かたち』にした。それは楔をイメージした本館だけではない。100棟の宿舎（ユニットハウス）は大地から生えるキノコをイメージしたものだ。教師館、講堂、中央セミナー館など、どれもユニークな「かたち」をしている。この個性的建築が自然と融合し、互いに交り合う総体が、「知」の交流の場である大学セミナー・ハウスの「こころ」を体現した。」（by Keiichiro Fujisaki、『Casa BRUTUS』2003年12月号）

大学セミナー・ハウス設立趣意書

大学教育は新制度の下において目覚ましい発展をとげ、学生数は著しく増加し、その規模は拡大した。しかしながら外観の膨張は、他面において人格形成上最も必要な教授と学生の個人的接触を困難にしている。このような好ましくない教育的環境を改善するために何かが為さるべきであるという意見が存在している。

Seminar　House はそのような何かを具体化する一つの開拓者的構想に基づく。新しい時代には新しい形式の人間形成の方法が創造さるべきである。Seminar　House は指導教授を中心とする学生の小集団に対し研学、修練、交際の場を提供することを主たる目的とし、そのために合宿的集団生活の形式をとる。

他方同じまたは関連のある学問分野の研究者や学生或いは各大学行政者が、セミナーを開くためにも国公私立を超えた立場の施設が最も望ましい。Seminar　House は大学相互の諸活動を円滑することを第一の目的としている。

これを要するに Seminar　House は大学という機構の外にあって、大学教育並びに大学相互の交流に協力する奉仕機関である。

昭和37年３月20日

法人設立時の役員

理 事 長　　東京大学名誉教授　石舘　守三
常務理事　　設立提唱者　飯田　宗一郎

理　　事		参与	
東京大学総長	茅　　誠司	慶応義塾大学教授	佐原　六郎
早稲田大学総長	大浜　信泉	同	原島　　進
日本女子大学長	上代　たの	東京大学教授	小谷　正雄
一橋大学長	高橋　泰蔵	東京教育大学教授	岡田　謙
慶応義塾長	高村　象平	一橋大学教授	田上　穣治
東京工業大学長	山内　俊吉	早稲田大学教授	島田　孝一
立教大学総長	松下　正寿		
東京都立大学総長	永井　雄三郎		
上智大学長	大泉　　孝		
明治大学総長	佐々木　吉郎		
東京教育大学長	朝永　振一郎		
中央大学総長	升本　喜兵衛		
青山学院長	大木　金次郎		

第２節　法人の設立と期待される役割

１．設立の理念と経営組織

「財団法人大学セミナー・ハウス」の設立は、一人の大学人の思いと彼の「執拗なほどの熱心な勧誘によって」、戦後の新制大学教育改革の必要性を感じた、当時の国公私立の学長や有志の教授らを動かし、また財界人の支援をうけたからこそ実現できたものである。いつの時代にも社会の変動に即応し、新時代に対処してゆく必要がある。「財団法人大学セミナー・ハウス」という教育施設の誕生は、その時代の大学教育のあるべき姿を問うた結果であり、戦後日本の人材育成をよりよくするための教育環境整備の特例だと言えよう。

法人設立の理念は、飯田宗一郎が1959年11月12日に提起した「セミナー・ハウスの目的と使命」がその最初である。それをベースに、戦後大学のマンモス化とマスプロ教育に問題があったとの共通認識をもつ法人設立者たちは、青春の情熱を抱いて入学してくる学生の学問に対する熱意が冷却されないよう、「マスプロ教育の弊害を少しでも軽減し、教師と学生が向き合い、さらに学生相互間の接触による教育を復活する」目的を定め、大学という機構の外にあって、大学教育と大学相互の交流に協力し、大学に欠けたものを補う奉仕活動の展開を法人の使命であると考えた。さらに、同じ大学の学生と教師、また互いに違った大学の人々が大学セミナー・ハウスで起居を共にし、語り合い、人文、社会、自然科学などそれぞれ違った分野の人々が相互に交流する、そのような場所になることを念願した。

かような法人設立の主旨を『大学と人間－人間形成の新しい方向を求めて』という文庫の形で1962年、世間に公表した。本書の執筆者は石館守三、茅誠司、森戸辰男、平塚益徳、海後宗臣、松田智雄、林竹二、永井道雄、手塚富雄、小谷正雄、飯田宗一郎といった大学セミナー・ハウスの設立に携わった方々、または大学セミナー・ハウスに関心をもつ当時大学教育の第一線に活躍された方々であった。

大学セミナー・ハウスの設立によって一大学内の教師と学生、学生と学生の接触だけにとどまらず、大学と大学とにまたがる交流が実現し、そこに広い範囲の友情と励ましあいが成立、全国大学間の共通意識はその事実を基礎にして、本当の意味で確立することが期待されると考えられた。

法人の経営組織及び経営責任者について1964年11月７日丸の内銀行クラブに評議員会が開催され、次のように定められた。

大学セミナー・ハウスを報道する新聞諸紙

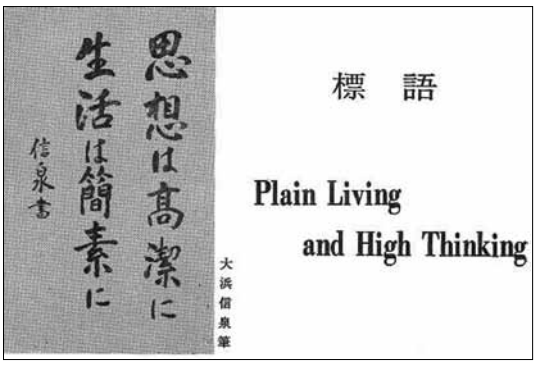
『大学と人間―人間形成の新しい方向を求めて』1962年出版

法人の代表者は理事長であるが、大学セミナー・ハウスという教育事業の最高責任者として館長制及び専務制を敷く。

事業報告とセミナー講義の内容を関係者の方々に報告するために法人ニュース、『セミナー・ハウス』を定期的に発行する。

そして、初代の館長は大浜信泉早稲田大学総長、上代たの日本女子大学長と共に大学セミナー・ハウス構想推進の「三本柱」と言われ、「大学教育に高い知見、厚い愛情」を持った前東京大学長の茅誠司が委嘱された。

こうして、大学セミナー・ハウスは「日本の大学教育のなかに誕生する小さな機関」としてスタートした。



Plain living and high thinking は，イギリスの大詩人ワーズワスが1802年９月ロンドンで，親友コウルリジにあてて書いた有名な14行詩の中に出ている。当時ロンドン人の生活は華美浮薄で，自然界や書物のなかに見られる壮大なものに対する関心がなく，全く物欲に駆られているので，素樸な生活も高遠な思想もなくなり，また質素な暮らし方も気高い考え方もなくなり，昔ながらのなつかしい主張の地味な美わしさも見られなくなったと痛歎した時の言葉である。ワーズワスは，人には不屈不撓の精神があることを man's unconquerable mind と言い，また国民が偉大で自由であるにはただ魂によるものだ――By the soul Only, the nations shall be great and free と言った。ともに併せて読めば，上記標語の意味が一層よく汲みとられるであろう。（解説・文学博士　斎藤　勇）

大学セミナー・ハウスの標語としてイギリスの大詩人ワーズワースの詩の一句“Plain Living and High Thinking”が選ばれた。日本語に訳して「思想は高潔に、生活は簡素に」（丸山真男訳）となる。この標語は法人設立の目的と使命に照らし合わせたもので、大学セミナー・ハウスの思想と生活の指針とされた。

２．期待される役割

大学セミナー・ハウスの開館に対しては大学関係者だけではなく、社会一般から称賛の声が多くあがった。法人設立から開館までの三年間、大学関係の学報や教育分野のメディアはもちろん、当時の東京新聞や読売新聞、日本経済新聞、サンケイ新聞、朝日新聞、毎日新聞等全国紙から地方紙の北海道新聞までの新聞メディアに大学セミナー・ハウスに関する報道が目立つ。大学セミナー・ハウスの誕生は日本社会全体にとって大きな出来事として取り上げられたのである。

数多くの新聞報道のなかにテーマ別に見てみると、次のような標題が集中していた。

「人づくりにセミナー・ハウス」（サンケイ新聞1962.9.21）
「セミナー・ハウスでひとづくりを」（読売新聞1962.9.24）
「学生に研学、修練、交際の場を」（東京大学新聞1962.10.3）
「教授と学生の家」（朝日新聞1962.11.6）
「教授と学生の交流、新しい人間形成の場に」（日本教育新聞1964.1.15）
「三多摩の自然生かす、ひとつくりにふさわしく」（朝日新聞1964.1.28）
「マス・プロ教育のヒズミを正す」（毎日新聞1965.3.31）
「緑濃い多摩丘陵に教授・学生が泊まり込んで勉強」（毎日新聞1965.6.25）
「緑と涼風の大学セミナー・ハウス、教授、仲間とじかに接触、閥も差別も除いて人間形成へ」（東京新聞1965.8.8）
「大学相互の交流も、教授と学生の接触はかる」（読売新聞1965.8.28）
「Seminar House in Tokyo Enables Teachers Students to Gain Valuable Experience」（The Japan Times1965.8.31）

上記新聞メディアに取り上げられた、社会が大学セミナー・ハウスに期待する役割としては次のようなものがあった。

⑴大学のマスプロ教育を正すこと
⑵教員と学生との心が通った交流を促すこと
⑶人づくりにふさわしい学生の研学、修練、交際の場になること

大学セミナー・ハウスの設立とともに、大学教育者たちは本格的に一般教養教育のありかたを考え始めた。鵜飼信成（1906-1987）当時基督教大学長が次のように述べたことが大学教育者の代弁になっていると考える。

「人造りとか、人間形成とかいうことが最近しきりにいわれるようになった。教育にたずさわる者として、その意味を真剣に反省してみなければならないように思う。大学セミナー・ハウス刊行の『大学と人間－人間形成の新しい方向を求めて－』の巻頭にのっている茅東大総長の一文がアメリカの大学における一般教養の重視を取り上げているのは、この際大いに注目されてよい。そこでの問題は、いかにして、一般教養と専門教育とを調和するかにある。いや別の面からいえば、従来の専門教育偏重の傾向に対して、どうしたならば、一般教養を、十分に、大学教育の中にとりいれることができるか、われわれにとっての課題なのである。」（読売新聞、1962.9.30）

マスプロ教育は当時の一般教養科目の授業形態でもあった。しかし、大学セミナー・ハウスの誕生は「専門教育に偏重し一般教養を軽視する傾向が学生の人間形成を妨げるものであること」が明確にされる契機となり、大学教育者が自らの使命を改めて認識することになった。そして、国公私立大学の壁を超える「インター・ユニバーシティ」の役割を果たし、大学における一般教養教育を補うための場を提供することが大学セミナー・ハ

ウスに対する大学人らの期待するところとなった。

当時の東京大学の大河内一男総長（1905-1984）は大学セミナー・ハウス開館式祝辞のなかで、大学セミナー・ハウスの設立は「協力と奉仕の極致、全大学の喜びと共同の責任」との認識を示し、東京工業大学教授、

1965年７月５日の開館式（本館食堂）

のちに文部大臣になる永井道雄氏（1923-2000）は大学セミナー・ハウスの開館をきっかけに大学問題研究の急務を唱え、大学運営をあずかる教育の「パブリック・アドミニストレイション」の改革を呼びかけだが、さらに「大学セミナー・ハウスでの人間の陶冶、各大学の教授学生の交流、日本人・外国人の交流を、その場だけのものに終わらせずに、次第に大学自体におしもどすことによって、日本の大学の再建をはかるにはどうすればよいのか」との期待のことばもあった。大学セミナー・ハウスの開館は「日本の教育に一紀元を画す」と期待されたのである。

大学教育者の一人、蠟山政道氏（1895-1980）からも期待を込めて次のような言葉があった。

> 「人間が一生をかけてやる仕事のヒントなど、必ずしも教室や実験室だけで、あるいは読書や議論だけから得られるわけではない。わずか一泊二泊の旅行から、あるいは数時間の散策の間から得られることもある。環境を変えることにより、また空気の違った場所に移ることによって新しい着想や想念が生まれることもある。大学セミナー・ハウスがそういう条件を提供することになれば、それこそ今日の大学と大学生がもとめているものが与えられることになる。」（『セミナー・ハウス』創刊号、1965.1.25）

大学セミナー・ハウスは国公私立の諸大学の教授や学生が共通の立場に立って相互の交流を保つための場としてだけではなく、生きがいのある仕事のヒントをえるための場としても期待されていた。

「久路雲の上なる空に出津ぬれは、雨のふる夜も月をこそ見れ」
新渡戸稲造先生筆、新渡戸先生の愛弟子の一人である上代たの先生により1968年に寄贈。

法人マーク（開館２周年記念の文鎮）
七群の宿舎村を七つの葉で表現したもので七枚をつけて苗木がやがて大成することを期待する意味である。

「所思不可言所言不可為人間安心法唯在貫所思」
福沢諭吉先生筆、1968年に小城正雄先生寄贈で小城先生のご尊父が慶應義塾卒業時に福沢諭吉先生が書いてくださった直筆である。

この「真理」の二文字は佐藤喜一郎氏の筆である。松下館屋上に設置された真理の鐘に鋳込まれている。1968年12月７日午後１時20分に佐藤氏と二人の女子学生が鐘つき台の上に立ち、綱を交互に引くと気高い鐘の音が多摩丘陵に流れていった。

第１節　一般教養科目を補うセミナー事業の展開

１．開館・落成記念セミナー

1965年７月５日、大学セミナー・ハウスは開館式を迎えた。同５日～７日、２泊３日で開催された開館記念セミナーは一般教養科目を補うセミナー事業の初回として人文、社会、自然の三科目の講義を設け、主題の共通テーマは「世界の中の日本」とした。初回セミナーの狙いは、

川喜田二郎、加藤英俊、永井道雄三氏と開館記念セミナー参加学生達（本館前）

セミナー参加学生に各専門分野を基点として主題にアプローチしてもらうことであった。セミナーに参加できなかった学生達にも世界的視野において日本を考えるよき材料としてもらうため、初回セミナーの内容をのちに『セミナー・ハウス』NO. １に掲載した。

同年11月２～４日に「現代思潮と日本」を主題とする落成記念セミナーが大学の一般教養教育に新しい方向を示す目的で国公私立大学共同セミナーとして開かれた。このセミナーの全体講義は東京大学大塚久雄教授（1907-1996）の「ウェバー社会学における思想と経済」、それに一橋大学高島善哉教授（1904-1990）の「近代化の思想と理論－とくに新しい人間像の形成のために－」であった。日本初の国公私立大学の共同セミナーで関心のある主題と同分野の他大学の先生の講義を聞けたということだけに、参加された学生達にとって大変な知的刺激となり、普段つまらない教養課程に対する不満や焦りがここで一気に解消されたように反応は大きかった。

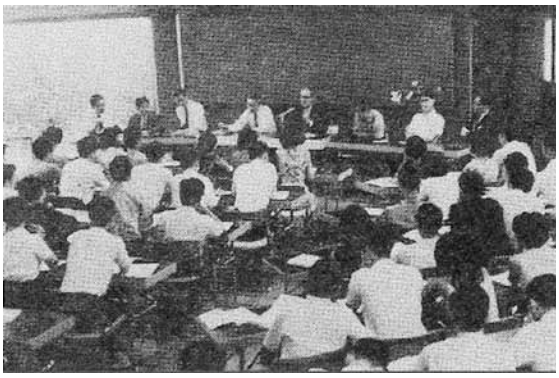
「学問をする上でこれほど充実した時を過ごせたことは今までになかったと思います。各大学の学生が一堂に会し、自分の大学で学んで来たものをぶっつけ合う場、それがセミナー・ハウスの本質であると思います。他の大学の学生と討議し合うことができることは実にすばらしいことです。自分の勉強不足を見せつけられ、厳しく自己と対決することができました」（早稲田大学、小松洋『セミナー・ハウス』NO. ４）

「セクション編成は適当な人数で面白い話し合いが出来た。テーマは自分にとって最も興味があり、また現実の問題であったので非常に勉強になった。皆の意見もきかれ、自分の考えがまとはずれでなかったことに安心した。同じ問題を真剣に考える友達にかこまれ、啓発されると共に力強く感じた。」（津田塾大学、吉村和子『セミナー・ハウス』NO. ４）

開館・落成記念セミナーは社会から大いに注目され、戦後日本教育分野にとって画期的なことと見なされた。数多くのメディアの報道の中でも最も具体的な報道があったのは毎日新聞で「世界の中の日本を考える－大学教育の新基礎に－」（1965.7.16）をテーマにした記事であった。

２．大学共同セミナー

開館・落成記念セミナー、２回開催した大学共同セミナーは大成功を収め、同様のセミナーは1975年までの10年間、年に平均８回のペースで開催され、1973年は最大の11回を数えた。毎回の参加学生の人数は100名を超えることが多く、大学の３年生がその大半を占めた。参加



第10回大学共同セミナー全体会模様

学生の専門分野からみると、人文科学系学科（文学、史学、哲学、教育学、芸術、教養、その他）が40% 超、社会科学系学科（法学、政治学、商学、経済学、社会学、

セミナーの合間

国際関係学、その他）が44%、理工系学科（農学、医・歯学、薬学）が10% の割合であった。

一般の教養教育的効果の獲得を狙いとした大学共同セミナーは、現役の各専門分野の代表的な存在である教

第11回大学共同セミナー分科会模様（丸山眞男氏）

授・研究者から組織された企画委員会によって企画され、毎回の主題を共通の問題意識とし、問題を解くための専門テーマをいくつか定め、それぞれの分科会において教授の指導のもと参加学生が徹底討論を行い、そこで得たそれぞれの結論を知の共有の場となる全体会で発表するというゼミナール方式で行った。当時の大学共同セミナーは国公私立の壁を越えた独特な教育プログラムと見なされ、その企画にあたる企画委員会のメンバーや学生指導にあたった教授達は一流のメンバーであった。ちなみに第１期企画委員長は教育社会学者でのちに第95代文部大臣になった永井道雄氏であった。

大学セミナー・ハウスの開館とともに開催した大学共同セミナーは、瞬く間に広く知られ、人気のプログラムとなり、「学生の参加希望を多数お断りせねばならぬ場合も一再ならずあった」という大変な充実した盛況ぶりであった。1974年度大学共同セミナー企画委員長、東京大学の木村尚三郎助教授（1930-2006）は当時の大学共同セミナー開催の模様について次のように語っている。

「今日この丘にみなぎる知的活力は、大学紛争時とも、また初期の一時的な物珍しさ、あるいは興奮状態とも違う。開かれた大学の理念の火は、今日、まさに日常的な営みのなかで、静かにそして安定的に燃え始めている。異なった大学の学生と教師たち、それに外国人教師や外国人学生、

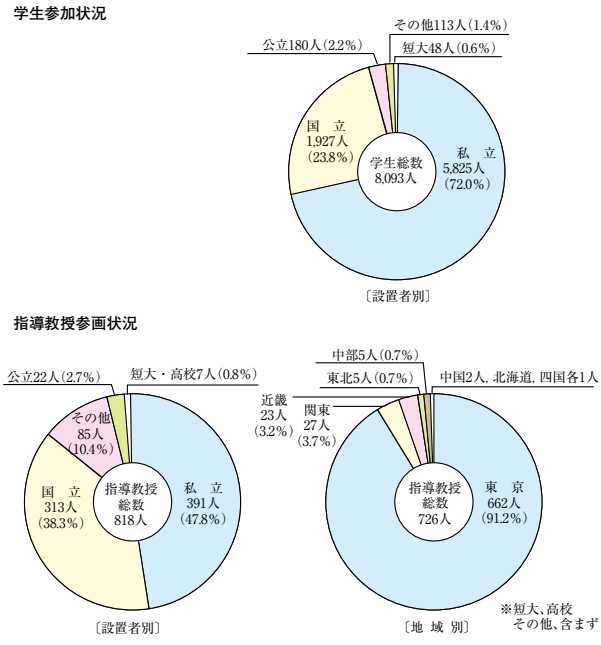
第30回ゲスト講演のドナルド・キーン氏

さらには社会人までもが一堂に会し、特別の気負いや緊張もなく、淡々と、そして熱心に勉強し合い、討論し合っている姿を見るのは、感動的でさえある」（木村尚三郎「歴史的転換期に生きる大学セミナー・ハウス」『セミナー・ハウス』NO.43）

毎回の大学共同セミナーについてのメディアの報道が多数あり、セミナー後に参加学生からも多くのメッセージが寄せられた記録がある。

「大学が休暇中だからといって、夏休みは勉強も休止する期間ではない。海、山へとレジャー花盛りの風潮のあおりで、勉強の方は押し流されそうな気配だが、学生の本業はレジャー、アルバイトよりもむろん勉強。しかもじっくりと腰を落ち着けて、学期中には取り組むことは難しい大きいなテーマと格闘するには絶好の期間なのだ。開館三周年を迎えた大学セミナー・ハウスでは７月26-27日の両日、九十人の学生がふだんの講義では体験できない大学共同セミナーで「平和と人権」の大テーマに取り込んでいた。」（毎日新聞、1968.8.3）

「マスプロ化した大学教育に挑戦した。現代の松下村塾。それが大学セミナー・ハウスの夢だという。（中略）本郷



1965-1977年度学生と教授参加者数

の東大でなければ、丸山真男先生の政治学が聞けないなんて、なんとも不都合でしょ。それに、どの大学も教授と学生の触れ合いがなさすぎます。（中略）念願の“開かれた大学”は年間十回ユニークな共同セミナーに実っている。」（読売新聞、1976.3.12）

「共同セミナーに参加したのは今度が初めてでした。大学間のワクを超えて共に勉強できるのはすばらしいことだと思います。大学においては、あるテーマを取り上げても、それが学問の域を超えないように思われるが、このセミナーでは現実問題として捉えていくことができたと思います。もうひとつの収穫は、自分の大学の先輩はもちろんのこと、他の大学の学生との話し合いを持てたことです。」（第80回大学共同セミナー参加者、東京大学法学部２年渡辺邦子『セミナーハウス』NO.40）

「個性あふれる先生と接するには、２泊３日は余りにも短い時間ではあったけれど、私達に強い知的刺激を与えてくださった。その生き生きと輝いた目は、私達を魅了し、又圧倒する迫力があった。（略）美しいオリオンの星座の輝く空の下、八王子の丘陵で、深夜まで議論を交わし、問題を追及し、自己をも探求しようとした感動は、その友情とともにずっと続いていくだろう。」（第82回大学共同セミナー参加者、東京大学法学部２年吉松文雄『セミナーハウス』NO.41）

３．国際学生セミナー

初回の国際学生セミナーは1972年３月にJAFSAの協力と万国博基金の援助で「アジアの平和と開発―日本の技術・その歴史的社会的性格―」をテーマに開催された。28大学の日本人学生、12カ国からの留学生計69名が参加した。時は、戦後世界第二の経済大国になった日本が経済の成長期を迎え、万国博覧会の開催もあり、日本社会の国際化開始の時期にあった。初回国際セミナー参加の留学生は東南アジアからの留学生が多く、近くて遠い日本とアジアの関係を知的に理解し、留学生との接触を通して溝を埋めようというのが国際学生セミナーの一つの目的であった。セミナー開催の３日間、日本人学生と留学生が熱心な討論と共同生活を通してそれぞれ各自得るところがあったが、最終日の全体会においてシンガポールからの留学生が日本人学生の歴史認識についての発言に激怒して、日本人学生の退場を要求する場面があった。それに対し、アフガニスタン―からの留学生が激怒したシンガポール留学生に反論する場面もあって、日本とアジアの間に「壁」があることに気が付き、異なった意見同士の付き合いこそ大切であるとの認識に到達したようである。

「アジアの平和と開発」をテーマにした国際学生セミナーは初回後、年に一度３回連続して計４回シリーズで開催され、その狙いは科学技術、経済、社会、歴史の各側面から日本を理解し、アジア諸国との連帯をいかに進めていくべきかを考えようとするものであった。この４回シリーズの国際学生セミナーの成果について、当時の国際学生セミナー運営委員長、東京外国語大学の中嶋嶺雄教授（1936-2013）が次のように述べており、第一回参加の留学生申熙錫君ならびに第四回参加の学生藤本恭子さんから次のようなメッセージが寄せられてきた。

「今回のセミナーでは、日本経済進出やエコノミック・アニマルぶりに対する通俗的な批判や反省、いわゆる贖罪論や懺悔論、援助の量や質についての政策技術的な議論、偽善者ぶった経済開発論や経済協力論といった次元を超えて、アジアの切実な諸現実を一方にふまえながらも、アジアに対する新しい文明観・価値観の探究といった問題、アジア諸国の内在的諸要因への厳しくも冷静な診断といった問題にまで討論が深まっていった。もとより『新しいアジア像を求めてIn Search of a New Self-identity as Asians』という今回のテーマに関しての統一的な認識や方向性がそこで発見されたわけではない。その点は、依然として個々バラバラに多様であり、甲論乙駁するものであったろう。にもかかわらず、世界のなかのアジアと日本のかかわりあい多いさ、その重さといったものを自覚しつつ、明日のアジアをともに構築してゆこうとする者の精神の糧として、このささやかなセミナーがもたらした諸体験は、やはり貴重なものであったし、やがて目に見えない果実を、日本の、そしてアジアの各地で結びゆくであろう。こうして国際学生セミナーは、ここにようやく一つの到達点を見出すことができたのではなかろうか。」（中嶋嶺雄「国際学生セミナーの一つの到達―運営委員長としての感想から―」『セミナー・ハウス』NO.37）

「私は多摩丘陵の美しい自然の中で開かれた国際学生セミナーに参加して、学問と自然と人が三位一体した雰囲気の中で日本と日本人についての新しいイメージを発見した。（略）討論の内容について言えばアジア諸国の日本との関係や日本における留学生の問題等がさかんに討論された。日本が第二次世界大戦の後平和憲法によって、先進国として国際社会に名誉ある地位を占めているという事実は疑う余地がないが、経済の数値が国力測定の全部ではけっしてない。言い換えれば、アジアの平和において日本は国益だけ追求する実利的な外交方針の設定よりは、まずアジアの諸国家に対する歴史的な過去の事実を深く認識し、そこから出発する新しい相互関係でなくてはならぬと思う。（略）

第２回国際学生セミナー全員写真（ようこそ広場）

公式の討論の後ユニットハウスでの交わりもまた楽しかった。各国の留学生同士が話し合ったり意見をかわしたが、このような汎大学の対話を通じて、学問ばかりでなく人格的接触をはかることは大切な機会だと思うので今後もこのような国際セミナーが計画されるようお願いする。」（第１回国際学生セミナー参加者申熙錫「留学生として初の対話の場」『セミナー・ハウス』NO.27）

「セミナーが終わってもう三日経ちます。しかし今なお私の中に、セミナー最終日に私を包んでいた重苦しい、罪悪感にも似た思いが滞っています。この思は私が軽率にも国際学生セミナーを本質的には授業の延長としか考えていなかったことに始まります。以前マスコミを賑わした、その日本人の失うものなくして利益を求めようとする姿と何ら変わるものでなかったことを、とても恥ずかしく思います。ある留学生が「日本の教育には価値の転換ということはないんだね」といっていましたが、お互いを知るために、アジアを知るために、自分を抜け出す一歩の情熱なくしては、何も本当に知ることが出来ないのではないだろうか。そして、最後の全体討議の中でベルナード君がいっていた、国際関係における社会的責任を私達は本当に身につけているかどうか、日常生活においてさえ怪しいのではなかろうか。私の罪悪感が実は何も知ろうとはしなかったこと、何も解決しようとはしなかったことからきているとすれば、この思いを礎にこれからの疑問に個人レベルからの一歩を踏み出すことが、アジアの国際関係の中で前進的一歩を歩み始めることになるのではないかと思うこの頃です。」（第４回国際学生セミナー参加者藤本恭子「知るということの意味」『セミナー・ハウス』NO.37 ）

日本の留学生の受け入れについては、1960年代から人数が徐々に増える記録はあるが、さまざまな問題を抱えていた。1968年にJAFSAが「外国人留学生問題研究会」を設置していたが、日本は本格的に外国人留学生を受け入れ始めたのは1983年の中曽根内閣時「留学生十万人計画」を提唱した時からである。

国際学生セミナーは社会の需要に対応して注目する国際問題をテーマに企画された国際教育プログラムで、その後も年に一回企画して開催された。

第２節　賑わう「大学セミナー村」

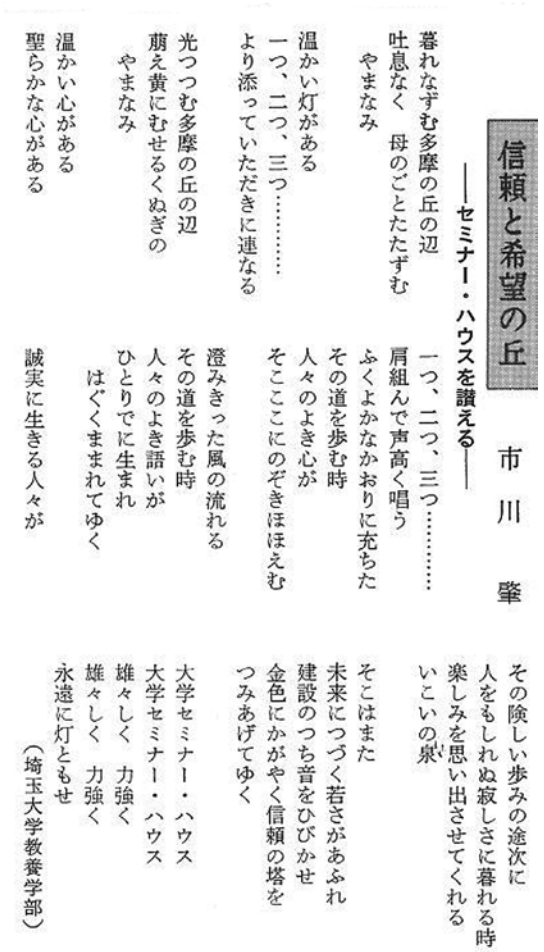
１．ゼミ合宿で賑わう「大学セミナー村」

新聞報道で大学セミナー・ハウスは「大学セミナー村」と呼ばれていた。報道で大学セミナー・ハウスの開館を知った多くの大学教員のなかには試みに学生と一緒にここを訪れ、ハウスの自然環境やリベラルな雰囲気を気に入り、ゼミの合宿で毎年訪れるようになる方が少なくなかった。開館早々利用し始めた当時日本大学の岩井肇教授がハウスを「人間形成の道場」とたとえ、次のように語っている。

朝日新聞、1969年１月９日

「私が学生とともに、このセミナー・ハウスをはじめて活用したのは開設早々の去年の11月だった。最初の印象が大変よかったので、それから４月までに４回学生との合宿研修に利用した。（略）落ち着いた気分で研究討論に力を注ぐことができることは環境の点、設備の点から楽しいものであった。(略)このハウスが学生の研修合宿に効果をあげ、また教師と学生や、学生相互間の接触による、人間関係のつながりを強くすることは特徴と思う・・・」(『セミナー・ハウス』NO. 5）

また、よく学生と一緒に来館された慶應義塾大学高村象平教授（1905-1985）が施設の整備や利用者の増加について次のように語った。



信頼と希望の丘

――セミナー・ハウスを讃える――

市川肇

暮れなずむ多摩の丘の辺
吐息なく　母のごとたたずむ
やまなみ
温かい灯がある
一つ、二つ、三つ……
より添っていただきに連なる
光つつむ多摩の丘の辺
萌え黄にむせるくぬぎの
やまなみ
温かい心がある
聖らかな心がある

一つ、二つ、三つ……
肩組んで声高く唱う
ふくよかなかおりに充ちた
その道を歩む時
人々のよき心が
そこここにのぞきほほえむ
澄みきった風の流れる
その道を歩む時
人々のよき語いが
ひとりでに生まれ
はぐくまれてゆく
誠実に生きる人々が
その険しい歩みの途次に
人をもしれぬ寂しさに暮れる時
楽しみを思い出させてくれる
いこいの泉
そこはまた
未来につづく若さがあふれ
建設のつち音をひびかせ
金色にかがやく信頼の塔を
つみあげてゆく
大学セミナー・ハウス
大学セミナー・ハウス
雄々しく　力強く
雄々しく　力強く
永遠に灯ともせ

（埼玉大学教養学部）

開館2年大学人の間で大学セミナー・ハウスを「心の故郷」と称した頃に市川肇先生が創作したもう一つの賛歌

「（前略）多摩丘陵の美しい自然の中に設けられた大学セミナー・ハウスを塾生とともに訪れること、私は今回で３回目であるが、開館当初とうって変わって、今日では構内の道路も整備され、ユニットハウスやセミナー室の配置の妙味がはっきり印象づけられるようになっている。利用者の数は次第に増加している由、設置者の苦労もこの現実事態の招来によって報われたというべく、慶賀に堪えないところである。・・・」（『セミナー・ハウス』NO. 6）

このように、大学セミナー・ハウスは開館当初から各大学からのゼミ合宿グループの利用がさかんになり、その人数が年々増え、２周年の時にすでに大中小セミナーが911回行われ、日本の大学のなかに定着した地位を獲得できた。そして、10年間で来館者数が延べ40万人に達した。

「大学セミナー・ハウスは特定の大学の施設ではなく、国公私立の別なく、広く門戸を開放していることがその存在価値を高め､その性格をユニークなものとしている」というのが、開館の時から1974年館長になるまでの専務職を担う飯田宗一郎のことばである。開館10年、大学セミナー・ハウスはまさにそのような「横の関係のない」国公私立大学に知の共有の場を提供し、大学を開く役割を果たし、注目の場となった。大学紛争中においてもこの多摩丘陵には大勢の大学人が訪れ、賑わっていた。

２．新入生オリエンテーション

毎年の４月、５月、６月は新入生オリエンテーションのシーズンで、各大学や短大の新入生オリエンテーション合宿が大学セミナー・ハウスキャンパスを彩る。大学セミナー・ハウスが大学側の企画に積極的に協力し参考の材料を提供するために、どの大学がどのような形式のオリエンテーションを行ったのかを『セミナー・ハウス』ニュース紙上に特集を組んだことがあり、1967年５月３～５日において一度「大学と人間」を主題に新入学生歓迎セミナーも開いた。

「大学新入生を迎えてのオリエンテーションとは、学内諸生活・諸設備案内という事務的な面と、大学人たる基本的本質的な問題を考えさせるという精神的な面と、二つあるだろう。今回行われたオリエンテーションは、むろん後者の意味で行なわれ、自分で考える原動力を、まっこうから与えるものであった。参加学生ひとりひとりの魂のなかに、この三日間のチャレンジがどのように受け止められ、彼らの生涯を形成する文化意欲への、どんな起爆力になっていくだろうか。おそらく、想像するのもおそろしいほどの、深いところに力強い種子が蒔かれたに違いない。・・・」（指導教授小塩節『セミナー・ハウス』NO. 9）

「今まで、このような精神的感動つまり自分の問題意識が実感としてわいたことは初めてです。大学四年間が充実した生活であることも誓って感謝のかわりとします。」（参加学生、武蔵工大佐久間純郎『セミナーハウス』NO. 9）

「このセミナーでの収穫は何であったろうかと、三週間たった今考えてみて、貴重な体験、愉快な思いでなどいろいろあるが、何はさておき友人が一度数多くできたことを掲げねばならないだろう。」（参加学生､都立大学三枝健之進『セミナーハウス』NO. 9））

当時の新聞に関連報道がよくあるように開館から10年の間、オリエンテーションの季節になると、最小50名、ほとんどの大学や短大から100名以上の新入生がこの大学セミナー・ハウスで大学生活のスタートを切ると言う。

大学セミナー・ハウス利用の新入生オリエンテーション実施校は年ごとに増加傾向にあった。中でも史上最大人数を記録したのは1969年に武蔵工大が実施したオリエンテーションで来館者数が実に1,347名であった。1968年４月17～27日に行われた武蔵工大の「新入生歓迎セミナー」には山田良之助学長（1960-1978）が新入生と一緒に泊まり込んだこともあった。同年５月２日付の読売新聞紙上に「オリエンテーション合宿大流行－人間的接触深める」をテーマにする記事があり、大学セミナー・ハウスを利用した武蔵工大の新入生オリエンテーションが大々的に報道されている。

1967年に来日した東南アジア留学生を対象に初のオリエンテーションが大学セミナー・ハウスで開かれた。66名の留学生と文部省、東工大、東京外語大、千葉大などの教官や日本人学生が泊まり込みで４日間生活を共にした。東南アジア留学生オリエンテーションが留学生たちにはあらかじめ日本の文化、大学の教育や生活習慣に関する予備知識を与え､日本留学の成果を高めようとして、文科省が行なった初の試みであった。

第３節　大学改革と大学セミナー・ハウスの役割

１．大学教育改革をめざす大学教員懇談会

設立して間もなく開催した大学教官対象の「大学教育セミナー」が大学教員懇談会の先がけであった。このセミナーは１回目（1963年６月29日）､２回目（同年10月）､３回目（翌年９月）の３回シリーズで開催された。シリー

フェードル・ジベード氏講演

ズに参加したのが会員校の大学教官有志であり、セミナーの目的は「セミナー・ハウスの精神的基盤づくり」、国公私立大学共同の性格を特色づけ、日本の大学教育の実態を把握することであった。

法人主催の大学教員懇談会として本格的に開催し始めたのは1970年９月19～20日の１泊２日の「大学改革問題」をテーマにしたものである。この懇談会には、26協力会員校から教官68名が参加し、ドイツチュービンゲン大学学生局長のフェードル・ジベード氏が「ドイツの大学改革について」の講演後、「日本における大学改革の反省と展望」のシンポジウムを開いた。懇談会後、参加教官一同より大学セミナー・ハウス宛に大学教員懇談会の引き続きの企画・開催の要望書が提出された。

第１回大学教員懇談会

「（前略）当面する問題について、国公私立の別、あるいは各専門分野の差異をこえて、直接相互に語り合うことがいかに重要であるか痛感されました。すでに多様な意見が各種刊行物によって広く世間に流布されてはいますが、直接に膝を交えて意見を交換し、可能なことは逐次実現していくことが緊急必須であることに参加者一同共感しました。つきましては、大学セミナー・ハウスが今後もこのような企画をつづけ、さらに広範な大学教員に呼び掛け、今日大学に課せられている重大な責務について具体的基本的な討論を行い、実践のよすがとする機会を与えてくださるよう切に要望します。」（『セミナー・ハウス』NO.23）

1960年代末1970年代初めごろに大学改革に関する問題として、国の予算、教育改革目標の明確化、大学経営の官僚化、国公私立大学の格差と高等教育機関全体のピラミッド型の序列、大学の国際化等があった。1971年に文部省が「教育改革推進本部」を発足したこともあり、大学側はもちろん、中教審、各政党、経済界までも大学改革に熱意をしめし、各方面から大学改革の声が日に日に高くなる中、大学教員懇談会は日本の教育改革を議論し、意見を交換する場となった。第２回大学教員懇談会は１回目のシンポジウムのテーマ「日本における大学改革の反省と展望」を主題に、「一般教育の新しい方向について」「研究教育の大学間の交流促進について」「大学改革の現時点」の三議題を設け、1971年２月13～14日に開催された。こちらも全国から自主参加の教員67名が集まった。第２回大学教員懇談会については1971年２月20日付の毎日新聞紙上に詳しく紹介した記事がある。

こうして、大学教員懇談会を通して教育現場の声が結集され、具体的な大学改革案につながっていった。開館から10年の間の大学教員懇親会において具体的に議論された主題をあげてみると、入試問題、外国語教育の改革、大学設置基準、大学間の単位互換制度と大学交流、留学生問題等がある。その中の1972年６月に開催された「改正された大学設置基準の単位制度をどう活用するか」をテーマとした大学教員懇談会運営協議会において、大学セミナー・ハウス主催の大学共同セミナーや国際学生セミナー等教育プログラムについて、単位認定の方向で具体的な議論もなされた。その席上では大学セミナー・ハウスが実施している教育プログラムを大学連合的教育活動と見なすことによって、現実性を帯びるようになるとの文教行政からの示唆はあったが、その実現はなかった。

２．開かれた大学としての役割

法人設立10周年に出版された『大学を開く』という書籍には、法人の設立の理念、開館してから大学の教養課程教育を補い、開かれた大学としての役割を果たした足跡を記録している。戦後日本の大学教育分野に欠けているのは教授と学生、異なる分野の人、異なる大学の人等の間の「人間的な触れ合い」の場であった。その場を大学セミナー・ハウスの設立によって創設することができ、そこでは国公私立大学の別なく利用でき、違う大学の教授と学生、教員同士、学生同士、違う専門分野の人達の共通の活動の場となり、人間同士互いに触れ合い、各自の知識を広め人間としての教養を豊かにする道を開いたのである。

「思想は高潔に、生活は簡素に」は開館３周年の時に法人運営理念として提起されたスローガンを、大浜信泉書で額に入れ本館食堂に飾ったものである。知識人の生活のモットーとして来館の方々の共通信念として守られてきた。

1970年代半ばごろ、日本には大学が約４百校、短大が約５百校、在学の学生数は約190万人であった。「大衆化」された当時の大学教育の改革に助力し、学生に均等な機会を与える大学セミナー・ハウスは、かつて３代目理事長の増田四郎（1908-1997）が言うように「三つのかけ橋」、すなわち、「断絶といわれるムードの中での世代のかけ橋」、「学問研究における理論と実際のかけ橋」、「あまりにも分化した現代科学の専門と総合のかけ橋」になることが法人活動の具体的な目的としたが、主催セミナー事業、大学教授と学生のゼミ合宿、新入生オリエンテーション以外にも日米学生会議（1934年発足）、国際学生会議（1954年発足）、英語教育協議会セミナー、コルゲート大学やウィラメット大学日本研究グループ等団体に活

動の場を提供していた。また、1973年９月27日に国際協力会員校制（International　Member）第一号（コルゲート大学）も誕生している。さらに、すべての来館の方々のために、毎年、盆踊りや、天文観賞等の行事を行い、利用者同士の交流を目的とした交流会を開き、大学セミナー・ハウスコミュニティの形成にも努めていた。

時の文部大臣、永井道雄氏は1975年６月に法人の新施設、大学院セミナー館が落成した記念式典における記念講演の中で、国公私立を超えた大学セミナー・ハウスという場づくりの先駆的な経験から「独立大学院」作りもあるだろうとの見方を示したこともあった。学部に基礎を置かない大学院独自の教育研究組織の必要性が高まったことから、大学設置審議会から「大学院及び学位制度の改善について」の答申が出された後である。

開館10年において大学セミナー・ハウスは開かれた大学として広く評価されるようになり、手塚富雄氏（1903-1980）が言われたように、「十年の成果を目のあたりにして、大学セミナー・ハウスは実に充実した道を歩み、今では日本の大学教育において無視することのできない存在となり、その影響を陰に陽に広げつつある」（『セミナー・ハウス』NO.40）。

開館十周年迎えた「大学セミナー・ハウス」の館長

人間登場

飯田（いいだ）宗一郎（そういちろう）さん

"人間形成"へ誠実な努力

国公私大を問わず、大学生すべてを対象とした合宿方式の勉学施設は、世界でも珍しい。その大学セミナー・ハウスは東京・八王子市郊外の丘陵地帯にある。十年前にこのバンガロー風のハウス群を築き、以来、常務理事から館長として運営、発展に尽くしてきた。このほど、回顧と展望を三百頁の本にまとめ、〈大学を開く〉と題してセミナーから出版、改めて各界の注目を集めている。

そのエピローグで「われわれは、望むところを実行に移してきた。教師と学生の共同の広場を実現させることがそれで、セミナー・ハウスは、理念と現実を興奮するために努力を払い、開閉的な日本の大学を開く役割を果たしてきた」と述べる。自画自賛とは言い切れない。

いうところの〈理念〉は、母校の同志社大を振り出しに、東京女子大、国際基督教大と一貫して事務畑を歩いてきたこの人の"現場からの告発"でもあった。

「大学はマスプロ化し、単位主義だけが先行している。学問を通じての人間形成は無視されている。教師と学生が心を触れ合わせながら学べる場がなくてはならない」――国際基督教大という少数主義の環境に身を置いて痛感したという。約二十年前、そこの就職部長だった。

当時もマスプロ大学の弊害を説く"評論家"は多かったが、実際に改善へと乗り出す人は少なかった。自身、「私の理念も同情だけしか集めないのではないか」という不安は強かった。しかし、正義感の強いクエーカー教徒として、座視はできなかった。そして、取り越し苦労でもあった。働きかけに、当時の茅誠司東大学長、大浜信泉早大総長らがたちまち呼応、理想は急速に現実のものとなる。

財団法人として認められたのが三十七年春。常務理事になって首都圏をくまなく歩いた末、南多摩の丘陵地約五万平方㍍に目をつけた。「思索の場には大自然が必要」。持ち主の大手私鉄に頼み込んで獲得した。

大学に既設のゼミをここでやるばかりでなく、すべての大学に門戸を開いた共同セミナーも設けた。「学問はコマ切れでなく集中的にやるもの。そして人間形成は、自分よりすぐれた人と寝食を共にすることで生まれる」のだから、宿泊施設を併設して食事も師弟共同。「権威主義は陰落のもと」なので"思想は高潔に、生活は簡素に"がハウスのモットーである。

百二十五棟のハウスで共に学び、語り合った学生は、すでに全国百五十大学から延べ三十五万人にのぼる。祝日にもハウスが閉じられたことはない。

「マスプロ化の原因は、有能な教育行政家が大学にいないことです。能力があって教授でない教育家が必要なのです。日本の大学では、あまりにも事務職が軽んじられています」。実績を背負った言葉に重みがある。

昨年六月から、始まるべきところ、館長に。「品のある野人になりたい」とかで、国立市の自宅へ不意に訪れても、わざわざ背広に着替える律義さ。長女はセミナーに、長男は日本ユネスコ事務局に勤める教育一家である。茨城県出身、六十五歳。

（田中　正人記者）

読売新聞、1975年４月１日

第２章 「大学の中の“大学”」と呼ばれた時代……開館10周年から30周年まで（1976-1995）

第１節 「大学の中の“大学”」としての役割

１．知への探求を誘う場として

「大学の中の“大学”」という言葉を世に出したのは毎日新聞である。毎日新聞1967年８月25日の紙上に大学セミナー・ハウス２年の成果を評価して「大学の中の“大学”」をテーマにした記事が掲載された。この記事は当時の飯田宗一郎専務理事を取材したもので、記事のなかに法人設立してから行ってきた四つの活動分野を次のように詳述している。

> 「大学セミナーハウスのこれまでの活動は四つに大別することができる。第一は各大学のゼミナールに２泊３日を基準とした研学修練の場を与えることで、これが利用者の60％を占める。休暇中には７日から10日に及ぶグループもある。卒論の発表会などをして深夜まで討議する人種もある。第二は各大学が主催する新入生オリエンテーション、全科集会、全学セミナーなど200人ぐらいの比較的多人数の集会である。（略）第三は本法人が企画運営の責任に当たる大学共同セミナーで、テーマは一般教育的なものと専門科目的なものとを交互に選んでいる。我が国のごとく大学間の交流の乏しい国では、他の大学のすぐれた教授の講義をどこの学生にでも聞かすような工夫を講ずる必要がある。セミナーハウスは制度的な困難を乗り越えてそれを実現した。この７月には一橋大学長増田四郎氏と京大教授会田雄次氏を指導教授として27大学から120名の学生が参加し、『世界史的に見たヨーロッパと日本』という歴史セミナーを行ったが、この二年間に10回実施した。そして、９月には東大教授丸山眞男氏による『日本の思想』の共同セミナーを開催するが、32大学から238人の学生が参加され、ことに私立大学の優秀な学生によって歓迎され、共同セミナーこそセミナーハウス活動の本命であるという方向と確信が与えられた。第四は学界および内外の学術教育機関に対する協力である。比較教育学会、分子遺伝セミナー、電子工学教官協議会、フルブライト英語教員セミナー、在日留学生オリエンテーション、日米学生会議などすでに数十種に達している。」

上記四つの活動を展開してきた大学セミナー・ハウスに関してほかの新聞報道では、「現代の松下村塾」（東京新聞、1978.5.25）、「大学の中のもう一つの大学」（日経、1978.10.23）「自然の中の大学」（毎日新聞1979.6.15）と表現は様々あったが、現実的には大学セミナー・ハウスは「大学の中の“大学”」の地位を早くも獲得し、知への探求を誘う場として広く知られるようになり、また、いつの間にか「出会いの丘」と呼ばれるようになった。

1978年10月８日に開催された大学共同セミナー100回記念の集いにおいて、当時東京工業大学長松昭男助教授の祝辞のなかに、大学セミナー・ハウスに来て「人生の方向の決定とか、生涯の伴侶の決定など、人間の一生に重大なかかわりをもった人々が私の周りにもかなりおられます」（『セミナー・ハウス』NO.58）とあるように、大学セミナー・ハウスに行けば新たな知への発見ができ、人生の方向の決定や生涯の友に会えるとの共通認識が学生の間に広がっていたのである。

それから10年経った1988年２月18日に、大学セミナー・ハウス宿泊者数100万人が達成された。中には毎年ゼミ合宿で来館される方がすくなくなかった。東京工業大学や産業能率大学学長を歴任された松田武彦氏（1921-1999）はその中の一人で、氏は教授時代によくゼミ生を連れて大学セミナー・ハウスを利用され、次のような回顧をされている。

> 「大学セミナー・ハウスで最初は私の研究室だけ、のちに高原・中野両研究室と共同して、卒業生有志と在学生との合宿“システム・マネジメント・セミナー”を開催して、はや16年、通算して18年になる。毎年、時期は３月上旬、学部卒業及び大学院修了関係の行事が一段落ついた頃である。人数は平均して５､60名・・・」（松田武彦『セミナー・ハウス』NO.91）

ゼミ合宿以外の来館者たちも大学セミナー・ハウスに対してそれぞれ特別な思いがあるようである。

> 「大学セミナー・ハウスは想像していたよりもすばらしかった。大自然に囲まれていてとても東京とは思えない。特にこの季節はさくらが満開で一面に花びらが散っていてとても美しかった。１泊という短い期間だったが、同学科のしかも初対面の友人ができたことは私には大きな収穫である。」（駒沢大学仏教学部新入生オリエンテーション参加者小野公子『セミナー・ハウス』NO.111）

> 「このたび第22回 JACET 夏期セミナーに参加する機会を得、久方ぶりに知的興奮をよびさまされた自分を感じたことでした。セミナー・ハウスのモットーにふさわしい、真に“high thinking”な充実した六日間で、私には忘れ得ぬ夏になりました。私が初めて当ハウスを訪れたのは、今を去ること二十一年前、第22回日米学生会議の折のことでした。木立の間に散在するユニットハウスに日米の学生がペアーで起居を共にし、五つの分科会に分かれて討論した一週間でした。（略）当時そのままの本館のたたずまいと食堂からの森の緑、“English Village”方式の JACET のセミナーは、熱暑の中で白熱した議論を交わした青春の日々と重なり合い、一種不思議な思いにとらわれたことでした。当ハウスで過ごした二つの夏の間に存在した長い時の流れが一瞬にして消え、あたかもタイムカプセルに乗って二十一年前に戻されたような感覚にとらわれたのです。このようなにセミナー・ハウスは私のささやかな知的生活のいわばスタート・ラインであり、その後の活動の源泉で

あったのです。そのことをこの度滞在して改めて感じ、感慨深いものがありました。この次訪れる時には、セミナー・ハウスはどんな顔を見せてくれるか、今から楽しみにしております。」（青山学院大学講師湯本知子『セミナー・ハウス』NO.112）

来館者から寄せられた多くのメッセージの中には、大学セミナー・ハウスに来て、学問することの素晴らしさ、厳しさを感じ、現代社会をより正確に計っていく「物差し」、自分の人生の羅針盤を得た等、人生の貴重な体験として語ったものが多いが、中には色川大吉氏のように大学セミナー・ハウスを「私の共同研究の根拠地」と称される研究者もいた。

色川大吉ゼミ（1989.12.16）

「セミナー・ハウスは私にとって共同研究の根拠地でもあった。故市井三郎氏と鶴見和子氏が主催した近代化論再検討研究会の研究合宿はもっぱら松下館で行われた。これは学際的な研究で、中国現代史の宇野重昭、ロシア史の菊池昌典、民俗学の桜井徳太郎、政治学の内山秀夫、思想史の山田慶児、国際関係論の三輪公忠、宗教学の宗像巌の各氏らがよく出席した。時々ゲストを招いて話を聞いたので、経済学の小島麗逸氏や薬学の綿貫礼子氏らも見えた。このグループは『思想の冒険』という論文集を出して解散したが、その主なメンバーが1976年に不知火海総合学術調査団となり、その発会をセミナー・ハウスで行った。（略）この20年間、私と私の同志の共同研究は大学セミナー・ハウスと切っても切れない関係にあった。」（色川大吉「私の共同研究の根拠地－セミナー・ハウスと共に20年－」『セミナー・ハウス』NO.118）

こうして多くの方々に愛される大学セミナー・ハウスは1995年に開館30周年を迎えた。開館30周年記念の集いに来られた方々の中には、開館記念セミナー時に学生であって、いまは大学の教師になりゼミ合宿でハウスを愛用している方、いわゆる「ハウス第二世代教師」が目立っていた。当時の中川秀恭（1908-2009）理事長が式典にご出席の皆様を前にして、開館30年経った大学セミナー・ハウスは今後もより多くの方に来ていただくために設立趣旨を再度確認したうえで新たな抱負を次のように語った。

中川　秀恭

「・・・新しい時代には新しい形式の人間形成の方法が創造されるべきである。セミナー・ハウスは指導教授を中心とする学生の小集団に対し研学、修練、交際の場を提供することを主たる目的とし、そのために合宿的集団生活の形式をとる。他方同じ又は関連のある学問分野の研究者や学者あるいは各大学の行政者が、セミナーを開くためにも国公私立を越えた立場の施設が望ましい、セミナー・ハウスは大学という機構の外にあって、大学教育並びに大学相互の交流に協力する奉仕機関である。この趣旨を今もってここに思い起こします。（略）このように当大学セミナー・ハウスはわが国のみならず、世界にも類を見ない施設として、きわめてユニークな活動を続けて参りました。今後もますます充実したプログラムを展開、大学教育を側面からお助けすることでありましょう」（『セミナー・ハウス』NO.140）

２．先駆けのFD活動

FD（Faculty Development）とは、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称である。その意味においての活動とは教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などが挙げられる。文部省がFDへの努力の義務化を規定したのは1999年であるが、大学セミナー・ハウスはそれより10年も早い、1989年４月にFDプログラム小委員会を設置し、大学教員懇談会と並行してFDプログラムを２回実施した後、大学教員懇談会から切り離し、大学教員研修プログラムと名を改めて実施するようになった。

大学セミナー・ハウスでFDプログラムを実施とすれば、各大学での研修より気分の上で参加しやすい、との1988年「FDプログラムの開発・実施に関するアンケート調査」結果のとおり、1990年１月20～21日１泊２日実施の第26回大学教員懇談会、「大学教員の魅力開発－FDプログラムの実践」をテーマにした初めての大学教員研修プログラムに25大学から53名の教員が出席され、同年９月29～30日に「よりよい大学教育の方法を求めて」をテーマにした２回目の研修プログラムへは28校、63名の教員が出席された。その後も法人主催の大学教員研修プログラムは「教員の教育機能、教授能力の改善・開発」を主な目的として順調に開催され、多くの大学教員が参加された。

1999年以後はFDを実施する大学が徐々に増え、2004年に文科省が全国の大学709校（国立87校、公立77校、私立545校）を対象にFDの実施状況を調査した結果、534大学が実施するようになったことが分かった。

大学セミナー・ハウス発のFDプログラムをより多く

1989年と1995年に出版された『大学教員懇談会の軌跡』の2冊

の大学教員に知ってもらうために、『大学教員研修マニュアル１－大学教員の魅力開発』（1990年１月16日）、『大学教員研修マニュアル２－よりよい大学教育の方法を求めて』（1991年３月25日）、『FD ハンドブック』（1992年１月10日）を小冊子にして来館の教員の方々に配布した。なお、大学セミナー・ハウス主催の教員懇談会の記録をまとめた書籍が残されている。それは、『大学は変わる－大学教員懇談会15年の軌跡』（国際書院、1989年）、大学教員研修プログラムの内容を含めた続編『大学は変わる－大学教員懇談会10年の軌跡』（国際書院、1995年）の二冊である。

第２節　善意の結晶―法人施設の整備

１．ユニークな建築群の出現

1962年に京王電鉄から譲渡を受けた大学セミナー・ハウス建設予定地は、野草生える満目荒涼の多摩丘陵の最高地点にあって、多摩の山々の彼方に富士山も見える静かな場所であった。開館当時は建物が本館、サービスセンターを囲む中央セミナー館と７群のユニットハウスであったが、開館してから1989年まで更に20年余りの歳月をかけて大学セミナー・ハウスキャンパスは完成に至ったのである。

建設予定地視察する大浜理事長たち（1964年10月28日）

ハウスの建物群を鳥瞰すると、どれも奇妙な形をなしている。「くさび」を大地に打ち込んだような赤屋根、逆三角形の本館が聳え立ち、煙突があるサービスセンター兼交友館を囲む７群のバンガロー式のユニットハウスと白の三角形屋根の中央セミナー館、円形屋根の講堂と図書館、円錐風の連続コーン・シェル構造の松下館、赤い衣で纏われた長期セミナー館、青い地球に流れる天の川模様の屋根がある国際セミナー館、青い屋根白い胴体の20周年記念館が建ち並び、ユニークな建築群をなしている。この多摩の丘の地形を生かした調和的な空間をもつ建築群はまるで一枚の油絵のよう、大学セミナー・ハウスに独特の存在感を与え、アカデミックな雰囲気を漂わす。

これらの建築群は大学セミナー・ハウスの設立理念を軸に20年余りの時空間を越えて完成されたものであり、設計者の吉阪隆正氏とその U 研究室の功績と言える。吉阪氏は、戦後日本において最もグローバルで壮大な視座を都市建築に提示し続けた建築家で、六十年代半ばから七十年代初頭にかけて早稲田大学理工学部長の要職を務めた時期に大学セミナー・ハウスの建築設計を手掛けたのである。当時の大学紛争と現実のギャップの中で吉阪の建築設計が師であるフランスのル・コルビュジェの影響を大きく受け、大学セミナー・ハウスのユートピアを偲ばせる構想にも精妙に反映させた点において、後世にも評価されている。開館後半世紀を経った今も見学者はあとが絶えない。特に建築を専門分野とする学生のゼミ合宿が多い。

かつて1980年代によくゼミ合宿で来館された当時東京理科大学教授の沖塩荘一郎氏（1928～）が寄稿してくださった「年に二回の建築計画系ゼミ－ハウスの建築群を教材として－」の中に次のような記述がある。

> 「東京理科大学工学部建築学科では、私の研究室を中心に、ここのところ年に二回大学セミナー・ハウスのお世話になっている。（略）セミナー・ハウスは、元早稲田大学教授の故吉阪隆正先生ご設計の建築群で、建築を考える上での話題のネタに事欠かせない。昨年までの六回は、ゼミのテーマを大学セミナー・ハウスの建築群を見て良い建築とは何かを考えるとした。」（『セミナー・ハウス』NO.95）

また、日本における種々の建築専門誌においても大学セミナー・ハウス建築群についての紹介がしばしば行われたが、中でも大学セミナー・ハウス特集を組んで最も詳しく紹介した一冊、『建築文化』（1979年９月号）があり、また近年では『住宅建築』（2013年４月号抜刷）がある。

この多摩の丘の上に出現したユニークな建築群はまさに善意の結晶である。開館時の本館やユニットハウス

20年余りかけて完成したセミナーハウス建築群

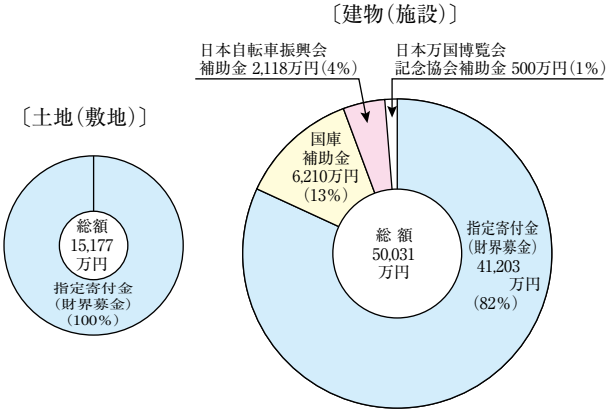
(100) 棟等第１期の建物の建築費は前述のように文部省の補助金のほか､多くの法人及び個人の寄附で賄われた。それ以外の建物が多摩の自然環境を保全しながら、地形を生かして、唐招提寺のように大小の建物を機能別に、しかも年を追って時代の要求に即応して建つようになったのは、一度に多額の建設資金を寄附によって賄うことが困難であったからである。

開館２年後の1967年７月に落成した講堂（当時別称体育館）と図書館は日本自転車振興会から１千２百50万の寄附を受け、さらに新たな１億５千万の募金活動の賜物であった。前者は学会の研究発表会やセミナー開催のための多人数収容が可能な場、また、雨天の場合に屋内での利用可能な体育館としての場となり、後者は辞書や教養図書等のある小規模図書館の必要性に基づいて実現したものである。その後も募金活動は続けられ、必要に応じた施設が建設されていった。

1968年12月に落成した松下館、別名教師館は教官が学生と個人的に話し合う場合にユニットハウスでは不便を感じ、加えてまた原稿執筆用の宿舎が必要と感じたことから建てられたものである。1970年１月に建てられた長期セミナー館はユニットハウスの二人部屋とは異なり、三、四、五人などを単位として、人数に応じたコミュニケーションが成り立つような組み合わせを考慮しての設計で、数日以上の集中的なゼミナール活動が望ましい時に利用できる宿舎である。そして、大学院セミナー館（1975年６月）は日本の大学院教育が反省期に入り、見通しを必要とされた時期に建てられたもので主に大学院生のセミナー、研究会等の場として提供された。1978年６月にオープンした国際セミナー館は当時日経新聞（1978. 2. 24）紙上に報道されたように「現代の松下村塾とも呼ばれる大学セミナー・ハウスでいま世界を日本に呼び込もうとの合言葉のもとに国際セミナー館の建設が進められている。同館設立の目的は、海外からの研究者や学生と寝食を共にしながら国際交流を図り、お互いの学問を深めようというもの。大学間の壁を超え、一つの大学共同社会作りを目指している大学セミナー・ハウスが、今度は国家間の壁を突き破った学問の場づくりを目指しているわけで、まだ多摩丘陵の自然が残る同セミナー・ハウスの新事業に期待が集まっている」、10人ないし20人の小規模の国際的集会が望ましく学生・研究者が交流の輪を世界に広げる場の提供が狙いであった。こうして開館から20年かけてやっと大学セミナー・ハウスの活動にふさわしいキャンパスになってきたのである。

20周年記念館は、大学セミナー・ハウス開館20周年事業として1989年７月に落成したものである。別名はインターナショナル・ロッジで、法人の「国際的知的交流事業」および東南アジア諸国からの留学生と日本人学生との緊密な交流を促進することを目的として建てられたものであるが、一般募金１億28万円、財団法人日本船舶振興会よりの援助金４千２百万円、法人自己資金１億１千９百万円およびその他の募金合計３億５百万円の建築費が投じられた。

土地，建物の資金源（1962-1976年度）



２．心地よい環境の整備

自然を生かしたユニークな建築群の建設とともに、長年大学セミナー・ハウスに来館される方々へ植樹の寄付

日豪合同セミナー記念植樹

東京外国語大学中嶋嶺雄ゼミによる花水木の記念植樹

を呼びかけた結果、当初裸地の丘は緑豊かになり、日本の四季を身近に味わえる魅力的な場所となった。学生時代によく来館され現在独立行政法人産業技術総合研究所の研究員である安宅光雄氏が大学セミナー・ハウスの魅力について次のように語ったことがある。

> 「（前略）ここに来るたびに不思議に思うことは、今まで気がつかなかった匂い、そして朝ここで目を覚ますと鳥の声が聞こえる。夜散歩すると裸電球のないところの道が暗いというようなことも感じさせてくれる。街の生活では感じられなかった匂いや音とか明暗などを感じさせてくれる。ここに来ることによって、今まで知らなかった人とか世界を知ることができ、今までそこにあるのに知らずにきた世界を知ることができる。また、かつて考えていたけれども、日常の生活の中で見失っていたものを再発見することができる。私にとって、セミナー・ハウスとはそういう場所でありました」（『セミナ・ハウス』NO.58）

確かに大学セミナー・ハウスキャンパスには、桜、欅や、紅葉、つつじ、椿、花水木、山茶花、銀杏等何十種類もの植樹が成長に伴い、四季それぞれ色彩を放つようになり、ほかに見られない香ばしい自然の香りがこの丘に漂うようになっていて、訪れる方誰もがここの景観に心を奪われている。

記念植樹の展開とともに来館者屋外活動の場としてテニスコート（1968年６月、日本自転車振興会補助金）、野外ステージ（1973年12月）を造り、和風談話室兼セミナー室の茅葺の遠来荘（1975年６月）もオープンした。さらに時代別に記念すべき名所、上代池（1968年７月）、真理の鐘（1968年12月）、開館五周年小庭園（1970年11月）、かや橋（1970年５月）、大浜岬（1972年３月）、佐藤峠（1972年11月）、一福亭（1978年）、山内小庭園（1991年５月）等が建設された。

ちなみに、上代池は上代たの氏の長寿祝いで法人創立当初からのお骨折りに感謝する意味で造られたものである。かや橋は一期目の館長を辞任される茅誠司への感謝

かや橋

大浜岬

佐藤峠（佐藤喜一郎氏が建碑のテープカット）

上代池
（上代たの氏と日本女子大図書館友の会の皆様）

方法として新築の長期セミナー館に通じる谷間に橋をかける必要があったので茅の苗字をいただいてかや橋と命名した。大浜岬については、もともとさんわみどり基金により造られたつつじの丘、大浜岬公園のことである。

ようこそ広場（佐藤峠建碑地・「火を握る人」詩の銅板レリーフが建てられている）

欅並木（長期セミナー館に行く小道）

遠来荘

中央庭園梅小道
（さくら館建設地）

法人敷地内丘陵の南端、当時第５群のユニットハウスの裏側を整地にして造られたもので、理事長であった大浜信泉の80歳長寿を祝して大浜岬公園に大浜岬と記した記念碑を建てた。そして、佐藤峠は当法人設立当初からの後援会長として建設資金の募集に尽力され、その後の募金にも大きな尽力をされた佐藤喜一郎氏に感謝するために命名されたものであり、経済成長期の日本の都市開発に伴い姿が消えた野猿峠のかわりになるものという意味で佐藤峠が作られた。佐藤峠を作る場所はようこそ広場としてその後記念撮影に利用されるようになった。

山内小庭園は、本館から長期セミナー館や国際セミナー館に行く途中別れ道の三角地帯にあり、二色の花が咲く椿や姫こぶしを毎年楽しめる。大学セミナー・ハウス支援組織千人会の第１号会員で、法人教育プログラムの育ての親とされた山内恭彦氏（1902-1986）が亡くなられた後に、奥様より先生が生前丹精された庭木を縁のある方々にお分けしたいとの申し出があったことで山内小庭園が誕生したのである。

千人会とは大学セミナー・ハウスの運営を支えるための個人からなる後援組織のことで、八王子にいた徳川幕府を守った千人同心隊になぞらえて名付けたものである。千人会の寄附金は人間の善意が具体化した財源として、学生セミナーの補助金に使われ、また環境整備のためにも使われている。

「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」
国際セミナー館正面の孔子のことばの書
（国際セミナー館落成祝賀会時に書家の松本筑峯氏より寄贈）

真理の鐘（松下館屋上・千人会より寄贈）

第３章　時代の変化に対応して……開館30周年から50周年まで（1996-2015）

第１節　創始の心を忘れずに公益事業の継続

１.「知的財産」としてのセミナー事業の継続

当法人主催のセミナー事業は大学セミナー・ハウスの「知的財産」である。開館当時開発された学生対象の大学共同セミナー教育プログラムと大学教員対象の大学教員懇談会は、日本の教育分野また当時の日本社会において大きな反響があった。大学紛争中にもかかわらず、大勢の学生や教員有志がここに集まり、学生がここで幅広く知の輪を広げ、教員がここで大学教育改革の議論を展開していた。当時の坂田道太文相が学生の意見を聞くために大学セミナー・ハウスを訪れた（東京新聞1969.6.13、サンケイ新聞1969.6.13、読売新聞1969.6.13）こともあった。大学セミナー・ハウスはまさに「大学の中の大学」という役割を果たしていた。

のちに日本の国際化という時代の要求に応え、開館７年目に国際学生セミナー教育プログラムが発足した。国際学生セミナーと大学共同セミナーは学生対象のセミナーであるが、前者は日本人学生以外に来日の留学生を受け入れ、国際問題の議論の場を提供していた。他方、教員対象の研修プログラムは大学教育の質が問われていたため、1989年に大学教員懇談会と並行して大学教員研修プログラム（FD プログラム）を開発した。国公私立大学から参加した教員が一堂に会し、種々の教育改革についての議論を展開した。そして、1999年、新たに大学職員対象の大学職員研修プログラムを開発し、大学改革における職員の役割の重要性を問うセミナーを開催するようになった。こうして、大学セミナー・ハウスは常に大学という機構の外にあって、大学教養教育の補完並びに大学改革の一翼を担ってきた。

長年継続してきた上記の教育プログラムのほか、1975年から議論が始まった大学院教育問題を視野に大学院共同セミナーを開催したこともあったが、法人運営の体制不備から事務遂行に円滑さを欠く結果となり、やむを得ず1979年の一回目から1999年の17回目をもって中止となった。また、土曜セミナー（1998年）、炭焼き教室（1999年）、ワインアカデミー（1999年）フィールドワーク体験セミナー（2000年）、高校生のための大学セミナー（2000年）等も企画したことはあるが、いずれも継続しなかった。

2000年になって日本の大学運営の環境が変わったことや法人施設の老朽化等により大学セミナー・ハウスキャンパスを訪れる学生は少なくなった。創始者のひとりである飯田宗一郎がこの年に逝去されたこともあり、大学セミナー・ハウスは一つの歴史的岐路に立たされた。昔の輝かしく賑やかなキャンパスを取り戻すことが出来るのか、苦悩のなか、2002年に法人運営の事務組織に変動があったことをきっかけに、創始の心を忘れず、法人新事務体制がスタートした。新事務体制はまずセミナー事業の企画運営を刷新し、主催教育プログラムの名称を「セミナー」と統一し、学生対象の大学共同セミナー、国際学生セミナーをそのままに、大学教員懇談会等教職員対象の研修プログラムを大学教員セミナー、大学職員セミナーと名称を変えた。そして、「四本柱」とした各セミナーの目的を次のように明文化した。

> 大学共同セミナーの目的：人文科学、社会科学、自然科学の広い領域の中からテーマを選び、学生を対象とする合宿セミナーを行うことによって、学生に全人的な知識と教養を深める研学の場を提供し、コミュニケーション能力を高める機会とする。また、国公私立の壁を超えた複数の大学の教授及び学生が寝食を共にすることにより、大学間相互の交流と親睦を深めることを目的とする。

> 国際学生セミナーの目的：国際関係に関する問題の中からテーマを選び、日本人学生及び留学生を対象とする合宿セミナーを行うことによって、国際的な視野と見識を培う場を提供し、グローバル時代におけるコミュニケーション能力を高める機会とする。また、国公私立の壁を超えた複数の大学の教授及び学生、留学生が寝食を共にすることにより、大学間相互の交流及び異文化理解を深めることを目的とする。

> 大学教員セミナーの目的：大学教育に関する国公私立の壁を超えた共通の課題や問題をテーマに選び、大学教員を対象とする合宿セミナーを行うことによって、情報交換の場を提供し、教員の意識と資質の向上を図る機会とする。もって、教育・研究機関としての大学の健全な発展に寄与することを目的とする。

> 大学職員セミナーの目的：大学運営に関する国公私立の壁を超えた共通の課題や問題をテーマに選び、大学職員を対象とする合宿セミナーを行うことによって、情報交換の場を提供し、職員の意識と資質の向上を図る機会とする。もって、教育・研究機関としての大学の健全な発展に寄与することを目的とする。

このように、法人の企画運営プログラムの組織と体制を一新することにより、時代の要請に応えたプログラムの充実をより一層図ることで2002年度に開催された第188回大学共同セミナー、第29回国際学生セミナー、第39回大学教員セミナー、第５回職員セミナーは空前の盛況を迎えた。

その上、大学セミナー・ハウスが日本の大学教育改革の最先端に立ち、国公私立大学の壁を越えた唯一の交流

主催セミナーアルバムから

特別講演

「21世紀の世界と国際秩序」小和田恆先生

「大学の将来と職員のあり方」御手洗康事務次官

中嶋嶺雄理事長・館長の挨拶

「大学危機回避、大学の改革」を語る教員・職員たち

自己表現トレーニング

大学教員セミナー基調講演　寺嶋昌男先生

中嶋嶺雄理事長と御手洗事務次官

大学職員セミナー「提言」丹内明良氏

大学職員セミナー「提題」：左から斉藤恵子先生・小舘香椎子先生・高橋真義先生

「キャリアと自己実現」を先輩たちと語る

上野格弁護士と椛嶋裕之弁護士

上篠田節子先生と川人博先生

「地域紛争と 21 世紀の国際秩序」を熱論

天児慧先生と池田明史先生

清水学先生と堀本武功先生

中嶋幹起先生と北原和夫先生

若林正丈先生と中兼和津次先生

小和田先生と学生たち

モーニングツアー

セミナーで賑わうこの出会いの丘（2002年）

の場として再び注目を惹くため、2005年２月６日に「我が国の高等教育の将来像」公開セミナーを開催した。当時注目された21世紀知識基盤社会における高等教育のあるべき姿について、中教審の天野郁夫委員、中嶋嶺雄委員、文部省の徳永保高等教育担当審議官及び民間有識者日下公人氏をパネリストに迎え、大学関係者や大学に関心を持つ人たちと膝を交えて日本の高等教育の将来像を語り合い、新時代の高等教育を如何に築くべきか議論する場を設定したのである。開催日は日曜の午後にも拘らず、70名を越える方々が参加された。

日本の大学改革は戦後から今日まで絶え間なく論じられ続けてきた。最初は国全体の制度上の問題、次に入試と就職の問題や大学の自治問題、大学の教育と社会的ニーズとの関連問題、魅力のある大学とは等必要に応じて改革の議論を展開してきた。21世紀に入り、優れた教育や研究とは何か、大学教育の中身を問題とするようになった。大学セミナー・ハウス主催の大学教員セミナーはいつの時代でも先頭に立ち、時代の要請に合わせた課題を設定して国公私立の壁を超えた大学教員同士の議論の場を提供してきた。「我が国の高等教育の将来像」公開セミナーの開催はそういう立場の大学セミナー・ハウスの存在が再度確認され、大学セミナー・ハウスの存在価値を高めるセミナーとなった。

「わが国の高等教育の将来像」公開セミナーパネリスト達（2005年）

2005年は大学セミナー・ハウス開館40周年を迎えた年である。活気を取り戻した主催セミナープログラムの一部をこの年から市民にも公開し始め、地域住民参加の「親子で学ぶ四季の植物誌」セミナー等の企画も多数試みられた。そして、2008年から日本の教育職員免許法及び教育公務員特例法の一部改正により教員免許状更新講習、2011年から大学新任教員研修セミナーを開催し、これらは現在まで続いている。

しかし、学生対象の大学共同セミナーは2003年の189回をもって企画運営上の問題により中止となり、国際学生セミナーは継続して開催されてきたが、2014年11月22～23日に41回目の「アジア・太平洋の歴史と未来－国際関係論と地域研究の視点から」をテーマとした中嶋嶺雄前理事長追悼セミナー（参加者87名）が開催されたのを最後に中絶している。その間には古田武彦氏を講師に迎える古代史セミナーは2004年から2014年まで計11回開催し、また国際教養セミナーを新規企画として４回シリーズ（2007-2010）で開催した。現在2012年度から始まった大学共同ゼミの EU セミナーが年１回開催されている。今年2016年６月11～12日に大学セミナーハウス開館50周年記念セミナー「憲法を学問する」を開催し、戦後憲法学の泰斗樋口陽一氏、石川健治氏等各世代を代表する憲法学者を講師に招き、北は北海道から南は九州までの大学から60名の学生、研究者、社会人が参加した。学生対象のセミナーは今後如何に企画し開催していくかは重要な課題となっている。

２．開かれた研修施設としての利用者対策

大学セミナー・ハウスは開かれた研修施設として様々な合宿グループが利用している。中には開館当時からまたは何十年もかけて毎年来館するグループがあり、十大学共同セミナー、日豪合同セミナー、八王子建築ゼミ、数論セミナー、大澤ゼミ生再会合宿、ホワイトホースシアター、文学教育研究者集団、現代と経済、AITC、JUCTE、東都学生軟式野球連盟、マレーシア日本高等教育プログラム（MJHEP）等がある。十大学共同セミナー

さくら館開館記念の集いテープカット（2006年5月8日）

は大学紛争時代に十大学の国際関係論専門の大学教員と学生が参加した合同ゼミである。日豪合同セミナーは当法人主催の国際学生セミナーに参加したオーストラリアの５名の留学生が中心となって実現したもので、のちに日豪学術文化センター主催になり、今日まで継続している。文学教育研究者集団は毎年８月６日に来館し、松下館屋上の真理の鐘を鳴らして広島の原爆で犠牲になった方々に追悼の意を捧げている。大澤ゼミ生再会合宿は1973年東京理科大学大澤綱一郎先生ゼミ合宿に参加された９人の学生が1976年から毎年８月に大学セミナー・ハウスで先生を囲み再会合宿を行い、大澤先生が亡くなられた後も現在まで続いている。

しかし、当法人主催の第37回大学教員セミナーの課題「目標見えぬ大学教育－少子化・大衆化時代の中で」のように、2000年頃からは日本の少子化に伴う大学過剰、

2006年建築のさくら館

入学志願者数の減少等問題が浮上した。その頃から当法人主催の大学教員セミナーと大学職員セミナーは「存在の意義ある大学へ」「大学の競争時代における大学教員の生き方」「大学危機回避」等を取り上げる主題が目立つようになった。このような環境変化の時代にあって大学セミナー・ハウス宿泊施設の老朽化が進み、さらに独自のセミナー・ハウスを持つ大学の増加によりゼミ合宿の教員と大学生や、大学による新入生オリエンテーションの利用が減少した。

利用者減少の問題を解決するために当法人は、まず、老朽化の宿泊施設を改善し、2006年に130名収容の宿泊研修棟さくら館を新規に建設した。さくら館の開館により、大学セミナーハウスとしては開館40年を機会にかつてシンボル的存在であったユニットハウスの一般利用を停止した。その結果一時年間利用者が２万４千名まで低迷したものが３万５千名まで回復した。次に、キャンパス敷地内の長年の林を取り除き、谷を埋め立てサッカーや屋外運動用にグランドを造成した。また、倉郷地域住民の協力もえて、キャンパスに沿って通る市道が開通することになった。これらの一連の変革を行った結果、大学セミナーハウスの様相は一変し、新時代の変化に対応できる条件が整えられた。

そのうえ、利用者対策の一環として社会人へ利用を呼びかけた結果､近年は新入社員研修で大戸屋､大東建託､文明堂、スリーボンド等会社の利用が増えている。

2014年から滞在期間が短期であるために学生寮や賃貸物件への入居が困難な海外から首都圏（特に多摩地域）の大学に留学する学生・教職員向けに留学生短期滞在支援プランを提供し、多くの留学生や海外からの研究者が利用している。なかにアメリカから来られた国際教養大学の留学生であったサム君より次のメッセージがあった。

私の名前はサムミラです。アメリカのサンフランシスコ国立大学（San Francisco State University）から卒業しました。2011年８月から、秋田にある国際教養大学に一年半留学しました。留学の間に東京に行きました。私はどこに泊まるか分かりませんでしたので、ちょっと困りました。友達から大学セミナーハウスの留学生短期応援プランを教えてくださいました。私はその応援プランを利用させていただき、一週間大学セミナーハウスに泊まり、大変助かりました。大学セミナーハウスはすばらしい場所です。駅までちょっと不便ですが、ユニークな建物を見ると、私は感銘を受けました。ハウスのスタッフはとても親切でいろいろ手伝ってくださいました。たくさんの人に会い、新しい友達が出来ました。私はただの一週間大学セミナーハウスに泊まりましたけど、そこで過ごした時間は私の日本留学生活の最高の経験の一つになりました。（Sam Miller　アメリカ国籍、国際教養大学留学中の2012年12月23～31日宿泊）

Sam Miller 君

2015年の大学セミナーハウス開館50周年を迎え、記念事業として現在使用していないユニットハウスをアトリエとしてアーティストの方々に利用していただき、個性豊かな建築群を活かしつつ、アーティスティックな環境を作るのを狙いとしたアートビレッジを2012年に開村した。また小中高大学の学生のみならず、学校教職員、社会人に体験型学習プログラムとしてのセミナーハウス・プロジェクト・アドベンチャー（SPA）の提供を開始した。このほか、開館50周年記念事業の一環として１億２千万円の予算でさくら館の隣に572.05平米、220人収容の食堂棟を新築し、2016年11月12日当法人50周年記念会開催の日にオープンすることになった。

新食堂棟（写真：北田英治）

第２節　留学生支援事業の展開

１．留学生会館の開館

留学生会館は2003年に当時の理事長、中嶋嶺雄氏の提案によって建設された。建築費は中嶋嶺雄理事長個人の浄財と一般寄附、法人自己資金と財団法人日本国際教育支援協会からの助成により、総額１億２千８百万円で建築したものである。留学生会館の建築は、来日の留学生が10万人を超え、国公私立大学の留学生宿舎には全留学生数の約15％（2003年現在）しか入居できず、特に多摩地区の各大学でも留学生数が増加の傾向にあることを視

2005年建築の留学生会館

野に、当法人が新たに留学生支援事業を展開するものとして、大学セミナー・ハウス40周年記念の2005年に開館したものである。全館はシングルルームで25室である。

当法人は国際セミナー館を建設した1978年以来、国際交流の場を提供し、多くの海外からの学生や教員諸氏を迎えてきた。１泊から数泊の短期滞在を中心の施設であったが、留学生会館の建設により海外からの長期滞在留学生に住環境を提供することができるようになった。場所的に交通不便なところもあるが、日本の四季の移り変わりを十二分に体感でき、日本の自然と日本人の心を知る絶好の環境にあり、安全で心地よく住めるところが好評である。

2005年４月23日、大学セミナー・ハウス開館40周年、留学生会館開館式典が行われた日に、５大学に在籍する

40周年記念式典祝賀演奏会（講堂）

40周年記念式典同時開催観桜会茶室で茶道楽しむ留学生たち

６カ国からの留学生、25名が入居された。開館から今日まで10年過ぎたが、90％以上の入居率を維持してきた。部屋数が少なく入居人数が限られているが、諸外国との相互理解を促進し、人的ネットワークの形成、国際社会に対する知的国際貢献が少しでもできるよう、留学生の勉学や生活上の悩み事相談等のフォローを日々心懸け、会館居住体験者に対してのアフターサービスを行っている。アフターサービスとは帰国された元留学生の方より日本を短期に訪問したいとの要望がある場合、来日に関する諸連絡や手続きの手伝いをすることである。

かつて留学生会館に日々を過ごした留学生諸君が思い出を寄せてくれたのでその内容を紹介する。

GRIB DINA さん

大学セミナーハウス留学生会館の入居者でここに住む期間が一番長いといわれて少々ショックでしたが、さすがに楽しく過ごす時間があっという間に感じるのだなと納得いたしました。

留学生会館のことを学校の国際課から伺って、学校に近いという理由だけで入居したいと決めましたが、実際は思ったよりも住みやすくて素晴らしいところでした。東京都内なのに、近所に直売で野菜が買える畑があって、夜は星が見えて、とても自然豊かなところですから、勉強も捗ります。また、女性として気になる安全性の面でも大学セミナーハウス内ですから安心です。さらに、家具など生活に必要な物は何でも揃っているのが、海外から来日する留学生にとって非常にありがたいです。しかし、何よりもスタッフの方々の優しさが心にしみて、いつも親切にご対応いただき、感謝の気持ちでいっぱいです。（GRIB Dina　ロシア国籍・首都大学東京大学院生、2016年現在在居）

蔡　雯雯さん

大学セミナーハウスは今年に50周年を迎えることになります。こんなおめでたい日に、大学セミナーハウス留学生会館に住んでいた頃のことを思い出させます。私は2010年日本に来た日から2014年大学院卒業した頃までずっとセミナーハウスに住んでいました。セミナーハウスの便利な施設やグローバルな環境が私の脳裏に焼きついたように今でもはっきり浮かんできます。しかし、一番忘れられないのはセミナーハウススタッフ達の優しさ。私はセミナーハウスに住み始め半年も経ってない2011年３月11日に東北大震災が起きました。当時頻繁に起きた余震や福島の問題は、留学生活にまだ慣れてない留学生会館の在住者達に非常に不安をさせました。セミナーハウスの孫国鳳先生は留学生達を安心させるために、会館で交流パーティーを行いました。皆はパーティーで地震から学校や日常生活の様々な情報を交換し、仲良しになりました。おかげで留学生会館の皆さんは地震等の心配があるにも関わらず、日本

で安心な暮らしを続けられました。私もあのパーティーで親友ができました。　大学セミナーハウスと一緒に過ごした４年間は私にとってかけがえのない一生の宝物。今後もより多くの方々はセミナーハウスと一緒に貴重な思い出を作れるよう心よりお祈りします。（蔡　雯雯　中国国籍・中央大学大学院修了、2010年10月６日～2014年３月27日在居）

鄒 文君

10年前私は中央大学で勉強している中国の大学の教員として、留学生会館に一年間泊まらせていただきました。美しい自然景色と独特な雰囲気や環境でとても充実で楽しく一年間を生活していい思い出ばかりです。初めての日本で、何にもわからないのでとても心配でしたが、セミナーハウスのみなさんはとても親切で至れり尽くせりのサービスで大変お世話になり、安心して滞在でき、非常に楽しかった。特に孫国鳳先生は私たちを自分の家族同様に接していただき、日本の事情や習慣までもいろいろ教えていただきました。私たちは何かあったら必ず孫先生に助けてもらいます。感謝の気持ちはいっぱいです。大学セミナーハウスを一生忘れられません。大学セミナーハウスのさらなる発展を心からお祈りいたします。
（鄒　文　中国国籍・元中央大学大学院研究員、2006年５月14日～2007年５月15日滞在、現中国長江大学外国語学院准教授）

２．留学生論文コンクールの開催

留学生論文コンクールは、当法人の留学生支援事業の一環として、留学生の日本語による論文作成能力を向上させる機会を提供するとともに、日本留学の成果を発表し、国際相互理解及び国際交流を促進することを目的として2009年から開催したものである。主催は当法人、共催は留学生新聞、後援は文部科学省、外務省、国際交流基金日本語国際センター、国際留学生協会である。当コンクールは東日本大震災が発生した2011年は一旦中止になったが、2012年に再開し、今年2016年は７回目の開催となる。

留学生論文コンクールの課題は在日の留学生諸氏が書きやすいよう毎年同じ「私が考える地球的課題」とし、応募の小論文のタイトルは各自で自由に選べるようにしている。表彰として金賞（10万円１本）、銀賞（５万円２本）、銅賞（３万円３本）、参加賞（図書カード　１千円100本）を設けている。受賞論文は、当法人のホームページと「留学生新聞」に掲載する。

留学生コンクール授賞式（2009年11月14日 ）

初回2009年の留学生論文コンクールは100件を超えた応募があり、日本全国66大学、９カ国からの留学生が参加した。論文といえば、ある問題意識を提起し、論拠、結論等、起承転結を明確にした章立てがあり、独自の主張を論理的に述べる文章でなければならない。しかし、初回の応募論文は日本文化理解に関するものや日本留学体験談等が多く、論文というより作文といった方が良いものが多かった。審査の結果、金賞に当たるものがなかったため、予定の銀賞・銅賞のほか、10本の優秀賞を特別に設けた。受賞された方々の国別は中国が９名（内香港地域１名を含む）、韓国が２名、カンボジア、イタリア、タイ、ハンガリーが各１名であった。ちなみに、銀賞の２本は、大東文化大学の中国からの留学生李凌君の「環境問題と日本人の自然観についての考察」と一橋大学の韓国からの留学生劉正来君の「諺からみた日・韓社会的通念の差－‘出る杭は打たれる’を例として－」であった。表彰式は同11月14日に第３回国際教養セミナーと同時開催になり、銀賞２名、銅賞３名、優秀賞10名内の３名方が出席された。

留学生論文コンクール2010は応募者の出身国の数が増え12カ国になり、初回と比べて日本に関する内容のものが減り、民族紛争、地球温暖化等グローバルな問題を取り上げる内容のものが多くなった。金賞に当たる論文に選ばれたのは、当時日本でも問題視され始めた国際結婚家庭が離婚後片親による国境を超えた子供連れ去り問題を論じた、東北大学のエストニアからの留学生ローツ・マイアさんの「子どもの権利の保障－国際的子の連れ去りを中心に」である。

留学生論文コンクール2009表彰式同時開催の第３回国際教養セミナー基調講演（久保文明氏）

３回目の2012年からは応募論文全体の文章レベルが上がり、論じられる内容はグローバルな経済危機、環境問題、人口問題、国家間のコミュニケーション問題、エネルギーと戦争、原子力問題、サイーバー攻撃等ありとあ

らゆる問題へのアプローチが展開されるようになった。その中には注目される時事問題を取り上げるものもあった。例えば2012年は日中国交正常化40周年で、両政府がこの年を「日中国民交流友好年」とすることに合意し、中国国内も祝いのムードになったが、日本政府による尖閣三島購入により、日本に対する中国の国民感情が急速に冷えた。他方、日本国内には「日中国民交流友好年」に関して知る人がほとんどいなかった。この年の銀賞２本の内、名古屋外国語大学の中国からの留学生陳林俊君の「日中関係の打開策についての提言－謙虚に耳を傾け合おう」がそのような日中間の問題を取り上げ、前向きの打開策を提示したものであった。2013年に発生した韓国へのサイーバー攻撃を背景に書かれた応募論文「情報技術の発達による新たな地球問題－ネットナショナリズムとサイーバー攻撃－」は、早稲田大学の韓国人留学生李苑暻さんからの応募論文で金賞が授与された。2014年には「イスラム国」による文化遺跡の略奪や破壊があった。その事件とは直接な関係がないが、群馬県立女子大学の韓国からの留学生権和榮さんが「文化遺産の破壊と略奪に対しての人類の課題」をテーマに、「文化遺産を守る事は人類の文化の多様性についての理解と尊重を次の世代に伝えるための、人類知性の次の世代と地球に対しての義務である」と主張した論文もあった。

前列は2009年度受賞者の留学生諸君

当法人主催の留学生論文コンクールは留学生諸君が日本に来て学んだ知識と日本語能力を発揮し、その留学の成果を発表する場となった。われわれは今後もこの企画を通じて国際相互理解及び国際交流が促進されることを願ってやまない。

留学生会館開館初の入居者キャンパス見学
（2005年４月１日）

中央大学研究員の楊為喬様が描かれた本館
（2007年11月27日）

東日本大震災時に避難せず平常通り生活していた留学生たち（2011年4月21日）

40センチも積もった雪のなか、会館前の雪かきをする留学生たち（2014年２月17日）

年に一度留学生会館在住の留学生を対象に消防訓練を実施（2015年10月13日）

公益財団法人大学セミナーハウス年表

年	運営・組織	高等教育関連事項
財団法人創立以前		
1959 （昭和34）	11.25セミナー・ハウスの構想を話し合う初会合。提唱者は飯田宗一郎、出席者は上代たの、大浜信泉、茅誠司等９名。	1.12橋本龍伍文部大臣（第二次岸内閣）に就任。11.27国会請願のデモ隊約２万人国会構内に突入。
1961 （昭和36）	8.18財界有志を招き大学セミナー・ハウス建設懇談会（銀行倶楽部）。11.1設立準備事務所設置（於三井銀行本町支店ビル内）。11.30財団法人大学セミナー・ハウス設立発起人会(於日本工業倶楽部)。	8.13コロンボ計画の日本語教育専門家の派遣開始。
財団法人設立		
1962 （昭和37）	1.20建設敷地を都下南多摩郡柚木村に決定。3.31財団法人大学セミナー・ハウス設立認可、石館守三を理事長に。5.14建設後援会発起人会（於三井銀行本店会議室）、常任委員23名を選ぶ。8.11建設資金３億円募金の指定寄付許可。9.19建設後援会創立総会（於東京大学懐徳館）。11.1国立大学会員校会費支出承認、設立発起人校（国公私立13校）を母体に協力会員校制度発足。12.21建物設計・監理、U研究室（主宰・吉阪隆正早大教授）に決定。	4.18文部省大学設置基準の一部改正。11.7学制90年式典を挙行。
1963 （昭和38）	1.21財団法人創立記念公開講演会（於朝日講堂）。5.27第１回財団法人評議員会（於国際文化会館）。6.29会員校大学教員懇談会「大学教育セミナー」(於箱根福住旅館)。11.2地鎮祭。	7.18灘尾弘吉文部大臣（第二次池田内閣）に就任。
1964 （昭和39）	4.20会員校学生部関係者懇談会。8.28国庫補助金交付決定。10.1大浜信泉理事長に、茅誠司館長に、飯田宗一郎専務理事に就任。12.11寄付行為一部変更認可（館長制及び専務理事制の制定)。	2.18文部省学寮の管理運営に要する経費の負担区分及び参考案「○管規」を通達。11.9佐藤内閣成立。
財団法人大学セミナー・ハウス開館		
1965 （昭和40）	4.17建築工事の中間披露。５月3億円募金の金額290,073,851円になる。7.5～７開館式、初回大学共同セミナー・開館記念セミナー「世界の中の日本」開催（2003年189回開催・以後中止)。11.1ユニットハウス・本館建築落成式。11.2～４大学セミナー・ハウス落成記念セミナー「現代思潮と日本 - とくに新しい人間像の形成のために」開催。	6.3中村梅吉文部大臣（第一次佐藤内閣）に就任。6.9文部省「教師の地位に関する勧告」草案を日本の国情に沿わないと発表。9.22お茶の水女子大学学生、ストに入る。11.1東大全学生に小冊子『大学の自治と学生の自治』を配布。11.30国立大学協会「学生問題に関する所見」を発表。
1966 （昭和41）	7.3開館一周年記念オープン・ハウス。10.14増田四郎理事長に就任。11.12第１回会員校事務連絡会、講堂・図書館地鎮祭。11.28第１回産業人セミナー。	6.14「教師の地位に関する勧告」条約発効。8.1有田喜一文部大臣（第一次佐藤内閣）に就任。8.20中国で紅衛兵、「四旧」打破を要求して街頭に進出、文化大革命開幕。12.3剣木亨弘文部大臣（第一次佐藤内閣）に就任。
1967 （昭和42）	5.29拡充資金１億５千万円募金の指定寄付許可。7.10開館２周年記念式、講堂・図書館落成式、千人会（維持後援会）発足。	2.11初の建国記念日。11.25灘尾弘吉文部大臣（第２次佐藤内閣）に就任。

年	運営・組織	高等教育関連事項
1968 （昭和43）	4.12松下館地鎮祭。5.拡充資金１億５千万円募金の目標を１年で達成。6.29テニスコート竣工式。7.26開館３周年記念式典、上代池の命名。12.7松下館落成式、千人会寄附の真理の鐘設置。12.7建設資金３億円募金の目標を達成して建設後援会解散。	1.29東大医学部学生、無期限ストに入る。2.12警視庁「学内出動基準」を通達。5.27全学共闘会議結成。6.2東京教育大学学生、ストに突入。６月外国人留学生問題研究会JAFSA正式に設立。9.30日大全学共闘会議学生約一万人、古田重二良会頭と大衆団交。11.30坂田道太文部大臣（第２次佐藤内閣）に就任。12.17文部省､大学紛争白書発表（紛争大学、国立62、公立15、私立47校）。12.23政府、自民党、大学紛争対策を協議。12.30東大、東京教育大、東京外大の紛争３重症校のうち東京外大のみ入試断行を決定。
1969 （昭和44）	8.20敷地拡張のため隣接山林4,763.9坪買収。9.18長期セミナー館地鎮祭。	8.7大学の運営に関する臨時措置公布。
1970 （昭和45）	4.1高村象平理事長に、増田四郎館長に就任。本年度から事業費に国庫補助金交付。4.28開館５周年記念１億８千万円募金の指定寄付許可。5.10長期セミナー館落成式・かやばし渡り初め。9.19～20第１回大学教員懇談会（2002年より大学教員セミナーに改称して2012年53回開催・以後中止）。10.22開館５周年記念式。	3.15日本万国博覧会開幕（大阪万博）。11.25三島由紀夫、割腹自殺。
1971 （昭和46）	6.1大浜信泉理事長館長を兼任。	7.1文部省「教育改革推進本部」発足。7.5高見三郎文部大臣（第４次佐藤内閣）に就任。
1972 （昭和47）	3.16大浜岬公園竣工・開園。3.29～31第１回国際学生セミナー開催(2014年第41回開催・以後中止)。4.1加藤六美理事長兼館長に就任。11.18創立10周年・開館７周年記念式、記念庭園ようこそ広場竣工、佐藤峠の命名。	1.9国公私立大学120校で国立大授業料三倍値上げ政府案に反対闘争。7.7稲葉修文部大臣(田中内閣)に就任。10.5学制発布百年記念式典。12.22奥野誠亮文部大臣（田中内閣）に就任。
1973 （昭和48）	12.1野外劇場竣工	9.29筑波大学設置､新たな大学管理方式｢筑波方式｣を導入。
1974 （昭和49）	2.15正田建次郎理事長兼館長に就任。6.14飯田宗一郎館長に就任（専務理事兼任）。6.15宿泊者30万人に到達。11.9故佐藤喜一郎氏（財界協力者）追悼記念会。	4.25筑波大学開学。10.11三原朝雄文部大臣（田中内閣）に就任。12.9永井道雄文部大臣（三木内閣）に就任。
開館10周年		
1975 （昭和50）	2.1開館10周年記念事業二億円募金開始（１年間）。6.27大学院セミナー館落成、遠来荘移築復元完成（遠来荘は2007年に四国へ移築）。8.31千人会員千人を越え1,013名に。11.1開館10周年記念式典。	7.11私立学校振興助成法公布。
1976 （昭和51）	11.25会員校50校に。	12.24海部俊樹文部大臣（福田内閣）に就任。
1977 （昭和52）	6.9川喜田愛郎理事長に就任。6.23国際セミナー館・交友館地鎮祭。7.1国際プログラム委員会発足(委員長：川田　侃氏)。7.16本法人を試験研究法人に指定。	11.28砂田重民文部大臣（福田内閣）に就任。
1978 （昭和53）	5.27交友館落成。6.23～24特別企画国際学生シンポジウム（国際セミナー館落成記念）6.24国際セミナー館落成。10.8大学共同セミナー第100回に達する。	12.7内藤誉三郎文部大臣（大平内閣）に就任。

年	運営・組織	高等教育関連事項
1979 （昭和54）	4.6茅誠司理事長に就任。6.23～25第１回大学共同大学院セミナー（1999年第17回を最後に終了）。	1.13初の国公私立大学共通一次学力試験実施。11.20谷垣専一文部大臣（大平内閣）に就任。
1980 （昭和55）	6.2開館15周年記念講演会（於朝日講堂）。6.6飯田宗一郎名誉館長に就任、茅誠司館長を兼任。10.25開館15周年記念式典。	7.17田中龍夫文部大臣（鈴木内閣）に就任。
1981 （昭和56）	2.3中川秀恭氏館長に就任。4.1準協力会員校制度発足。7.8開館10周年記念募金終結（総額２億７千３百５拾５万２千円）。12.12故吉阪隆正先生追悼記念会。	11.30小川平二文部大臣（鈴木内閣）に就任。
1982 （昭和57）	3.26飯田宗一郎を館長補佐に。7.1中川秀恭理事長に就任（館長兼任）。	11.27瀬戸山三男文部大臣（中曽根内閣）に就任。
1983 （昭和58）	11.21.20周年記念事業特別委員会設置、５億円目標の募金計画。	8.31中曽根内閣「留学生十万人計画」提言。12.10中曽根首相「教育改革七つの構想」発表。12.27森喜朗文部大臣（中曽根内閣）に就任。
開館20周年		
1985 （昭和60）	3.19開館20周年記念募金目標額を３億５千万に減額。7.5利用者数延べ86万人に。10.25ニュース「セミナー・ハウス」第100号発行。10.26開館20周年記念式典。	12.28海部俊樹文部大臣（中曽根内閣）に就任。
1986 （昭和61）	4.1開館20周年記念募金活動開始（目標額２億7,500万円）。	5.7国立大学協会、87年春の国立大学二次試験の受験機会複数化の実施要領を発表。7.22藤尾正行文部大臣（中曽根内閣）に就任。9.9塩川正十郎文部大臣（中曽根内閣）に就任。
1988 （昭和63）	2.18宿泊利用者100万人に到達。3.31開館20周年記念募金活動終了（１億4,373万円）。9.9開館20周年記念館地鎮祭。	5.25国立学校設置法の一部を改正する法律公布（大学入試センターの改組）。
1989 （平成元）	7.8開館20周年記念館（インターナショナル・ロッジ）落成。	6.2西岡武夫文部大臣（宇野宗祐内閣）に就任。8.10石橋一弥文部大臣（海部俊樹内閣）に就任。
1990 （平成２）	6.1岡宏子館長に就任、飯田宗一郎名誉館長を特別顧問に。9.29第１回教員研修（ＦＤ）プログラム開催（2002年終了）。	1.11初の大学入試センター試験実施。2.28保利耕輔文部大臣（第２次回付内閣）に就任。12.29井上裕文部大臣（第２次海部改造内閣）に就任。
1993 （平成５）	5.27「将来企画特別委員会」設置。11.2「諸規定改正検討作業部会」設置。	8.9赤松良子文部大臣（細川護熙内閣）に就任。
開館30周年		
1995 （平成７）	7.8開館30周年記念の集い。8.1佐野博敏氏理事長に就任。	3.20地下鉄サリン事件。8.8島村宜伸文部大臣（村山内閣）。
1998 （平成10）	6.1佐野博敏理事長、館長を兼任。7.5岡宏子館長追悼記念会に皇后陛下ご来館。12.19第１回土曜セミナー開催（2000年７月まで計７回開催）。	7.30有馬朗人文部大臣（小渕恵三内閣）に就任。10.26大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境中で個性が輝く大学」答申。
1999 （平成11）	7.14第１回大学職員研修プログラム開催。	8.13国旗、国歌法公布・施行。10.5中曽根弘文文部大臣及び科学技術庁官（小渕内閣）に就任。

年	運営・組織	高等教育関連事項
2000 （平成12）	1.26飯田宗一郎逝去。6.1中嶋嶺雄理事長に、絹川正吉館長に就任。10.1故飯田宗一郎名誉館長をしのぶ会開催。	7.4大島理森文部大臣及び科学技術庁官（森第２次内閣）に就任。11.22大学審議会が「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」及び「大学入試の改善について」の二つを答申。12.5町村信孝文部大臣及び科学技術庁長官（第２次森内閣）に就任。12.22教育改革国民会議が最終報告。
2001 （平成13）	8.23フィールドワーク体験セミナー開催。11.1創立40周年募金活動（～2003年３月31日）。	1.6中央省庁の再編整備により、文部省と科学技術庁が統合され､文部科学省となる。1.25文部科学省、第１回教育改革推進本部会議開催。2.1新中央教育審議会発足。4.26遠山敦子文部科学大臣(小泉内閣)に就任。11.26文部科学大臣が中央教育審議会に｢教育振興基本計画の策定」及び「新しい時代にふさわしい教育基本法の在り方」について諮問。
2002 （平成14）	３．１中嶋嶺雄理事長、館長を兼任。 5.1主催セミナーを「大学共同セミナー、国際学生セミナー、大学教員セミナー、大学職員セミナー」の四本柱に改革。 5.30事業運営の方針転換、「地域との連携強化もめざす」新執行体制スタート。	2.21中央教育審議会が遠山文部科学大臣に答申「新しい時代における教養教育の在り方について」､「大学等における社会人受入れの推進方策について」。7.12文部科学省「英語が使える日本人の育成のための戦略構想」公表。11.14中央教育審議会が遠山文部科学大臣に「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画」について中間報告。
2003 （平成15）	4.10観桜会。7.1開館40周年記念募金（～2005年６月30日）。	3.20中央教育審議会「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方」を遠山文部科学大臣に提出。3.31文部科学省、「英語を使える日本人」育成のための行動計画策定。7.9国立大学法人法等の関係六法案が国会で可決。9.22川村建夫文部科学大臣（第２次小泉内閣）に就任。
2004 （平成16）	4.1荻上紘一館長に就任。6.28留学生会館起工式。11.13～14古代史セミナー「海のロマンと日本の古代」開催（2014年第11回開催し終了)。	4.1国立大学法人化。4.8初の公立大学法人国際教養大学開学。9.27中山成彬文部科学大臣（第２次小泉内閣）に就任。
開館40周年		
2005 （平成17）	2.6公開セミナー「我が国の高等教育の将来像」開催。2.16留学生会館落成。4.23大学セミナー・ハウス開館40周年、留学生会館開館記念式典開催。	1.26中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申。10.31小坂憲次文部科学大臣（第３次小泉内閣）に就任。
2006 （平成18）	4.1さくら館開館。5.8さくら館開館記念の集い。6.1佐藤東洋士氏理事長就任。	9.26伊吹文明文部科学大臣（第1次安倍内閣）に就任。12.15教育基本法改正法成立
2007 （平成19）	11.16～17国際教養セミナー「多文化共生の道を探る―グローバル化の中の他文化と日本」開催（４回シリーズで年１回2010年まで開催)。	7.31教育職員免許法及び教育公務員特例法の一部を改正する法律について（通知)。９.26渡海紀三朗文部科学大臣（第1次福田内閣）に就任。
2008 （平成20）	2.1講堂から本館食堂へ行く小山を迂回する小道を開通。3.1国際館シャワー室８か所新設、トイレをウォシュレットに、４室に２段ベッドを入れる。7.28～31第１回教員免許状更新講習を開催。	4.2文部科学省「質の高い大学教育等推進事業委員会議」。8.2鈴木恒夫文部科学大臣(第２次福田内閣)に就任。9.24塩谷立文部科学大臣(麻生内閣)に就任。
2009 （平成21）	4.1～11.15第１回留学生論文コンクール開催。6.10交友館は学生交歓室からＡ・Ｂセミナー室に改修。	4.1教員免許更新制導入。9.16川端達夫文部科学大臣（鳩山内閣）に就任。

年	運営・組織	高等教育関連事項
2011 （平成23）	4.1財団法人から公益財団法人に移行。東日本大震災（３.11）により留学生論文コンクール2011中止。9.5～７第１回新任教員研修セミナーを開催。11.12特別企画セミナー・芝浦工業大学との共催事業「グロバル人材育成のために大学教育に臨むこと」開催。	9.2中川正春文部科学大臣（第１次野田内閣）に就任。11.文部科学省「大学における教育内容等の改革状況等について」調査
2012 （平成24）	8.12アートビレッジ開村。9.28～30第１回EUセミナー開催。10.13～14第１回アートビレッジセミナー（以後アーティストによる自主企画事業として実施）。11.1開館50周年記念事業実施、開館50周年記念募金開始（～2016年３月31日まで）。	1.13平野博文文部科学大臣（第２次野田内閣）に就任。５.文科省高校教育局学生・留学生課「留学生支援事業及び留学生生活支援事業の概要」。10.1田中真紀子文部科学大臣（第３次野田内閣）に就任。12.26下村博文文部科学大臣（第２次安倍内閣）に就任。
2013 （平成25）	6.15鈴木康司館長就任。5.27「開館50周年記念事業実施計画」決定、「開館50周年記念事業特定寄附金取扱規則」実施（2016年３月31日まで）。	11.文部科学省「国立大学改革プラン」、「大学における教育内容等の改革状況等について（概要）」
2014 （平成26）	5.1セミナーハウス・プロジェクト・アドベンチャー（SPA）コース竣工、SPAプログラムスタート。	7.9文部科学省「平成26年度大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業プログラム委員会（第１回）開催」
開館50周年		
2015 （平成27）	10.26講堂の防音工事が完了・留学生相談ホットライン開設。10.25～11.12長期館Ｂ女性専用風呂の改修、パウダールーム設置。12.16教員免許状更新講習ｅラーニング実施。	10.7馳浩文部科学大臣（第３次安倍内閣）に就任。10.8大学、大学院、短期大学及び高等専門学校の設置等に係る認可の基準の一部を改正する告示の施行について（通知）
2016 （平成28）	3.25ダイニングホールやまゆり新築工事祈願祭開催。4.1大学セミナーハウスイメージキャラクター「ななは丸」デビュー。6.11～12開館50周年記念セミナー「憲法を学問する」開催。11.12食堂棟落成。11.12開館50周年記念会開催。	8.3松野博一文部科学大臣（第３次安倍内閣）に就任。

大学セミナーハウス建築地鎮祭
（1963年11月２日）

留学生会館起工式（2004年６月28日）

宿泊利用者100万人に到達（1988年２月18日）

さくら館地鎮祭時の理事たち（2005年８月23日）

あ と が き

大学セミナーハウス開館50周年記念事業の一つとして「記念誌」の発刊を掲げて以来、多くの方々のご協力を賜りつつ編集活動に取り組んできたが､今ここに50周年記念誌『開かれた大学』を上梓するに至った。

本誌の発刊によって広く皆様方に当法人の歴史に触れていただければと考え企画したが、本誌を通じて、改めて大学セミナーハウスのよって立つべき基盤を再確認し、先人のたゆまぬ営為と努力に思いを致し、伝統を正しく受け継ぐとともに、歴史からの励ましと教訓をえて、次の50年のさらなる飛躍に繋げることこそが重要なのだと考える。

本誌は、当法人が事業報告を目的に発行した『セミナー・ハウス』ニュースと法人に関する新聞報道等を参考に、大学セミナーハウスの50年をマクロ的にとらえ、内容は、前史「大学教育に欠かせない新たな場づくり（1962-1965)」、第1章の開館から10周年まで「注目される時代（1966-1975)」､第2章の開館10周年から30周年まで「大学の中の“大学”と呼ばれた時代（1976-1995)」、第3章の開館30周年から50周年まで「時代の変化に対応して（1996-2015)」のように、時代順で大学セミナーハウス50年の足跡を明らかにしようとしたものである。なお、本誌の文中には法人現在名称の大学セミナーハウスを「大学セミナー・ハウス」と表現するところがあるが、それは50年前開館当時から使われてきた名称であり､法人登記の名称が「財団法人大学セミナーハウス」になっていることを考慮し､2006年から中黒「・」をとった「大学セミナーハウス」と称するようになった。また、施設を社会一般に受け入れやすいよう「八王子セミナーハウス」という施設の名称も2006年以後使っていたことをつけ加えたい。

前史は法人設立の背景、伝説となった一人の大学人の思いから法人の設立を実現する経緯、法人設立の理念と期待される役割を再確認した内容であり、第1章は開館して10周年までの間、設立理念に基づく活動の展開によって大学セミナーハウスが国公私立の大学人に愛され、社会一般の注目も浴びたこと等を述べたものである。第2章は1970年代後半から20年の間、大学セミナーハウスが日本の大学の中にしっかりと根を下ろし､「知への探求を誘う場」として積極的に活用されるようになったことや大学教育改革への実質的な貢献、また､「善の結晶」であるユニークな建築群やキャンパス内の先人達所縁の名所とその由来を紹介した。第3章は法人設立の原点に一度立ち戻り、時代の変化によってもたらされた経営難を新たな事業展開によっていかに乗り越え、成功したのかについて述べたものである。

50年来、大学セミナーハウスは戦後マスプロ教育に疑問を呈し、国公私立大学の壁を超えた学びと交流の場としての役割を果たし、主に一般教養科目を補う学生対象のセミナー、大学教育改革を目指す大学教員対象のセミナーを開催し､「開かれた大学」「大学の中の“大学”」の役割を果たしてきた。「注目される時代（1966-1975)」には学生が在学中に一度は行きたい場、行ったら必ず何かをえることができる場としてまさに注目され、ここに来て「学問することの素晴らしさ、厳しさを感じ、現代社会をより正確に計っていく物差し、自分の人生の羅針盤をえた」という学生が少なくなく、この出会いの丘を「私の共同研究の根拠地」と称する研究者もいた。また時代の変化に対応しての大学教育改革の議論の場であり続け、先駆的な FD 活動が広く大学教員に浸透し、多数の参画をえていた。

『セミナー・ハウス』68・69合併号（昭和55年9月25日発行）に特集、開館15周年を記念して「創始の心、そしてこれから－大学セミナー・ハウスの初心を想う」をテーマにした座談会の内容を記録した一文がある。座談会の出席者は大学セミナー・ハウス飯田宗一郎名誉館長、ハウス建築群設計者の早稲田大学吉阪隆正教授、上智大学永井道雄教授、成蹊大学宇野重昭教授、聖心女子大学岡宏子教授である。この記録からも伺えるように、一大学の枠を超え、リベラルな立場を守り、国公私立すべての大学教員と学生に学問

の場を提供することは大学セミナーハウス設立の目的であり、多数の大学教員と学生がここで寝食を共にし楽しく語り合えるようにしたいというのが法人設立者の初心である。

50年経った今日の大学セミナーハウスは、創始の心を忘れずに日本における唯一の国公私立大学の壁を超えた学びと交流の場を維持しつつ、教育研修宿泊サービスを提供するとともに、教育関係の各種セミナーを主催しているが、注目される前世紀半ばごろに比べ、存在感が薄くなってきた。50年の歳月が経つなか、「ハウス第二世代教師」がすでに70歳を超え、日本の教育環境や社会情況が変化しつつあったこともその背景にある。

40年前、『大学を開く』（大学セミナー・ハウス創立10周年史・開館７年史）を読まれた日本のドイツ文学者手塚富雄先生（1903-1983）や歴史学者の色川大吉先生（1925-）、和歌森太郎先生（1915-1977）がこのような大学セミナーハウス正史とは別に「内面的人間史」、つまり創設者の「根本の動機」、「生きた形」の大学セミナーハウスの精神を語ってほしい、「いつの日かセミナー・ハウスの灯火をふきかえすための一つの目安にもなる」と飯田宗一郎館長に話したことがあると言う。すべての偉業は人間によるものである。今大学セミナーハウスの灯火を吹き返す時がきた。日本教育分野の先人達を想い、彼らの教育への溢れんばかりの愛、執拗な信念、開拓の精神を受け継ぎ、法人設立当時の理念を礎に今後の時代変化に対応できるよう、「学生と教員が寝食を共にして学び合う場」「国公私立の壁を超えたネットワーク構築の場」をいかに充実させ発展させるか、また「大学共同セミナー」のような参加学生を知へと誘い、その学生に人生の羅針盤を与えるような教育プログラムをいかに企画するか等の課題を模索し、解決を図ることが求められている。大学セミナーハウスの来し方50年を振り返った本誌が、やがて来たる50年という未来への展望を描き出す素材となることを願いたい。

公益財団法人 大学セミナーハウス
館長　**鈴木　康司**
2016年11月12日

大学共同セミナー開催一覧（1962～2003）

（講師順不同）

回次	主題・講師	会期・参加状況
第１回	世界の中の日本（開館記念セミナー）	1965年７月５～７日
	貝塚　茂樹（京都大学教授）	103名18校
	東畑　精一（東京大学名誉教授）	
	山内　恭彦（東京大学名誉教授）	
第２回	現代思潮と日本（落成記念セミナー）	1965年11月２～４日
	大塚　久雄（東京大学教授）	80名14校
	高島　善哉（一橋大学教授）	
	安藤　英治（成蹊大学教授）	
	内田　芳明（神奈川大学教授）	
	住谷　一彦（立教大学教授）	
	鈴木　秀勇（一橋大学教授）	
	富沢　賢治（一橋大学博士課程）	
	星野　彰男（一橋大学博士課程）	
第３回	科学と宗教	1966年１月14～16日
	山内　恭彦（東京大学名誉教授）	90名21校
	中村　元（東京大学教授）	
	柳瀬　睦男（上智大学副学長）	
	鈴木　皇（上智大学教授）	
	山本　大二郎（明治大学教授）	
	勝見　允行（国際基督教大学助教授）	
	三枝　充悳（国学院大学助教授）	
	市倉　宏祐（専修大学教授）	
	今井　淳（日本大学助教授）	
第４回	「新日本のビジョン」とその批判	1966年３月26～27日
	蝋山　政道（国際基督教大学客員教授）	62名18校
	武藤　光朗（中央大学教授）	
	原　豊（慶応義塾大学講師）	
	富永　健一（東京大学講師）	
	原　敬吾（学習院女子短期大学教授）	
第５回	英国のキリスト教文学	1966年５月20～22日
	斎藤　勇（東京大学名誉教授）	48名14校
	小泉　一郎（学習院大学教授）	
	斎藤　和明（国際基督教大学講師）	
	児玉　久雄（共立女子短期大学助教授）	
	川西　進（東京大学助教授）	
	土居　光知（日本学士院会員）	
第６回	大学の理念と現実 （開館１周年記念セミナー）	1966年７月３～５日 95名22校
	永井　道雄（東京工業大学教授）	
	前田　陽一（東京大学教授）	
	西村　秀夫（東京大学助教授）	
	都留　春夫（国際基督教大学教授）	
	小林　哲也（国際基督教大学教授）	
	鈴木　皇（上智大学教授）	
	玉虫　文一（東京女子大学教授）	
	斎藤　幸一郎（慶應義塾大学教授）	
	小林　文男（アジア経済研究所員）	
	馬場　四郎（東京教育大学教授）	
第７回	実存思想と現代（１） ―現代に生きるために―	1967年１月13～15日 132名33校
	原　佑（東京大学教授）	
	樫山　欽四郎（早稲田大学教授）	
	松浪　信三郎（早稲田大学教授）	
	佐古　純一郎（作家）	
	川原　栄峰（早稲田大学教授）	
	小川　圭治（東京女子大学助教授）	
	吉村　善夫（信州大学教授）	
	信太　正三（神奈川大学教授）	
	三雲　夏生（慶應義塾大学教授）	
	市倉　宏祐（専修大学教授）	
	飯島　宗享（東洋大学教授）	
第８回	実存思想と現代（２） ―現代に生きるために―	1967年３月26～28日 127名29校
	樫山　欽四郎（早稲田大学教授）	
	藤田　健治（お茶の水女子大学学長）	
	椎名　麟三（作家）	
	川原　栄峰（早稲田大学教授）	
	上妻　精（成蹊大学助教授）	
	小川　圭治（東京女子大学助教授）	
	岩永　達郎（明治大学講師）	
	佐古　純一郎（二松学舎大学教授）	
	信太　正三（神奈川大学教授）	
	市倉　宏祐（専修大学教授）	
第９回	大学と人間（新入生歓迎セミナー）	1967年５月３～５日
	堀米　庸三（東京大学教授）	51名16校
	江上　二夫（東京大学教授）	
	増田　四郎（一橋大学学長）	
	高村　象平（慶應義塾大学教授）	
	折原　浩（東京大学助教授）	
	鈴木　皇（上智大学教授）	
	西村　秀夫（東京大学助教授）	
	小塩　節（国際基督教大学助教授）	
	一番ヶ瀬　康子（日本女子大学助教授）	
	広野　良吉（成蹊大学助教授）	
	岩崎　力（東京外国語大学助教授）	
	藤永　保（東京女子大学助教授）	
第10回	世界史的にみたヨーロッパと日本 （開館２周年、講堂、図書館落成記念セミナー）	1967年７月７～９日 103名27校
	増田　四郎（一橋大学学長）	
	会田　雄次（京都大学教授）	
	中村　賢二郎 （京都大学人文科学研究所助教授）	
	望田　幸男（同志社大学助教授）	
	野田　宣雄（京都大学助教授）	
	渡辺　金一（一橋大学教授）	
	栗原　福也（東京女子大学教授）	
	山田　欣吾（一橋大学助教授）	
第11回	日本の思想 ―「日本の思想」をテキストとして―	1967年９月８～10日 59名16校
	丸山　真男（東京大学教授）	
	R・P・ドーア（ロンドン大学教授）	
	岡　利郎（東京大学大学院学生）	
第12回	文学を考える	1967年11月23～25日
	手塚　富雄（立教大学教授）	65名21校
	神品　芳夫（東京大学助教授）	
	石井　不二雄（早稲田大学講師）	
第13回	現代人とキリスト教思想 ―出会いと決断―（１）	1967年12月18～20日 108名29校
	佐藤　敏夫（東京神学大学助教授）	
	宮田　光雄（東北大学教授）	
	南原　繁（東京大学名誉教授）	
	長　清子（国際基督教大学教授）	
	北森　嘉蔵（東京神学大学教授）	
	荒井　献（青山学院大学助教授）	
	小川　圭治（東京女子大学助教授）	
	能沢　義宣（東京神学大学助教授）	
	茂泉　昭男（東北学院大学助教授）	
	中沢　洽樹（立教大学教授）	
第14回	現代とキリスト教思想 ―出会いと決断―（２）	1968年３月７～９日 54名21校
	佐藤　敏夫（東京神学大学助教授）	
	有賀　弘（東京大学社研講師）	
	北森　嘉蔵（東京神学大学教授）	
	小川　圭治（東京女子大学助教授）	
	能沢　義宣（東京神学大学助教授）	
第15回	大学と社会を結ぶ最初の試み ―講演に視野を開く― （卒業記念セミナー）	1968年３月14～15日 84名25校
	岩佐　凱実（富士銀行頭取）	
	隅谷　三喜男（東京大学教授）	
	ゴルドン・ボールス博士夫妻 （日米交換教授（人類学））	
第16回	音楽と社会 ―M・ウエーバー『音楽社会学』をテキストとして―（長期連続セミナー）	＜第１部＞1968年 ６月７日、14日 ＜第２部＞1968年 ６月28日、７月５日 ＜第３部＞1968年 12月16～17日 99名21校

回次	主題・講師	会期・参加状況
	安藤　英治（成蹊大学教授）	
	池宮　英才（東京女子大学教授）	
	角倉　一朗（桐朋大学助教授）	
	小泉　文夫（東京芸術大学助教授）	
	服部　幸三（東京芸術大学助教授）	
第17回	学問と人生―大学と現代人の課題にふれて―（新入生歓迎セミナー）	1968年６月28～30日 66名25校
	坪井　忠二（東京大学名誉教授）	
	板垣　與一（一橋大学教授）	
	坂西　志保（評論家）	
	川原　栄峰（早稲田大学教授）	
	鈴木　皇（上智大学教授）	
	芳賀　徹（東京大学助教授）	
	久保田　きぬ子（立教大学教授）	
	小堀　巖（東京大学助教授）	
	深沢　宏（一橋大学助教授）	
	児玉　久雄（学習院大学教授）	
第18回	平和と人権（開館３周年記念セミナー）	1968年７月26～27日 79名24校
	坂本　義和（東京大学教授）	
	久保田　きぬ子（立教大学教授）	
	川田　侃（東京大学教授）	
	宮崎　繁樹（明治大学教授）	
	石田　雄（東京大学教授）	
第19回	ヨーロッパとは何か（１）	1968年10月19～20日 90名24校
	堀米　庸三（東京大学教授）	
	渡辺　金一（一橋大学教授）	
	山田　欣吾（一橋大学助教授）	
	成瀬　治（東京大学助教授）	
	木村　尚三郎（東京大学助教授）	
第20回	コンピューター時代の人間 ―職業の変化と人間観の変化―	1968年12月６～８日 128名27校
	山内　恭彦（東京大学名誉教授）	
	高橋　秀俊（東京大学教授）	
	林　雄二郎（東京工業大学教授）	
	吉田　夏彦（東京工業大学助教授）	
	木村　尚三郎（東京大学助教授）	
	宮川　公男（一橋大学助教授）	
	山田　圭一（東京工業大学助教授）	
	原　芳男（東京工業大学助教授）	
	渡辺　茂（東京大学教授）	
	南雲　仁一（東京大学教授）	
	デイタース（上智大学教授）	
	後藤　英一（東京大学助教授）	
	印東　　太郎（慶應義塾大学教授）	
	山本　信（東京大学助教授）	
	坂本　百大（駒沢大学講師）	
	吉田　夏彦（東京工業大学助教授）	
	穐山　貞登（東京工業大学助教授）	
	高木　純一（早稲田大学教授）	
第21回	大学と社会―現代を考える―（１） （卒業セミナーを兼ねて）	1969年２月22～23日 129名30校
	樫山　欽四郎（早稲田大学教授）	
	武藤　光朗（中央大学教授）	
第22回	大学と社会―現代を考える―（２） （学生問題懇談会を加えて）	1969年４月19～21日 126名34校
	川原　栄峰（早稲田大学教授）	
	小川　圭治（東京女子大学教授）	
	小塩　節（国際基督教大学教授）	
	三枝　充悳（国学院大学教授）	
	深沢　宏（一橋大学助教授）	
	鈴木　皇（上智大学教授）	
	河合　秀和（学習院大学助教授）	
	森　恭三（朝日新聞論説顧問）	
第23回	ヨーロッパとは何か（２）	1969年５月12～13日 28名15校
	堀米　庸三（東京大学教授）	
	清水　広一郎（東京教育大学助教授）	
	成瀬　治（東京大学助教授）	
	遅塚　忠躬（東京都立大学助教授）	
第24回	大学と人間―現代を考える― （新入生歓迎セミナー）	1969年６月27～29日 66名25校
	前田　護郎（東京大学教授）	
	田代　茂樹（東洋レーヨン会長）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	松田　智雄（東京大学教授）	
	芳賀　徹（東京大学助教授）	
	古銭　良一郎（青山学院大学助教授）	
	清水　誠（東京都立大学教授）	
	都留　春夫（国際基督教大学教授）	
	早川　豊彦（東京工業大学助教授）	
	佐藤　誠三郎（東京大学助教授）	
第25回	日本人とは何か（１） （開館４周年記念セミナー）	1969年11月１～３日 164名53校
	中村　元（東京大学教授）	
	宮城　音弥（東京工業大学名誉教授）	
	清水　多嘉示 （彫刻家・日本芸術院会員）	
	今井　淳（専修大学教授）	
	三枝　充悳（国学院大学教授）	
	相良　亨（東京大学助教授）	
	祖父江　孝男（明治大学教授）	
	戸川　芳郎（お茶の水女子大学助教授）	
	芳賀　徹（東京大学教授）	
	源　了圓（日本女子大学教授）	
第26回	日本人とは何か（２）	1969年12月12～14日 123名30校
	谷川　徹三（元法政大学総長）	
	中村　元（東京大学教授）	
	後藤　基夫（朝日新聞論説副主幹）	
	今井　淳（専修大学教授）	
	三枝　充悳（国学院大学教授）	
	佐藤　正英（東京大学助手）	
	祖父江　孝男（明治大学教授）	
	戸川　芳郎（お茶の水女子大学助教授）	
	芳賀　徹（東京大学教授）	
	原　敬吾（学習院女子短期大学教授）	
第27回	1970年代の都市問題 ―ニュータウン再開発の検討―	1970年２月24～26日 75名29校
	磯村　英一（東洋大学学長）	
	岡野　行秀（東京大学助教授）	
	藤竹　暁（NHK 総合放送文化研究所員）	
	鈴木　武夫（国立公衆衛生院部長）	
	赤木　須留喜（東京都立大学教授）	
第28回	現代文明の諸問題 ―新しい世界観の視座を求めて― （長期研修セミナー館落成記念セミナー）	1970年５月９～10日 86名32校
	山内　恭彦（東京大学名誉教授）	
	川原　栄峰（早稲田大学教授）	
	三枝　充悳（国学院大学教授）	
	鈴木　皇（上智大学教授）	
	芳賀　徹（東京大学助教授）	
	富永　健一（東京大学助教授）	
	金森　博雄 （東京大学地震研究所助教授）	
第29回	大学と人間―未来にかける「わたし」の発見―（新入生歓迎セミナー）	1970年６月27～29日 64名32校
	福田　歓一（東京大学教授）	
	渡辺　格（慶應義塾大学教授）	
	安藤　英治（成蹊大学教授）	
	村田　喜代治（中央大学教授）	
	木原　弘二（慶應義塾大学助教授）	
	平川　祐弘（東京大学助教授）	
	星野　命（国際基督教大学助教授）	
	福井　文雅（早稲田大学助教授）	
第30回	再検討・近代の日本文学 （夏季長期セミナー）	1970年７月30 ～８月３日 115名52校
	島田　謹二（東洋大学教授）	
	ドナルド・キーン （コロンビア大学教授）	
	大岡　信（詩人・明治大学助教授）	
	前田　愛（成蹊大学助教授）	
	桶谷　秀昭（東洋大学助教授）	
	小堀　桂一郎（東京大学助教授）	
	芳賀　徹（東京大学助教授）	
	太田　雄三（国学院大学講師）	
	子安　美知子（早稲田大学助教授）	
	井村　君江（鶴見女子大学助教授）	
	藤富　保男（詩人）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	鍵谷　幸信（慶應義塾大学助教授）	
第31回	学問における創造とは何か （開館５周年記念セミナー）	1970年10月22～25日 158名48校
	大塚　久雄（東京大学名誉教授）	
	正田　建次郎（武蔵大学学長）	
	内田　義彦（専修大学教授）	
	内田　芳明（神奈川大学教授）	
	土居　健郎（聖路加国際病院医長）	
	桜井　徳太郎（東京教育大学助教授）	
	子安　宣邦（横浜国立大学助教授）	
	村田　全（立教大学助教授）	
	広重　徹（日本大学助教授）	
	筑波　常三治（科学史家）	
第32回	社会と交通	1970年12月４～６日
	今野　源八郎（東京大学名誉教授）	75名31校
	八十島　義之助（東京大学教授）	
	岡田　清（成城大学教授）	
	藤井　弥太郎（慶應義塾大学教授）	
	井上　孝（東京大学教授）	
	中口　博（東京大学教授）	
	乾　崇夫（東京大学教授）	
	新谷　洋二（東京大学助教授）	
	岡野　行秀（東京大学助教授）	
	津崎　武司（日本航空調査開発室次長）	
第33回	思想の主体性 ―キルケゴール『哲学的断片への非学問的あとがき』を中心に―	1970年12月22～23日 92名33校
	松浪　信三郎（早稲田大学教授）	
	杉山　好（東京大学助教授）	
	柏原　啓一（お茶の水女子大学助教授）	
	熊沢　義宣（東京神学大学教授）	
	小川　圭治（東京女子大学教授）	
第34回	進化と適応	1971年１月14～17日
	今西　錦司（岐阜大学長）	127名49校
	八杉　竜一（東京工業大学教授）	
	木原　弘二（慶應義塾大学助教授）	
	日高　敏隆（東京農工大学教授）	
	香原　志勢（立教大学助教授）	
	藤岡　喜愛 （京都大学人文科学研究所員）	
	中村　禎里（立正大学教授）	
	吉田　夏彦（東京工業大学教授）	
	内藤　正（東京工業大学教授）	
第35回	社会化としての発達 （白井常先生還暦セミナー）	1971年１月30～31日 76名26校
	岡　宏子（聖心女子大学教授）	
	柏木　恵子（東京女子大学助教授）	
	新田　倫義（東京女子大学教授）	
	島田　一男（聖心女子大学教授）	
	高田　洋一郎（東京女子大学教授）	
	白井　常（東京女子大学教授）	
第36回	専門職と国民の生活	1971年３月５～７日
	隅谷　三喜男（東京大学教授）	59名28校
	橋本　邦雄（建築設計研究所所長）	
	川喜田　愛郎（元千葉大学学長）	
	野村　実（医師）	
	森　恭三（朝日新聞社論説顧問）	
	森田　宗一（東京家裁判事）	
	柿内　賢信（東京大学教授）	
	野村　純三（成蹊小学校校長）	
第37回	学問と人生―大学における出会いの意味―（新入生歓迎セミナー）	1971年５月22～23日 52名26校
	山下　肇（東京大学教養学部長）	
	藤田　信勝（毎日新聞論説室顧問）	
	原　一雄（国際基督教大学助教授）	
	宇野　重昭（成蹊大学教授）	
	道家　達将（東京工業大学助教授）	
第38回	自己とは何か ―セーレン・キルケゴールの思想を手がかりとして―	1971年５月29～31日 134名43校
	西谷　啓治（大谷大学教授）	
	桝田　啓三郎（東洋大学教授）	
	福島　保夫（埼玉大学）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	柏原　啓一（お茶の水女子大学）	
	三浦　永光（高崎経済大学）	
	熊沢　義宣（東京神学大学）	
	大谷　愛人（慶應義塾大学）	
	小川　圭治（東京女子大学）	
	杉山　好（東京大学）	
	吉本　隆明（評論家）	
第39回	人間と環境―公害の現状と展望―	1971年６月25～27日
	和達　清夫（埼玉大学学長）	46名26校
	村田　喜代治（中央大学教授）	
	野村　好弘（東京都立大学助教授	
	木村　実（拓殖大学講師）	
	道家　達将（東京工業大学助教授）	
	木原　弘二（慶應義塾大学）	
第40回	地域調査（夏季長期セミナー）	1971年７月22～26日
	石田　竜次郎（一橋大学名誉教授）	81名37校
	木村　礎（明治大学教授）	
	小堀　巖（東京大学助教授）	
	竹内　啓一（一橋大学助教授）	
	渡辺　忠胤（多摩史研究会会員）	
	椚　国男	
	渡辺　奨（多摩史研究会会員）	
	沼　謙吉	
	新井　勝紘	
	早川　和男（建設省建築経済研究室長）	
	益田　勝実（法政大学教授）	
	石井　素介（明治大学教授）	
	竹内　啓一（一橋大学助教授）	
	青柳　清孝（国際基督教大学助教授）	
	安原　茂（成蹊大学教授）	
第41回	日本と中国	1971年10月23～24日
	白石　凡（朝日新聞論説顧問）	66名33校
	戴　国煇 （アジア経済研究所主任調査研究員）	
	小島　麗逸（アジア経済研究所研究員）	
	藤村　俊郎（福島大学経済学部助教授）	
第42回	文化交流の役割―比較文化と関連して―	1971年11月５～７日
	三上　次男（青山学院大学教授）	72名35校
	護　雅夫（東京大学教授）	
	芳賀　徹（東京大学助教授）	
	木村　尚三郎（東京大学助教授）	
	高階　秀爾（東京大学助教授）	
第43回	人間解散 ―サイコパソロジカルアプローチ―	1971年12月18～19日 113名41校
	加藤　正明（国立精神衛生研究所）	
	河合　隼雄（天理大学教授）	
	近藤　章久（近藤クリニック院長）	
	安田　一郎 （横浜市交通局友愛病院神経科医師）	
	小見山　実（電気通信大学助教授）	
	小田　晋（東京医科歯科大学助教授 （犯罪心理研究室））	
第44回	現代社会と法	1972年１月14～16日
	川島　武宜（東京大学名誉教授）	23名10校
	石川　稔（成蹊大学助教授）	
	谷川　久（成蹊大学教授）	
	山本　草二（成蹊大学教授）	
	筒井　若水（東京大学助教授）	
	鵜飼　信成（元国際基督教大学長）	
第45回	家を考える	1972年２月12～13日
	吉武　泰水（東京大学教授）	68名25校
	吉阪　隆正（早稲田大学教授）	
	石毛　直道（甲南大学講師）	
	広田　寿子（日本女子大学助教授）	
	村武　精一（東京都立大学助教授）	
	荻原　正三（工学院大学助教授）	
第46回	自然界における対称性 ―自然探求へのアプローチ―	1972年３月10～12日 40名16校
	宮島　龍興（東京教育大学学長）	
	亀淵　迪（東京教育大学教授）	
	松浦　悦之（東京教育大学助教授）	
	江沢　洋（学習院大学教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	菅野　暁（東京大学物性研究所助教授）	
	高橋　博彰（早稲田大学助教授）	
第47回	科学文明はどこへ行く	1972年５月27～28日
	川喜田　愛郎（元千葉大学）	51名25校
	時実　利彦（京都大学教授）	
	合田　周平（電気通信大学助教授）	
	木原　弘二（慶應義塾大学助教授）	
	木村　繁（朝日新聞科学部次長）	
	筑波　常治（科学評論家）	
第48回	日本人の再発見	1972年６月23～25日
	和歌森　太郎（東京教育大学教授）	120名38校
	オーテス・ケーリ（同志社大学教授）	
	神島　二郎（立教大学教授）	
	松原　治郎（東京教育大学助教授）	
	土居　健郎（東京大学教授）	
	小堀　桂一郎（東京大学助教授）	
	金山　宣夫（日本総合研究所国際部長）	
	野口　武徳（成城大学助教授）	
第49回	偶然を考える	1972年７月21～23日
	増山　元三郎（東京理科大学教授）	52名24校
	下村　寅太郎（学習院大学教授）	
	小野山　卓爾（津田塾大学教授）	
	戸田　盛和（東京教育大学教授）	
	高橋　晄正（東京大学講師）	
	竹内　啓（東京大学助教授）	
	神山　四郎（慶應義塾大学教授）	
第50回	日本文学の新しい研究方法 ―平家物語を中心として―	1972年10月13～15日 34名19校
	小西　甚一（東京教育大学教授）	
	外山　滋比古（お茶の水女子大学教授）	
	出淵　博（東京工業大学助教授）	
	山下　宏明（名古屋大学助教授）	
	麻原　美子（日本女子大学助教授）	
	信太　周（大妻女子大学助教授）	
	犬井　善寿（東京教育大学博士課程）	
第51回	アジア社会の比較研究 ―アジアの国々との協調のあり方を求めて―（開館７周年記念セミナー）	1972年11月17～19日 119名31校
	川田　侃（上智大学教授）	
	高橋　彰（東京大学助教授）	
	深沢　宏（一橋大学助教授）	
	宇野　重昭（成蹊大学教授）	
	藤井　昇三（電気通信大学助教授）	
	三輪　公忠（上智大学教授）	
	林　武（アジア経済研究所主任研究員）	
	大河内　一男（東京大学名誉教授）	
	三笠宮　崇仁 （日本オリエント学会会長）	
第52回	中国思想と日本	1972年12月１～３日
	村松　暎（慶應義塾大学教授）	51名26校
	吉川　幸次郎（京都大学名誉教授）	
	安斎　和雄（早稲田大学教授）	
	池田　温（東京大学助教授）	
	高田　淳（東京大学教授）	
	戸川　芳郎（東京大学助教授）	
	福井　文雅（早稲田大学助教授）	
	藤家　礼之助（東海大学助教授）	
第53回	夏目漱石と森鷗外	1973年１月19～21日
	小島　信夫（明治大学教授）	108名37校
	越智　治雄（東京大学助教授）	
	江藤　淳（東京工業大学助教授）	
	竹盛　天雄（早稲田大学助教授）	
	平川　祐弘（東京大学助教授）	
	小堀　桂一郎（東京大学助教授）	
第54回	水と文明	1973年２月23～25日
	高橋　裕（東京大学教授）	51名21校
	小堀　巖（東京大学助教授）	
	安藝　皎一（拓殖大学教授）	
	中沢　弘仁 （経済企画庁総合開発局水資源課長）	
	佐藤　俊朗（東京農業大学助教授）	
	玉井　賢二（NHK 報道局社会部記者）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
第55回	平和研究の新展開：討論とシミュレーション―アジアにおける平和研究の課題と方法―	1973年３月９～11日 74名23校
	武者小路　公秀（上智大学教授）	
	細谷　千博（一橋大学教授）	
	白鳥　令（独協大学助教授）	
	臼井　久和（独協大学講師）	
	平野　健一郎（東京大学助教授）	
	浮田　久子（日本平和研究懇談会）	
第56回	1930年代を土俵として日本お外交を考える（７大学合同セミナー）	1973年４月22～24日 60名７校
	緒方　貞子 （国際基督教大学・聖心女子大学講師）	
	三輪　公忠（上智大学教授）	
	藤井　昇三（電気通信大学助教授）	
	細谷　千博（一橋大学教授）	
	馬場　伸也（津田塾大学助教授）	
	池井　優（慶應義塾大学教授）	
第57回	大学・共同体・個人 ―個人に社会を管理する力はあるのか―（新入生歓迎セミナー）	1973年５月25～27日 67名23校
	飯島　宗享（東洋大学教授）	
	半谷　高久（東京都立大学教授）	
	安齋　伸（上智大学教授）	
	井門　富二夫（津田塾大学教授）	
	大川　信明（東洋大学教授）	
	早川　和男 （建設省建築研究所建設経済研究室長）	
	飯島　宗享（東洋大学教授）	
	本谷　勲（東京農工大学助教授）	
	半谷　高久（東京都立大学教授）	
第58回	現代世界とナショナリズム―新しい国際関係秩序を求めて―	1973年６月22～24日 75名25校
	板垣　與一（一橋大学名誉教授）	
	高島　善哉（一橋大学名誉教授）	
	林　武（アジア経済研究所主任研究員）	
	宮崎　義一（横浜国立大学教授）	
	荒木　信義（武蔵大学講師）	
	富永　健一（東京大学助教授）	
	茅　陽一（東京大学助教授）	
第59回	心のなかの現代―社会心理学の話題をめぐって―	1973年７月６～８日 89名35校
	世良　正利（中央大学教授）	
	竹内　太郎（朝日新聞社出版企画室）	
	星野　命（国際基督教大学教授）	
	岩男　寿美子（慶應義塾大学助教授）	
	佐藤　毅（法政大学教授）	
	西山　啓（広島大学助教授）	
	竹村　研一（聖心女子大学助教授）	
	穐山　貞登（東京工業大学助教授）	
	大沢　博（岩手大学助教授）	
第60回	人間・都市・土地 ―人間にとって都市とは何か―	1973年８月９～12日 61名26校
	磯村　英一（東洋大学前学長）	
	本吉　庸浩（読売新聞解説部）	
	熊田　禎宣（東京工業大学助教授）	
	倉沢　進（東京都立大学助教授）	
	高橋　勇悦（東京学芸大学助教授）	
	藤木　三千人（東洋大学教授）	
	伊藤　滋（東京大学助教授）	
	戸沼　幸市（早稲田大学助教授）	
	早川　和男 （建設省建築研究所建設経済研究室長）	
第61回	物理教育はいかにあるべきか	1973年９月21～23日
	石黒　浩三（東京大学教授）	31名６校
	犬丸　章門（赤城台高等学校教諭）	
	渡辺　寧（慶應義塾高等学校教諭）	
	岡崎　正（白鷗高校教諭）	
	山内　恭彦（東京大学名誉教授）	
	鈴木　皇（上智大学教授）	
	近藤　正夫（学習院大学教授）	
	戸川　孝夫（東京理科大学教授）	
	村上　陽一郎（東京大学助教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	藤井　清（和光大学助教授）	
	渡辺　彰（慶應義塾大学専任講師）	
	笠　耐（上智大学専任講師）	
	小田切　理文（戸山高等学校教諭）	
第62回	現代資本主義の諸問題	1973年11月30～12月２日
	川口　弘（中央大学教授）	
	宮崎　犀一（中央大学教授）	42名15校
	石崎　昭彦（神奈川大学教授）	
	磯村　隆文（大阪市立大学助教授）	
	一番ヶ瀬　康子（日本女子大学教授）	
	今宮　謙二（中央大学助教授）	
	岡山　隆（早稲田大学教授）	
第63回	日本文学の新しい研究法 ―比較文学の視点から―	1973年12月14～16日 47名15校
	島田　謹二（東洋大学教授）	
	川本　皓嗣（東京大学講師）	
	芳賀　徹（東京大学助教授）	
	前田　愛（立教大学助教授）	
	亀井　俊介（東京大学助教授）	
	小堀　桂一郎（東京大学助教授）	
第64回	新時代を迎える国連	1974年１月11～13日
	高野　雄一（東京大学教授）	62名20校
	杉山　茂雄（法政大学教授）	
	小和田　恒（外務省国連局政治課長）	
	斎藤　恵彦（東京外国語大学助教授）	
	宮崎　繁樹（明治大学教授）	
	横田　洋三（国際基督教大学助教授）	
第65回	人間と言語（１）	1974年２月15～17日
	沢田　允茂（慶應義塾大学教授）	102名30校
	池田　彌三郎（慶應義塾大学教授）	
	野元　菊雄 （国立国語研究所第一研究部長）	
	由良　君美（東京大学助教授）	
	小笠原　林樹（早稲田大学講師）	
	鈴木　孝夫（慶應義塾大学教授）	
第66回	現代を考える	1974年３月11～13日
	板垣　與一（一橋大学名誉教授）	56名27校
	星野　命（国際基督教大学教授）	
	阿久津　喜弘（国際基督教大学助教授）	
	戸沼　幸市（早稲田大学助教授）	
	寺門　征男（早稲田大学講師）	
	西村　閑也（法政大学教授）	
	高野　雄一（東京大学教授）	
	斎藤　恵彦（東京外国語大学助教授）	
第67回	現代の日本と憲法 ―憲法記念日に因んで―	1974年５月２～３日 38名21校
	伊藤　正己（東京大学教授）	
	田島　裕（大阪市立大学助教授）	
第68回	戦後日本の外交 （８大学合同セミナー）	1974年５月31 ～６月２日
	細谷　千博（一橋大学教授）	69名８校
	三輪　公忠（上智大学教授）	
	宇野　重昭（成蹊大学教授）	
	南　義清（国際基督教大学博士課程）	
	百瀬　宏（津田塾大学教授）	
	野林　健（一橋大学助手）	
	渡辺　昭夫（明治大学教授）	
	緒方　貞子（国際基督教大学教授）	
	松井　靖夫（外務省事務官）	
	森山　昭郎 （国際基督教大学社会科学研究所助手）	
	五味　俊樹（上智大学博士課程）	
	黒川　修司（一橋大学博士課程）	
第69回	トインビーと現代（新入生歓迎セミナー）	1974年６月21～23日
	鈴木　成高（早稲田大学教授）	83名29校
	木村　尚三郎（東京大学助教授）	
	山本　新（神奈川大学教授）	
	木村　隆一（評論家）	
	堤　彪（共立薬科大学教授）	
	吉沢　五郎（聖心女子大学キリスト教文化研究所講師）	
	秀村　欣二（青山学院大学教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
第70回	藝術のたのしみ―演劇・美術・音楽における伝統と現代―	1974年７月18～21日 98名36校
	河竹　登志夫（早稲田大学教授）	
	小山　弘志（東京大学教授）	
	細井　雄介（聖心女子大学助教授）	
	宮下　啓三（慶應義塾大学助教授）	
	丹羽　文夫（劇団民芸演出家）	
	西村　博子（早稲田大学講師）	
	佐々木　英也 （国立西洋美術館主任研究官）	
	高辻　知義（東京大学助教授）	
第71回	人類の未来と国連	1974年９月27～29日
	坂本　義和（東京大学教授）	87名24校
	小田　滋（東北大学教授）	
	高野　雄一（東京大学教授）	
	宮崎　繁樹（明治大学教授）	
	小寺　初世子（広島女子大学教授）	
	黒田　俊夫（厚生省人口問題研究所長）	
	岡崎　陽一 （厚生省人口問題研究所人口移動科長）	
	西川　潤（早稲田大学助教授）	
	山岡　喜久男（早稲田大学教授）	
	東　寿太郎（津田塾大学教授）	
第72回	人間と言語（２）	1974年10月11～13日
	柴田　武（東京大学教授）	84名25校
	野元　菊雄 （国立国語研究所言語行動研究部長）	
	小笠原　林樹（早稲田大学講師）	
	光延　明洋（東京都立大学助教授）	
	鈴木　孝夫（慶応義塾大学教授）	
	西山　祐司 （慶應義塾大学言語文化研究所助手）	
第73回	東洋と日本（開館９周年記念セミナー）	1974年11月８～10日
	山井　湧（東京大学教授）	77名28校
	三枝　充悳（国学院大学教授）	
	湯浅　泰雄（大阪大学教授）	
	山本　達郎（国際基督教大学教授）	
	青木　和夫（お茶の水女子大学教授）	
	小倉　芳彦（学習院大学教授）	
	子安　宣邦（横浜国立大学助教授）	
	野崎　守英（東京理科大学助教授）	
	横山　紘一（東京大学助手）	
第74回	日本の近代と文学（４大学合同セミナー）	1975年１月10～12日
	三好　行雄（東京大学教授）	77名４校
	前田　愛（立教大学教授）	
	佐藤　勝（東京女子大学教授）	
	吉田　_生（東京女子大学教授）	
	神谷　忠孝（中央大学助教授）	
	鳥居　邦朗（武蔵大学教授）	
	宮川　透（東京外国語大学教授）	
	今井　淳（武蔵大学教授）	
第75回	生命について	1975年２月13～15日
	竹下　敬次（東京医科歯科大学教授）	45名25校
	川喜田　愛郎（千葉大学名誉教授）	
	大倉　興司（東京医科歯科大学助教授）	
	木原　弘二（慶應義塾大学教授）	
	香原　志勢（立教大学教授）	
	坂岸　良克（埼玉医科大学教授）	
	鈴木　宗治（東京医科歯科大学教授）	
	道家　達将（東京工業大学教授）	
	吉田　夏彦（東京工業大学教授）	
第76回	実存思想とは何か ―生きることを求めて―	1975年５月24～26日 136名43校
	藤田　健治（お茶の水女子大学名誉教授）	
	吉沢　伝三郎（東京都立大学教授）	
	泉　治典（東洋大学教授）	
	平木　幸二郎（東京大学助手）	
	林田　新二（電気通信大学教授）	
	上妻　精（成蹊大学教授）	
	池上　明哉（慶應義塾大学助教授）	
	片山　洋之介（茨城大学助教授）	
	久野　昭（東洋大学教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	竹下　敬次（東京医科歯科大学教授）	
第77回	1930年代をめぐる国際環境 （８大学合同セミナー）	1975年６月20～22日 97名８校
	馬場　伸也（津田塾大学教授）	
	池井　優（慶應義塾大学教授）	
	野林　健 （同志社大学アメリカ研究所研究員）	
	宇野　重昭（成蹊大学教授）	
	三輪　公忠（上智大学教授）	
	村瀬　興雄（成蹊大学教授）	
	細谷　千博（一橋大学教授）	
	（特定のセクションに所属しないで指導）	
	緒方　貞子（一橋大学博士課程）	
	増田　弘（慶應義塾大学博士課程）	
	滝口　太郎（成蹊大学修士課程）	
	植田　隆子（津田塾大学修士課程）	
	細谷　正宏（上智大学修士課程）	
	井上　勇一（慶應義塾大学修士課程）	
第78回	藝術のたのしみ（第２回） ―音楽・歌劇・演劇、その歴史・観賞・実際―	1975年７月11～13日 119名36校
	本宮　昭五郎 （舞台美術家・多摩芸術学園講師）	
	西村　博子（早稲田大学講師）	
	宮下　啓三（慶應義塾大学助教授）	
	丹羽　文夫（劇団民芸演出家）	
	荒川　哲生（演出家（現代演劇協会）・早稲田大学講師）	
	演出家（現代演劇協会）　宮田　勝房	
	荒井　秀直（慶應義塾大学助教授）	
	徳丸　吉彦（お茶の水女子大学助教授）	
	角谷　栄次（劇団民芸団員）	
	長　慶子（劇団民芸団員）	
第79回	生活と環境―日常生活の中の科学― （新入生歓迎セミナー）	1975年９月12～14日 51名25校
	鈴木　成文（東京大学教授）	
	田村　明（横浜市技監・企画調査局長）	
	持田　照夫 （前橋市立工業短期大学教授）	
	長倉　康彦（東京都立大学教授）	
	中村　八朗（成蹊大学教授）	
	尾島　俊雄（早稲田大学教授）	
	小川　信子（日本女子大学助教授）	
第80回	明日の世界を考える （開館10周年記念セミナー）	1975年10月31～11月２日 97名31校
	糸川　英夫（組織工学研究所所長）	
	大塚　久雄（東京大学名誉教授）	
	板垣　與一（一橋大学名誉教授）	
	（司会）小林　昇（立教大学教授）	
	茅　陽一（東京大学助教授）	
	公文　俊平（東京大学助教授）	
	宇野　重昭（成蹊大学教授）	
	吉田　夏彦（東京工業大学教授）	
	木村　尚三郎（東京大学助教授）	
第81回	今日の婦人問題―平等・発展・平和―	1975年11月21～23日 93名33校
	神田　道子（東洋大学助教授）	
	上代　タノ（日本女子大学名誉教授）	
	深尾　凱子（読売新聞社婦人部記者）	
	影山　裕子（評論家）	
	高須　裕三（日本大学教授）	
	祖父江　孝男（国立民族学博物館教授）	
	湯沢　雍彦（お茶の水女子大学教授）	
第82回	革新的伝統の追求	1976年１月16～18日 114名27校
	色川　大吉（東京経済大学教授）	
	山田　慶児（京都大学助教授）	
	鶴見　和子（上智大学教授）	
	櫻井　徳太郎（東京教育大学教授）	
	三輪　公忠（上智大学教授）	
	小島　麗逸 （アジア経済研究所主任調査研究員）	
	宇野　重昭（成蹊大学教授）	
	菊池　昌典（東京大学助教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
第83回	日本土着思想の原点 （新入生歓迎セミナー）	1976年５月28～30日 106名32校
	野口　武徳（成城大学教授）	
	吉田　禎吾（東京大学教授）	
	宮田　登（東京学芸大学助教授）	
	佐々木　宏幹（駒澤大学教授）	
	江守　五夫（明治大学教授）	
	谷川　健一（評論家）	
第84回	神話・文学・聖書 ―西洋古典の人間理解―	1976年６月18～20日 109名28校
	久保　正彰（東京大学教授）	
	川島　重成（国際基督教大学助教授）	
	中山　恒夫（順天堂大学教授）	
	後藤　光一郎（東京大学助教授）	
	荒井　献（東京大学教授）	
	佐竹　明（新約聖書学研究家）	
	（司会）秀村　欣二（青山学院大学教授）	
第85回	「アメリカ」―現代文明の試練 ―独立200年の理想と現実―	1976年10月８～10日 104名27校
	斎藤　眞（東京大学教授）	
	袖井　林二郎（法政大学教授）	
	宇沢　弘文（東京大学教授）	
	阿部　斉（成蹊大学教授）	
	青柳　清孝（国際基督教大学教授）	
	山本　満（法政大学教授）	
第86回	古代東アジア史上の日本 （故大浜信泉先生追悼セミナー）	1976年10月22～24日 58名17校
	栗原　朋信（早稲田大学教授）	
	西嶋　定生（東京大学教授）	
	大谷　光男（二松学舎大学教授）	
	小林　宏（国学院大学教授）	
	塩入　良道（大正大学教授）	
	武田　幸男（東京大学助教授）	
	土居　淑子（成城大学助教授）	
第87回	宇宙―現代宇宙像の諸問題―	1976年11月12～14日 90名34校
	寿岳　潤（東京大学助教授）	
	浜田　哲夫（茨城大学教授）	
	佐藤　文隆（京都大学教授）	
	海部　宣男（東京大学助手）	
	杉本　大一郎（東京大学助教授）	
	小沼　直樹（筑波大学助教授）	
	横尾　広光（杏林大学助手）	
	森本　雅樹（東京大学助教授）	
第88回	西欧精神の源流 （故堀米庸三先生追悼セミナー）	1976年12月３～５日 107名32校
	増田　四郎（東京経済大学教授）	
	玉野井　芳郎（東京大学教授）	
	井上　泰男（北海道大学教授）	
	渡邊　昌美（高知大学教授）	
	新倉　俊一（立教大学教授）	
	堀越　孝一（学習院大学教授）	
	木村　尚三郎（東京大学教授）	
第89回	人間はどこまで機械か ―物質・生命・精神―	1977年１月14～16日 106名34校
	大森　荘蔵（科学哲学）（東京大学教授）	
	野田　春彦（生物化学）（東京大学教授）	
	野澤　晨（心理学）（聖心女子大学教授）	
	今村　護郎（心理学）（東京大学助教授）	
	後藤　英一（情報科学）（東京大学教授）	
	山岸　健（芸術社会学） （慶應義塾大学教授）	
	江沢　洋（理論物理学） （学習院大学教授）	
	岡　宏子（心理学）（聖心女子大学教授）	
第90回	日本列島―その自然と人間―	1977年５月13～15日 60名24校
	島津　康男（名古屋大学教授）	
	指導教授全員	
	中村　和郎（東京都立大学助教授）	
	宝月　欣二（東京都立大学教授）	
	黒田　俊夫（日本大学教授）	
	高橋　潤二郎（慶應義塾大学教授）	
	西尾　勝（東京大学教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
第91回	ロビンソン・クルーソーと現代	1977年５月27～29日
	朱牟田　夏雄（東京大学名誉教授）	83名25校
	小池　滋（東京都立大学助教授）	
	竹下　敬次（東京医科歯科大学教授）	
	松浦　保（慶應義塾大学教授）	
	鳥居　鉄也（第８次南極観測隊長・同越冬隊長・千葉工業大学教授）	
	近森　正（慶應義塾大学助教授）	
	1977年９月24～25日	
	大塚　久雄（東京大学名誉教授・国際基督教大学教授）	
	山岸　健（慶應義塾大学教授）	
	岡　宏子（聖心女子大学教授）	
第92回	日本とって国連とは何か（高野雄一先生退官記念セミナー）	1977年６月24～26日 113名27校
	高野　雄一（前東京大学教授・上智大学教授）	
	斎藤　鎮男（前国連大使）	
	内田　久司（東京大学教授）	
	高林　秀雄（龍谷大学教授）	
	大塚　博比古（元国際原子力機関法律部長）	
	斎藤　恵彦（東京外国語大学教授）	
	横田　洋三（国際基督教大学準教授）	
第93回	文学における死―日本人の死生観にふれて―	1977年10月７～９日 100名27校
	村松　剛（筑波大学教授）	
	西郷　信綱（評論家）	
	木村　正中（明治大学教授）	
	麻原　美子（日本女子大学助教授）	
	松田　修（国文学研究資料館教授）	
	青木　生子（日本女子大学教授）	
第94回	自然科学とキリスト教―西欧における二つの普遍と特殊―	1977年11月11～13日 87名30校
	山崎　正一（東京大学名誉教授・法政大学教授）	
	吉利　和（東京大学名誉教授・浜松医科大学学長）	
	国際基督教大学教授　　柿内　賢信	
	八木　誠一（東京工業大学教授）	
	村上　陽一郎（東京大学助教授）	
	荻野　恒一（東京都精神医学総合研究所参事研究員）	
第95回	理性と想像力―現代哲学の基本課題―	1977年12月２～４日
	中村　雄二郎（明治大学教授）	103名36校
	森本　哲郎（評論家）	
	生松　敬三（中央大学教授）	
	坂部　恵（東京大学助教授）	
	新田　義弘（東洋大学教授）	
	足立　和浩（東京都立大学助教授）	
	荒川　幾男（東京経済大学教授）	
第96回	現代の社会主義	1978年１月13～15日
	大内　力（東京大学教授）	94名29校
	佐藤　経明（横浜市立大学教授）	
	矢吹　晋（横浜市立大学助教授）	
	斎藤　稔（法政大学教授）	
	新田　俊三（東洋大学教授）	
	馬場　宏二（東京大学助教授）	
第97回	人間はどこまで機械か（その二）―物質・生命・精神―（故今村護郎先生追悼記念シンポジウム）	1978年１月21～22日 74名21校
	岡　宏子（聖心女子大学教授）	
	後藤　英一（東京大学教授）	
	野田　春彦（東京大学教授）	
	平野　俊二（京都大学助教授）	
第98回	日常生活―そのルーツと展望― 社会・文化・パーソナリティ（交友館落成記念セミナー）	1978年５月26～28日 106名27校
	広中　平祐（京都大学数理解析研究所教授）	
	宮本　常一（日本観光文化研究所所長）	
	芳賀　徹（東京大学教養学部教授）	
	山岸　健（慶應義塾大学文学部教授）	
	原　芳男（東京工業大学工学部助教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	中鉢　正美（慶應義塾大学経済学部教授）	
	香原　志勢（立教大学一般教育部教授）	
第99回	藝術のたのしみ（第３回）―美術・音楽におけるヨーロッパ・ルネッサンス―	1978年７月14～16日 104名35校
	前川　誠郎（東京大学文学部教授）	
	遠山　一行（音楽評論家）	
	戸口　幸策（成城大学文学部教授）	
	鹿島　亨（国立音楽大学音楽学部教授）	
	荒木　成子（清泉女子大学文学部助教授）	
	友部　直（共立女子大学文学文芸学部教授）	
	前川　誠郎（東京大学教授）	
	勝　国興（同志社大学助教授）	
	大橋　敏成（上野学園大学音楽学部教授）	
第100回	21世紀に向かって―学問と人間の問題―（大学共同セミナー100回記念）	1978年10月７～10日 120名39校
	伏見　康治（日本学術会議会長）	
	板垣　與一（一橋大学名誉教授・亜細亜大学経済学部教授）	
	佐伯　彰一（東京大学教養学部教授）	
	渡辺　格（慶應義塾大学医学部教授）	
	山田　圭一（筑波大学社会工学系教授）	
	坂本　賢三（神戸商船大学商船学部教授）	
	高瀬　浄（高崎経済大学経済学部教授）	
	由良　君美（東京大学教養学部教授）	
	野島　秀勝（お茶の水女子大学教育学部教授）	
	溝淵　潔（東京大学理学部助教授）	
	中村　桂子（三菱化成生命科学研究所・社会生命科学研究室長）	
第101回	映画表現と人間―チャップリンと20世紀文明―	1978年11月24～26日 77名32校
	淀川　長治（映画評論家）	
	荒井　良雄（学習院大学文学部教授）	
	品田　雄吉（映画評論家）	
	白井　佳夫（映画評論家）	
	宮下　啓三（慶應義塾大学文学部教授）	
第102回	学問の移植と創造―近代日本の場合―（故正田健次郎先生追悼記念）	1979年５月25～27日 26名17校
	今道　友信（東京大学文学部教授）	
	吉田　耕作（東京大学名誉教授）	
	村田　全（立教大学理学部教授）	
	中川　米造（大阪大学医学部助教授）	
	小泉　仰（慶應義塾大学文学部教授）	
	水谷　静夫（東京女子大学文理学部教授）	
	長　幸男（東京外国語大学外国語学部教授）	
第103回	空間と人間生活―自然・人間の適正規模―	1979年７月13～15日 64名24校
	吉田　光邦（京都大学人文科学研究所教授）	
	香原　志勢（立教大学一般教育部教授）	
	小田　晋（筑波大学社会医学系教授）	
	中村　陽吉（東京女子大学文理学部教授）	
	戸沼　幸市（早稲田大学理工学部教授）	
	谷口　汎邦（東京工業大学工学部助教授）	
第104回	ルソーと共に現代を問う―人間は自由なものとして生まれた―	1979年10月12～14日 46名20校
	原　好男（立教大学助教授）	
	小林　善彦（東京大学教授）	
	海老沢　敏（国立音楽大学長）	
	林　道義（東京女子大学教授）	
	室　俊司（立教大学教授）	
	宮島　喬（お茶の水女子大学助教授）	
	小林　善彦（東京大学教授）	
第105回	日本人と＜家＞	1979年11月９～11日
	小山　隆（東洋大学名誉教授）	67名25校

回次	主題・講師	会期・参加状況
	加賀　乙彦（作家）	
	正岡　寛司（早稲田大学教授）	
	相澤　韶男（武蔵野美術大学講師）	
	熊坂　敦子（日本女子大学教授）	
	鳥居　邦朗（武蔵大学教授）	
第106回	1980年代の世界経済 （大内力先生退官記念）	1979年12月７～９日 72名25校
	大内　力（東京大学名誉教授）	
	隅谷　三喜男（信州大学教授）	
	馬場　宏二（東京大学社研助教授）	
	佐藤　経明（横浜市立大学商学部教授）	
	森田　桐郎（東京大学経済学部教授）	
	大内　秀明（東北大学教養部教授）	
第107回	仏教と人生 ―仏教における真・善・美の探求―	1980年１月11～13日 63名26校
	山崎　正一（法政大学教授）	
	西谷　啓治（京都大学名誉教授）	
	山内　恭彦（東京大学名誉教授）	
	（司会）三枝　充悳（筑波大学教授）	
	峰島　旭雄（早稲田大学教授）	
	吉田　宏哲（大正大学講師）	
	島田　外志夫（東京芸術大学講師）	
	横山　紘一（立教大学助教授）	
第108回	イスラムの世界 ―その文明の現代的意義―	1980年３月12～14日 104名29校
	三木　亘（東京外国語大学助教授）	
	黒田　壽郎 （前イラン王立哲学アカデミー教授）	
	池田　修 （大阪外国語大学アラビア語科助教授）	
	中村　廣治郎 （東京大学東洋文化研究所助教授）	
	片倉　もとこ （津田塾大学学芸学部教授）	
	佐藤　次高 （お茶の水女子大学文教育学部助教授）	
	中岡　三益 （アジア経済研究所調査研究部長）	
	板垣　雄三（東京大学教養学部助教授）	
第109回	エネルギー・システムと現代社会 （開館15周年記念）	1980年５月30 ～６月１日
	太田　時男（横浜国立大学工学部教授）	81名26校
	向坂　正男 （日本エネルギー経済研究所会長）	
	岸田　純之助（朝日新聞論説委員）	
	深海　博明 （慶應義塾大学経済学部教授）	
	西川　潤 （早稲田大学政治経済学部教授）	
	佐藤　光雄 （東芝エネルギー機器研究所主任研究員）	
	石谷　清幹（大阪大学工学部教授）	
	道家　達将（東京工業大学工学部教授）	
第110回	藝術のたのしみ（第４回） 劇的なるものを求めて―演劇とドラマ、その歴史・観賞・実際―	1980年７月11～13日 77名34校
	岩淵　達治（学習院大学文学部教授）	
	増見　利清（劇団俳優座演出家）	
	丹羽　文夫（早稲田大学文学部講師・劇団民芸演出家）	
	西村　博子（早稲田大学文学部講師）	
	寺崎　裕則 （演出家・日本演出家協会理事）	
	白井　佳夫（映画評論家）	
	宮下　啓三（慶應義塾大学文学部教授）	
第111回	転機に立つ平和と人権（飯田さんの功労に感謝する開館15周年記念）	1980年10月24～26日 111名27校
	坂本　義和（東京大学法学部教授）	
	田中　寿美子 （参議院議員・日本社会党副委員長）	
	色川　大吉 （東京経済大学経済学部教授）	
	ダグラス・ラミス （津田塾大学学芸学部教授）	
	高橋　進（東京大学法学部助教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	坂本　義和（東京大学法学部教授）	
	馬場　伸也（津田塾大学学芸学部教授）	
	砂田　一郎 （東海大学政治経済学部助教授）	
	北沢　洋子（国際問題評論家）	
	山本　満（法政大学法学部教授）	
	石田　雄 （東京大学社会科学研究所教授）	
第112回	生けるサルトル	1980年12月12～14日
	竹内　芳郎（哲学者）	29名17校
	三枝　和子（作家）	
	平井　啓之（立教大学文学部教授）	
	今村　仁司 （東京経済大学経済学部助教授）	
	木田　元（中央大学文学部教授）	
	海老坂　武（一橋大学社会学部教授）	
第113回	個性と創造性―日本の未来のために―	1981年１月16～18日
	渡辺　茂（東京都立工科短期大学長）	52名20校
	山本　七平（山本書店主・評論家）	
	大森　荘蔵（東京大学教養学部教授）	
	村上　陽一郎 （東京大学教養学部助教授）	
	江沢　洋（学習院大学理学部教授）	
	粟津　潔（グラフィック・デザイナー）	
	樺山　紘一（東京大学文学部助教授）	
	杉田　弘子（武蔵大学文学部教授）	
	芳賀　徹（東京大学教養学部教授）	
	中野　博司（慶應義塾大学文学部教授）	
	飯田　宗一郎 （大学セミナー・ハウス名誉館長）	
第114回	無意識からの人間理解 ―ユング心理学を中心に―	1981年６月19～21日 104名30校
	林　道義（東京女子大学文理学部教授）	
	トマス・インモース（上智大学東洋宗教研究所所長／日本ユング・グラブ会長）	
	三木　アヤ （大正大学カウンセリング研究所講師）	
	トマス・インモース（上智大学東洋宗教研究所所長／日本ユング・グラブ会長）	
	湯浅　泰雄 （筑波大学哲学思想学系教授）	
	松代　洋一（早稲田大学文学部講師）	
	野田　倬（東京工業大学工学部教授）	
第115回	現代人と「沈黙」	1981年11月13～15日
	中村　元 （東方学院長・東京大学名誉教授）	33名16校
	奥　俊哲（臨済宗円覚寺派松嶺院住職）	
	中川　秀恭（国際基督教大学長・大学セミナーハウス館長）	
	芳野　赳夫 （電気通信大学電気通信学部教授）	
	峰島　旭雄（早稲田大学商学部教授）	
	堀江　湛（慶應義塾大学工学部教授）	
	岡野　加穂留 （明治大学政治経済学部教授）	
第116回	生活（くらし）とかたち （故吉阪隆正先生追悼記念）	1981年12月11～13日 55名17校
	菊竹　清訓（建築家）	
	勝見　勝 （評論家・日本デザイン学会会長）	
	佐々木　嘉彦（東北大学工学部名誉教授・八戸大学工学部教授）	
	石毛　直道（国立民族学博物館助教授）	
	田村　善次郎 （武蔵野美術大学造形学部教授）	
	松崎　義徳（建築家）	
	樋口　裕康（象設計集団チーフ）	
第117回	都市と文学	1982年１月８～10日
	小野　二郎（明治大学文学部教授）	53名23校
	小池　滋（東京都立大学人文学部教授）	
	金関　寿夫 （関西外国語大学外国語学部教授）	
	清水　徹（明治学院大学文学部教授）	
	前田　愛（立教大学文学部教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
第118回	コンピューターと人間	1982年３月19～21日
	小林　宏治（日本電気会長）	64名26校
	淵　一博（電子技術総合研究所パターン情報部長）	
	魚木　五夫（産業能率大学情報学部教授）	
	石井　威望（東京大学工学部教授）	
	石田　晴久（東京大学大型計算機センター助教授）	
	川畑　正太（映像情報システム開発協会理事）	
第119回	ヨーロッパ中世と現代 ―歴史家とともに―	1982年５月21～23日
	二宮　宏之（東京外国語大学外国語学部教授）	46名19校
	二宮　宏之（東京外国語大学外国語学部教授）	
	三好　洋子（聖心女子大学文学部教授）	
	佐々木　克己（成蹊大学経済学部教授）	
	山田　欣吾（一橋大学経済学部教授）	
	阿部　謹也（一橋大学社会学部教授）	
第120回	地球の過去・現在・未来―太陽と環境と生命―	1982年12月17～19日
	芳野　赳夫（電気通信大学電気通信学部教授）	28名17校
	野田　春彦（電気通信大学電気通信学部教授）	
	櫻井　邦朋（神奈川大学工学部教授）	
	福西　浩（国立極地研究所超高層物理部門助教授）	
	廣田　勇（京都大学理学部助教授）	
	大林　辰蔵（宇宙科学研究所教授）	
第121回	人間の攻撃性を考える ―ヒトの性は善か悪か―	1983年１月７～９日
	尾本　恵市（東京大学理学部教授）	39名22校
	小浪　充（東京外国語大学外国語学部教授）	
	篠田　正浩（映画監督）	
	西田　利貞（東京大学理学部助教授）	
	畑中　幸子（金沢大学文学部教授）	
	佐藤　方哉（慶應義塾大学文学部教授）	
	小浪　充（東京外国語大学外国語学部）	
第122回	現代に生きるC．G．ユング	1983年３月18～20日
	林　道義（東京女子大学文理学部教授）	108名32校
	トマス・インモース（上智大学東洋宗教研究所所長）	
	湯浅　泰雄（筑波大学哲学・思想学系教授）	
	小川　捷之（横浜国立大学教育学部助教授）	
	松代　洋一（早稲田大学教育学部講師）	
	久保田　圭吾（桜美林大学文学部助教授）	
	林　道義（東京女子大学文理学部教授）	
第123回	平和・婦人・学問―現代人へのメッセージ―（故上代たの先生追悼記念）	1983年５月28～29日
	石田　雄（東京大学社会科学研究所教授）	70名24校
	一番ヶ瀬　康子（日本女子大学文学部教授）	
	熊坂　敦子（日本女子大学文学部教授）	
	福田　陸太郎（日本女子大学文学部教授）	
	井出　義光（筑波大学歴史・人類学系教授）	
第124回	藝術のたのしみ（第５回） ―バロック概念の再検討―	1983年11月25～27日
	遠山　一行（東京文化会館館長）	36名18校
	若桑　みどり（東京芸術大学音楽学部助教授）	
	辻　惟雄（東京大学文学部教授）	
	船山　信子（上野学園大学音楽学部助教授）	
	徳丸　吉彦（お茶の水女子大学文教育学部教授）	
	渡邊　順生（チェンバロ）	
	渡邊　慶子（バロック・ヴァイオリン）	
	平尾　雅子（ヴィオラ・ダ・ガンバ）	
	ミシェル・ワッセルマン（語り）	
第125回	第三世界の文化状況―人間の解放とアイデンティティの模索―	1983年12月16～18日
	板垣　雄三（東京大学教養学部教授）	78名25校
	李　恢成（作家）	
	海老坂　武（一橋大学社会学部教授）	
	楠原　彰（国学院大学文学部教授）	
	栗原　幸夫（日本アジア・アフリカ作家会議事務局長）	
	加藤　祐三（横浜市立大学文理学部教授）	
	クントン・インタラタイ（京都精華大学美術学部教授）	
	深海　博明（慶應義塾大学経済学部教授）	
	楠原　彰（国学院大学文学部教授）	
	加茂　雄三（青山学院大学文学部教授）	
	広河　ルティ（仏語教師）	
	針生　一郎（和光大学人文学部教授）	
	ハムザ・アッディーン（ウード演奏）	
第126回	人間性の回復を求めて ―現代における救いの問題―	1984年１月14～15日
	佐古　純一郎（二松学舎大学文学部教授）	45名25校
	谷口　龍男（早稲田大学文学部教授）	
	小泉　仰（慶應義塾大学文学部教授）	
	峰島　旭雄（早稲田大学商学部教授）	
	藤井　正雄（大正大学文学部教授）	
第127回	現代指導者論―その人格と時代精神―	1984年３月16～18日
	神島　二郎（立教大学法学部教授）	42名18校
	平川　祐弘（東京大学教養学部教授）	
	山口　比呂志（『財界』主幹）	
	粕谷　一希（日本文化会議編集委員・『中央公論』元編集長）	
	内田　健三（法政大学法学部教授・元共同通信論説委員長）	
	岡野　加穂留（明治大学政治経済学部教授）	
	小田　晋（筑波大学社会医学系教授）	
第128回	言葉の身ぶりの記号学	1984年５月25～27日
	山口　昌男（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）	140名40校
	前田　愛（立教大学文学部教授）	
	佐藤　信夫（国学院大学文学部教授）	
	池上　嘉彦（東京大学教養学部助教授）	
	中沢　新一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手）	
	浅田　彰（京都大学人文科学研究所助手）	
第129回	男と女―性差の本質とその文化的意味―	1984年11月23～25日
	岩崎　寛和（筑波大学臨床医学系教授）	52名27校
	藤井　正雄（大正大学文学部教授）	
	船山　信子（上野学園大学音楽学部助教授）	
	安岡　章太郎（作家）	
	綾部　恒雄（筑波大学歴史・人類学系教授）	
	片倉　もとこ（国立民族学博物館教授）	
	亀井　俊介（東京大学教養学部教授）	
	杉田　弘子（武蔵大学人文学部教授）	
第130回	科学ジャーナリズムの現実を問う	1984年12月15～16日
	牧野　賢治（毎日新聞編集局生活家庭部編集委員）	41名17校
	餌取　章男（「日経サイエンス」編集長）	
	米本　昌平（三菱化成生命科学研究所副主任研究員）	
	粒良　文洋（雑誌「科学」編集部）	
	三浦　賢一（雑誌「科学朝日」記者）	
	赤木　昭夫（NHK解説委員）	
	中山　茂（東京大学教養学部講師）	
第131回	管理社会のライフ・スタイルを考える	1985年３月15～17日
	五木　寛之（作家）	89名37校
	山本　哲士（信州大学教養学部教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	竹内　敏晴 （竹内演劇研究所・演劇トレーナー）	
	室田　武（一橋大学経済学部助教授）	
	田中　義久（法政大学社会学部教授）	
第132回	日本文化の深層 ―歴史学と民俗学の接点から―	1985年５月24～26日 61名24校
	藤田　省三（法政大学法学部教授）	
	樺山　紘一（東京大学文学部助教授）	
	網野　善彦 （神奈川大学短期大学部教授）	
	塚本　学 （国立歴史民俗博物館歴史研究部教授）	
	坪井　洋文 （国立歴史民俗博物館民俗研究部教授）	
	宮田　登 （筑波大学歴史・人類学系教授）	
第133回	情報化と社会（開館20周年記念）	1985年10月25～27日
	木村　武二（東京大学教養学部教授）	43名20校
	鈴木　孝夫 （慶應義塾大学言語文化研究所教授）	
	榊原　　胖夫 （同志社大学経済学部教授）	
	河村　雅隆（NHK 報道局編集センターディレクター）	
	松本　忠夫（東京大学教養学部助教授）	
	長谷川　真理子（東京大学理学部助手）	
	清水　博（東京大学薬学部教授）	
	無藤　隆（聖心女子大学文学部助教授）	
	宮田　登 （筑波大学歴史・人類学系教授）	
	今井　賢一（一橋大学商学部教授）	
	井関　利明（慶應義塾大学文学部教授）	
	竹内　啓（東京大学経済学部教授）	
第134回	エントロピーなしで生きられるか	1985年12月13～15日
	杉浦　銀治（前農林水産省林業試験場木材炭化研究室）	54名18校
	槌田　敦（理化学研究所研究員）	
	江沢　洋（学習院大学理学部教授）	
	中村　達也（千葉大学法経学部教授）	
	室田　武（一橋大学経済学部助教授）	
	田村　光三 （明治大学政治経済学部教授）	
第135回	ナショナリズムと国際性 ―内村鑑三と新渡戸稲造を中心に―	1986年３月13～15日 43名15校
	武田　清子 （国際基督教大学大学院教授）	
	渋谷　浩（明治学院大学法学部教授）	
	泉　治典（東洋大学文学部教授）	
	佐藤　全弘（大阪市立大学文学部教授）	
第136回	文学と風土 ―日本文学の特殊性と国際性―	1986年５月23～25日 35名13校
	芳賀　徹（東京大学教養学部教授）	
	大江　健三郎（作家）	
	野中　涼（早稲田大学文学部教授）	
	大久保　喬樹 （東京女子大学文理学部助教授）	
	田代　慶一郎 （筑波大学文芸・言語学系教授）	
	仙北谷　晃一（武蔵大学人文学部教授）	
第137回	生命理論を考える	1986年11月14～16日
	合田　周平 （電気通信大学電気通信学部教授）	37名13校
	坂本　百大 （青山学院大学経済学部教授）	
	古川　俊之 （東京大学医学部医用電子研究施設教授）	
	村松　正実（東京大学医学部教授）	
	加藤　尚武（千葉大学文学部教授）	
	新美　育文（明治大学法学部助教授）	
第138回	平和と軍縮を求めて ―人類が共に生きる条件―	1986年12月５～７日 84名25校
	豊田　利幸 （明治学院国際平和研究所長）	
	中島　正樹 （三菱総合研究所取締役相談役）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	高柳　先男（中央大学法学部教授）	
	大西　仁（東北大学法学部助教授）	
	下斗米　伸夫（成蹊大学法学部教授）	
	最上　敏樹 （国際基督教大学教養学部助教授）	
	鴨　武彦（早稲田大学政経学部教授）	
第139回	巨大技術と人間	1987年８月13～15日
	寺井　精英 （電気通信大学電気通信学部教授）	42名18校
	河宮　信郎（中京大学教養部助教授）	
	大沢　弘之（宇宙開発事業団理事長）	
	横井　俊夫（新世代コンピューター技術開発機構研究担当次長）	
	槌田　敦（理化学研究所研究員）	
	宇沢　弘文（東京大学経済学部教授）	
	室田　武（一橋大学経済学部助教授）	
第140回	現代社会と思想の地盤変え ―象徴的なものの社会科学―	1987年５月22～24日 35名19校
	丸山　圭三郎（中央大学文学部教授）	
	福井　憲彦 （東京経済大学経済学部助教授）	
	山本　哲士（信州大学教養部助教授）	
	西川　直子 （東京都立大学人文学部助教授）	
	大橋　洋一（学習院大学文学部助教授）	
第141回	言語・民族・国家―多言語・多民族国家の諸問題を考える―	1987年11月13～15日 58名27校
	ジョン・D・レッグ （豪モナッシュ大学教授）	
	飯島　茂（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）	
	阿部　齊（放送大学教養学部教授）	
	小浪　充 （東京外国語大学外国語学部教授）	
	田中　恭子 （中部大学国際関係学部教授）	
	青木　一能 （日本大学国際関係学部助教授）	
第142回	神秘主義 ―西洋思想のもうひとつの正統―	1987年12月４～６日 40名17校
	若桑　みどり （東京芸術大学音楽学部教授）	
	南原　実（信州大学人文学部教授）	
	志村　正雄 （東京外国語大学外国語学部教授）	
	伊藤　博明（北海道大学文学部助手）	
	松本　夏樹（神秘主義研究家）	
第143回	よくわかる家族のはなし	1988年３月11～13日
	桜井　哲夫 （東京経済大学経済学部助教授）	68名26校
	別役　実（劇作家）	
	山崎　哲（劇作家）	
	山田　和夫 （東京大学保健管理センター副所長）	
	山本　真鳥（法政大学経済学部助教授）	
	袖井　孝子 （お茶の水女子大学家政学部助教授）	
第144回	人工知能は感性を持てるか？	1988年６月18～19日
	戸田　正直（中京大学文学部教授）	54名22校
	大村　皓一（大阪学院大学教授）	
	田中　穂積（東京工業大学工学部教授）	
	鈴木　良次（東京大学工学部教授）	
	向井　国昭（(財）新世代コンピュータ技術開発機構主任研究員）	
	坂本　百大 （青山学院大学経済学部教授）	
	徃住　彰文 （聖心女子大学文学部助教授）	
	川野　洋 （東京都立科学技術大学工学部教授）	
	白井　良明（大阪大学工学部教授）	
第145回	東アジアにおける国際関係 ―日韓・日朝の交流史から学ぶもの―	1988年11月11～13日 28名11校
	和田　春樹 （東京大学社会学研究所教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	笹川　紀勝 （国際基督教大学教養学部教授）	
	中塚　明（奈良女子大学文学部教授）	
	全　浩天（朝鮮画報社編集局副局長）	
	最上　敏樹 （国際基督教大学教養学部準教授）	
	池　明観 （東京女子大学現代文化学部教授）	
	鬼頭　清明（東洋大学文学部教授）	
第146回	ユングとフロイト	1988年12月９～11日
	鑪　　幹八郎（広島大学教育学部教授）	86名27校
	安田　一郎 （横浜市立大学文理学部教授）	
	鈴木　晶（駿河台大学法学部専任講師）	
	入江　良平（青森大学社会学部助教授）	
	村本　詔司（花園大学文学部助教授）	
	小川　捷之 （横浜国立大学教育学部教授）	
第147回	管理社会と身体 ―感性を取り戻す場を考える―	1989年３月10～12日 74名27校
	多木　浩二（評論家）	
	竹内　敏晴 （南山短期大学人間関係科教授）	
	山本　哲士（信州大学教部助教授）	
	室田　武（一橋大学経済学部助教授）	
	戸田　三三冬（立教大学法学部講師）	
	栗原　彬（立教大学法学部教授）	
第148回	資源の長期的展望 ―人類は21世紀を生きのびられるか―	1989（平成元）年６月16～18日
	深海　博明（慶應義塾大学経済学部教授）	49名18校
	竹内　啓（東京大学先端科学技術研究センター教授）	
	原田　憲一（山形大学理学部助教授）	
	室田　泰弘（埼玉大学教養学部助教授）	
	室田　武（一橋大学経済学部教授）	
第149回	祭りと文化	1989年11月10～12日
	松平　誠（立教大学社会学部教授）	46名17校
	加太　こうじ （著述家・元紙芝居作画家）	
	陣内　秀信（法政大学工学部助教授）	
	蔵持　不三也 （早稲田大学人間科学部助教授）	
	渋谷　利雄（和光大学人文学部助教授）	
	吉見　俊哉（東京大学新聞研究所助手）	
	陣内　秀信（立教大学社会学部教授）	
第150回	ユング心理学―心の深層をさぐる―	1989年12月15～17日
	樋口　和彦（同志社大学神学部教授）	113名38校
	小川　捷之 （横浜国立大学教育学部教授）	
	三木　アヤ（山王教育研究所講師）	
	岸　良範 （埼玉医科大学短期大学専任講師）	
	小川　捷之 （横浜国立大学教育学部教授）	
第151回	現代中国の潮流	1990年３月10～11日
	伴野　朗（朝日新聞前上海支局長・ミステリー作家）	96名28校
	加々美　光行 （アジア経済研究所研究主任）	
	矢吹　晋（横浜市立大学商学部教授）	
	宇野　重昭（成蹊大学法学部教授）	
	平松　茂雄（杏林大学社会学部教授）	
第152回	ソ連・東欧の変貌	1990年６月15～17日
	木戸　蓊（神戸大学法学部教授）	102名25校
	島田　雅彦（作家）	
	加藤　雅彦 （国際地域研究センター所長）	
	下斗米　伸夫（法政大学法学部教授）	
	伊東　孝之 （北海道大学スラブ研究センター教授）	
	秋野　豊 （筑波大学国際関係学類助教授）	
	南塚　信吾（千葉大学文学部教授）	
	直野　敦（文化女子大学家政学部教授）	
	柴　宜弘（敬愛大学経済学部助教授）	

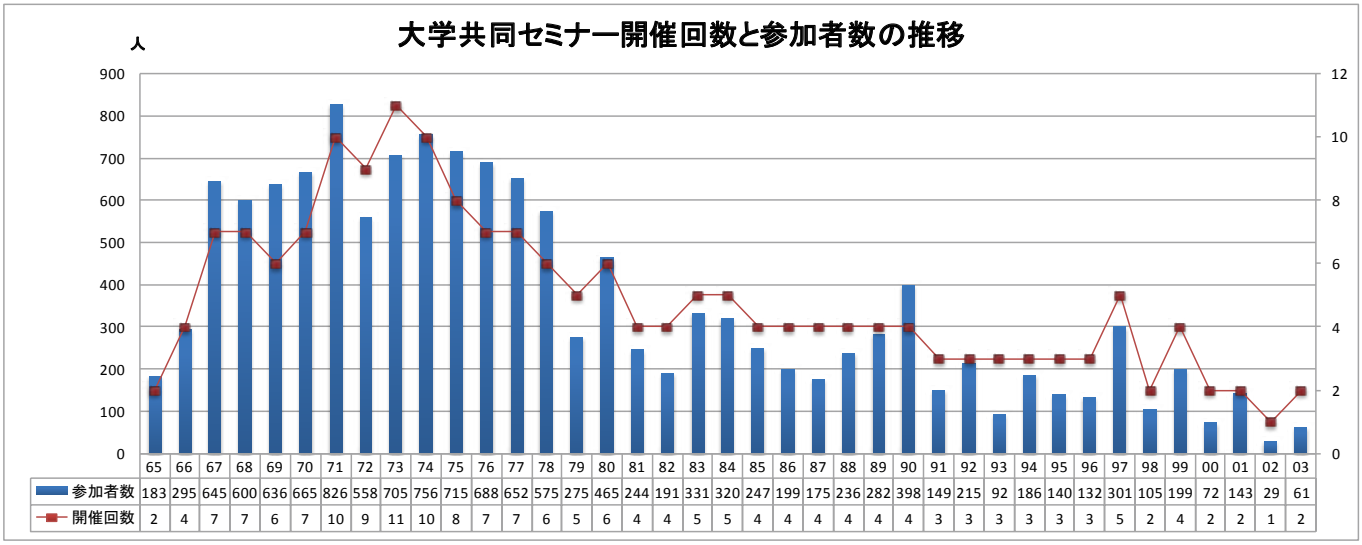
回次	主題・講師	会期・参加状況
第153回	日本人は「豊な社会」を作れるか	1990年11月９～10日
	竹内　啓 （東京大学先端科学技術センター教授）	62名23校
	井原　哲夫（慶應義塾大学商学部教授）	
	袖井　孝子 （お茶の水女子大学家政学部助教授）	
	菅原　眞理子 （総務庁統計局統計情報課長）	
	室田　武（一橋大学経済学部教授）	
第154回	心の深層をさぐる ―ユング心理学とグループ・ワーク―	1990年11月30～12月２日
	小川　捷之（上智大学文学部教授）	138名35校
	弘中　正美（千葉大学教育学部助教授）	
	横山　剛（上智短期大学非常勤講師）	
	横山　恭子（上智大学非常勤助手）	
	岸　良範 （埼玉医科大学短期大学専任講師）	
	辻　祥子（山王教育研究所講師）	
	藤見　幸雄（山王教育研究所スタッフ）	
	ホーナー・デニス （金沢大学法文学部講師）	
	国永　史子 （バイオエネルギー研究センター講師）	
第155回	現代科学は生命を解読できるか ―生命という形式―	1991年６月14～16日 49名22校
	柴谷　篤弘 （京都精華大学人文学部教授）	
	池田　清彦（山梨大学教育学部教授）	
	多田　富雄（東京大学医学部教授）	
	養老　孟司（東京大学医学部教授）	
	郡司　幸夫（神戸大学理学部助手）	
	横山　輝雄（南山大学文学部教授）	
	黒崎　政男 （立教女学院短期大学助教授）	
第156回	世紀末、甦るアリス	1991年11月15～17日
	浅田　彰（京都大学経済研究所助教授）	64名25校
	谷川　渥（国学院大学文学部助教授）	
	高山　宏（東京都立大学人文学部教授）	
	富山　太佳夫 （成城大学文芸学部助教授）	
	佐藤　良明（東京大学教養学部助教授）	
	西垣　通（明治大学法学部教授）	
	富島　美子 （東京都立大学人文学部助教授）	
	巽　孝之（慶應義塾大学文学部助教授）	
	風間　賢二（文芸評論家）	
第157回	サムライ・ニッポン	1991年12月７～８日
	樺山　紘一（東京大学文学部教授）	36名14校
	冨士田　元彦（映画史家）	
	阿部　猛（帝京大学文学部教授）	
	小和田　哲男（静岡大学教育学部教授）	
	山本　博文（東京大学史料編纂所助手）	
	甲野　善紀 （武術稽古研究会松聲館主宰）	
第158回	となりの異邦人 ―外国人労働者問題を考える―	1992年６月19～21日 66名23校
	岡澤　憲芙 （早稲田大学社会科学部教授）	
	江橋　崇（法政大学法学部教授）	
	駒井　洋（筑波大学社会科学系教授）	
	小畑　精武 （労働組合江戸川ユニオン書記長）	
	宮島　喬 （お茶の水女子大学文教育学部教授）	
	樋口　美雄（慶應義塾大学商学部教授）	
	阿久津　麻理子 （(財）神奈川県国際交流協会）	
第159回	数と論理のファンンタジア	1992年７月４～５日
	野崎　昭弘（国際基督教大学教養学部教授）	57名24校
	秋山　仁（東京理科大学理学部教授）	
	波多野　誼余夫（独協大学教養部教授）	
	何森　仁（「数学教室」編集局長）	
	藤原　正彦 （お茶の水女子大学理学部教授）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
第160回	身体運用の妙を探る ―日本的動法の世界―	1992年10月24～25日 92名10校
	中村　桂子 （早稲田大学人間科学部教授）	
	甲野　善紀 （武術稽古研究会松聲館主宰）	
	野口　裕之 （(社）整体協会・整体研究所長）	
	秋岡　芳夫（工業デザイナー）	
第161回	＜会社＞とは何か	1993年７月２～４日
	鎌田　慧（ルポライター）	51名20校
	奥村 宏（龍谷大学経済学部教授）	
	間宮　陽介（京都大学大学院人間・環境研究科助教授）	
	佐藤　博樹（法政大学経営学部教授）	
	伊藤　正直（東京大学経済学部助教授）	
	木村　敦（本田技研工業㈱本社・参与） （前アメリカンホンダモーターカンパニー取締役副社長）	
	斎藤　修（一橋大学経済研究所教授）	
第162回	ゆらぎの科学	1993年10月29～30日
	武者　利光（東京理科大学工学部教授）	41名12校
	米沢　富美子 （慶應義塾大学理工学部教授）	
	山本　光璋 （東北大学大学院情報科学研究科教授）	
	桜井　邦朋（神奈川大学工学部教授）	
第163回	現代人と宗教のゆくえ	94年３月11～13日
	青木　保（大阪大学人間科学部教授）	68名32校
	中林　伸浩（金沢大学教養部教授）	
	越智　貢（広島大学文学部教授）	
	大越　愛子（近畿大学文芸学部助教授）	
	対馬　路人 （関西学院大学社会学部教授）	
	島薗　進（東京大学文学助教授）	
	宮永　國子 （国際基督教大学教養学部準教授）	
第164回	ベイトソン再発見	1994年10月21～23日
	星川　淳（翻訳家・エッセイスト）	31名15校
	佐藤　良明（東京大学教養学部助教授）	
	宮坂　敬造 （慶應義塾大学文学部助教授）	
	佐藤　敬三（埼玉大学教養学部教授）	
	今福　龍太 （中部大学国際関係学部助教授）	
	長谷川　敏彦（厚生省九州地方医務局次長・東京大学大学院非常勤講師）	
第165回	フィールドワークの実際	1994年12月２～４日
	佐伯　胖（東京大学教育学部教授）	87名22校
	佐藤　郁哉（筑波大学人文学部教授）	
	茂呂　雄二（筑波大学心理学系助教授）	
	福岡　安則（埼玉大学教養学部教授）	
	山崎　敬一（埼玉大学教養部助教授）	
第166回	生命を考える ―サイエンス・ヒストリー・エシックス―	1995年３月11～12日 74名26校
	松原　謙一 （大阪大学細胞生体工学センター長）	
	中村　桂子（生命誌研究館副館長／早稲田大学人間科学研究科教授）	
	加藤　尚武（京都大学文学部教授）	
第167回	民主化の比較政治学	1995年10月27～29日
	伊東　孝之 （早稲田大学政治経済学部教授）	29名16校
	鈴木　佑司（法政大学法学部教授）	
	吉川　洋子 （京都産業大学外国語学部教授）	
	若松　隆（中央大学法学部教授）	
	遅野井　茂雄 （富山国際大学人文学部助教授）	
	永綱　憲悟 （亜細亜大学国際関係学部助教授）	
	川原　彰（杏林大学社会科学部助教授）	
第168回	電子メディアと21世紀のライフスタイル	1995年12月８～10日
	土屋　俊（千葉大学文学部教授）	37名18校

回次	主題・講師	会期・参加状況
	野島　久雄（日本電信電話株式会社基礎研究所主任研究員）	
	檜山　正幸（テクニカルライター）	
	竹中　ナミ （プロップ・ステーション代表）	
	松本　恒雄（一橋大学法学部教授）	
	合庭　惇（静岡大学情報学部教授）	
第169回	文学の方法―漱石を仲立ちとして―	1996年３月８～10日
	水村　美苗（作家）	29名18校
	石原　千秋（成城大学文芸学部助教授）	
	落合　一泰（茨城大学人文学部教授）	
	小谷野　敦（大阪大学言語文化部講師）	
	小森　陽一（東京大学教養学部助教授）	
第170回	ハリウッド帝国の世界像 ―イメージ・ポリティクス―	1996年10月26～27日
	桜井　哲夫（東京経済大学コミュニケーション学部教授）	59名24校
	落合　一泰（茨城大学人文学部教授）	
	村上　由見子（ノンフィクション作家）	
	山中　速人（東京経済大学コミュニケーション学部教授）	
	吉見　俊哉 （東京大学社会情報研究所助教授）	
第171回	絶滅論	1996年12月７～８日
	松井　孝典（東京大学理学部助教授）	44名20校
	河田　雅圭（静岡大学教育学部助教授）	
	内田　亮子 （京都大学霊長類研究所助手）	
	坂田　俊文 （東海大学情報技術センター所長）	
第172回	主題　考える楽しさ ―あなたの頭をもっとやわらかくする―	1997年３月７～９日 56名27校
	野崎　昭弘 （大妻女子大学社会情報学部教授）	
	中村　義作（東海大学教育研究所教授）	
	秋山　仁（東海大学教育研究所教授）	
	岡　宏子（大学セミナー・ハウス館長）	
第173回	新しい映画史を考える	1997年６月13～15日
	四方田　犬彦 （明治学院大学文学部教授）	50名18校
	細川　周平（東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授）	
	武田　潔（早稲田大学文学部助教授）	
	小松　弘（埼玉大学教養学部助教授）	
第174回	都市と視線―塔からバーチャルリアリティーまで―	1997年７月５～６日
	奈良原　一高（写真家）	70名21校
	山岸　健（慶應義塾大学文学部教授）	
	陣内　秀信（法政大学工学部教授）	
	田中　純 （東京大学大学院総合文化研究所教授）	
	吉見　俊哉 （東京大学社会情報研究所助教授）	
第175回	地球市民になろう―環境破壊・戦争・貧困・民族紛争の解決の道を探る	1997年10月24～26日 96名31校
	油井　大三郎 （東京大学大学院総合文化研究科教授）	
	ロニー・アレキサンダー（神戸大学大学院国際協力研究科教授）	
	伊東　孝之 （早稲田大学政治経済学部教授）	
	石井　摩耶子 （恵泉女学園大学人文学部教授）	
	大西　仁（東北大学法学部教授）	
第176回	バブル崩壊後の企業社会とジェンダー	1997年12月５～７日
	伊藤　正直 （東京大学大学院経済学研究科教授）	29名14校
	遠藤　公嗣（明治大学経営学部教授）	
	木本　喜美子（一橋大学社会学部教授）	
	新村　保子（元経済企画庁調査局審議官・㈱住友生命総合研究所取締役生活部長）	
	桐原　保法（ソニー㈱レコーディングメディア＆エナジーカンパニーシニアバイスプレジデント）	

回次	主題・講師	会期・参加状況
	越堂　静子（ワーキング・ウイメンズ・ネットワーク世話人・商社に働く女性の会世話人）	
第177回	地球市民になろう part 2 ―戦争と平和について考える―	1998年10月９～11日 68名26校
	小島　清文（不戦兵士の会）	
	ダグラス・ラミス （津田塾大学学芸学部教授）	
	佐伯　奈津子（インドネシア民主化支援ネットワーク／上智大学大学院博士後期課程）	
	大西　仁（東北大学法学部教授）	
	臼井　久和 （フェリス女学院大学国際交流学部教授）	
	内海　愛子 （恵泉女学園大学人文学部教授）	
	伊東　孝之 （早稲田大学政治経済学部教授）	
	杉田　明宏（大東文化大学文学部講師）	
第178回	科学と社会、そして技術 ―環境・生命・物質―	1998年12月５～６日 37名15校
	市村　禎二郎 （東京工業大学理学部教授）	
	今堀　和友（東京大学名誉教授・三菱化学生命科学研究所顧問）	
	大橋　裕二　（東京工業大学大学院理工学研究科教授）	
	中島　秀人（東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授）	
	村上　陽一郎 （国際基督教大学教養学部教授）	
第179回	社会学入門―みえざる社会問題についてどう迫るか―	1999年３月12～14日 56名23校
	宮島　喬（立教大学社会学部教授）	
	長谷川　公一（東北大学文学部教授）	
	鹿又　伸夫（北海道大学文学部助教授）	
	牟田　和恵 （甲南女子大学文学部助教授）	
	上林　千恵子（法政大学社会学部）	
	西原　和久（武蔵大学社会学部教授）	
第180回	現代社会と人間存在―変容する世界と人間―	1999年７月２～４日 73名22校
	見田　宗介（共立女子大学教授）	
	竹内　敏晴（元南山大学教授）	
	鳥山　敏子（賢治の学校代表）	
	井上　信子（日本女子大学助教授）	
	平山　満紀（江戸川大学講師）	
	加藤　彰彦（横浜市立大学教授）	
第181回	フィールドワークの魔力 ―その愉しみと苦しみ―	1999年12月11～12日 46名20校
	園田　茂人（中央大学教授）	
	山本　真鳥（法政大学教授）	
	山中　速人（東京経済大学教授）	
	佐藤　郁哉（一橋大学教授）	
第182回	地球市民になろう Part ３ ―「暴力の文化」を「平和の文化」へ―	1999年12月17～19日 24名13校
	天川　恵美子（NHK ディレクター）	
	岩田　昌征（千葉大学教授）	
	古沢　希代子（恵泉女学園大学講師）	
	臼井　久和（フェリス女学院大学教授）	
	首藤　もと子（駒澤大学教授）	
	杉田　明宏（大東文化大学文学部講師）	
	松本　孚（順天堂医療短期大学助教授）	
第183回	沖縄／アジア／日本―高岩　仁三部作「教えられなかった戦争」を観る・考える・語り合う	2000年６月16～18日 38名18校

回次	主題・講師	会期・参加状況
	高岩　仁（映像文化協会）	
	藤岡　明義（不戦兵士の会）	
	林　博史（関東学院大学教授）	
	金　富子（VAWW-NET japan）	
	池田　恵理子 （NHK エンタープライズ21）	
第184回	平和の文化の担い手になろう ―戦争と暴力の世紀を越えるために―	2000年10月27～29日 34名20校
	小林　正典（日本写真家協会）	
	目加田　説子 （JCBL（地雷廃絶キャンペーン）委員）	
	奥本　京子（大阪女学院短期大学講師）	
	都留　康子（東京学芸大学講師）	
	杉田　明宏（大東文化大学講師）	
第185回	マスメディアの現場から―これでもキミはマスコミに来るのか?!―	2001年６月23～24日 98名29校
	長薗　安浩（㈱メディアファクトリー出版局第三編集部部長）	
	関口　和夫（日本経済新聞社情報技術本部システムマネージャー）	
	中野　潔（早稲田大学国際情報通信研究センター客員教授）	
	川人　博（弁護士）	
	萱島　治子（集英社・文芸編集部）	
	椿坂　妙子（ヤマハ・ミュージックメディア営業部海外営業課長）	
	内田　勝（㈱TBS エンタテイメント情報本部情報二部副部長）	
第186回	国際社会学の可能性―越境する文化、社会、人、をどう捉えるか	2001年10月27～28日 45名19校
	アンジェロ・イシ （社会学者・ジャーナリスト）	
	小井土　彰宏 （一橋大学大学院社会学研究科助教授）	
	稲葉　奈々子 （茨城大学人文学部助教授）	
	宮島　喬（立教大学社会学部教授）	
	佐久間　孝正 （東京女子大学文理学部教授）	
第187回	科学論は科学の敵なのか？―科学をめぐる言説のゆくえを見据える―	2002年１月19～20日 29名14校
	村上　陽一郎 （国際基督教大学教養学部教授）	
	長谷川　眞理子 （早稲田大学政治経済学部教授）	
	三中　信宏 （農業環境技術研究所主任研究官）	
第188回	キャリアと自己表現	2003年３月８～９日
	坂上　達夫（NHK 教育番組部チーフ・プロデューサー）	36名15校
	上野　格（弁護士）	
	桃島　裕之（弁護士）	
	小池　振一郎（弁護士）	
	仲築間　卓蔵 （元日本テレビプロデューサー）	
	唐木　厚 （講談社文芸図書第三出版部長）	
	金子　洋三（青年海外協力隊事務局長）	
第189回	食と人間	2003年11月８日
	田坂　興亜（アジア学院校長・元国際基督教大学教授）	25名15校
	熊倉　功夫（国立民族学博物館民族文化研究部教授）	
	西澤　治彦（武蔵大学人文学部教授）	
	天笠　啓祐（市民バイオテクノロジー情報室代表）	



大学院共同セミナー開催一覧（1979-1999）

回次	テーマ	会期	参加状況・人数
1	諸学の系譜と真理愛―方法論の再検討（夏の部） 諸学の系譜と真理愛―方法論の再検討（冬の部）	1979.6.23～25 1979.11.30～12.1	36名20校
2	心とからだ	1981.11.3～5	23名14校
3	創造現場の社会科学―学問方法論の具体化をめざして	1982.7.2～4	31名15校
4	ヘブライズムとヘレニズム―合理性と非合理性の問題をめぐって	1983.7.1～3	38名15校
5	進化論―その功罪と現代における再検討	1984.6.29～7.1	37名19校
6	〈関係性〉の原点を求めて―現代社会における合理性の再構築	1985.6.21～23	40名16校
7	人間性と犯罪―総合犯罪人間学をめざして	1986.7.4～6	40名19校
8	現代科学の自然観―故山内恭彦先生追悼記念	1987.7.3～5	33名13校
9	正義と無秩序―21世紀の法哲学への展望	1988.7.1～3	22名12校
10	現代戦後史の構造―地殻変動する世界の原点を問う	1990.12.14～16	44名15校
11	市場経済のパラドックス	1991.7.5～7	35名23校
12	心理療法における事例検討	1993.3.19～21	121名25校
13	知識批判としてのフェミニズム	1994.7.1～3	60名25校
14	ヨーロッパのアイデンティティ―統合の現在、その光と影	1995.6.16～18	43名21校
15	ゲーム理論の新しい展開	1996.7.5～7	65名22校
16	カルチュラル・スタディーズ	1998.10.23～25	64名25校
17	カルチュラル・スタディーズとグローバリゼーション	1999.10.22～24	31名15校

国際学生セミナー開催一覧（1972-2014）

（講師順不同）

第１回 アジアの平和と開発 ―日本の技術：その歴史的社会的性格― 1972年３月29～31日 69名28校（内）留学生24名

小池　勇二郎（松下電器産業東京研究所長）
岸田　純之助（朝日新聞論説委員）
広野　良吉（成蹊大学教授）
原　芳男（東京工業大学助教授）
内田　星美（東京経済大学助教授）
東寿　太郎（津田塾大学教授）

第２回 アジアの平和と開発 ―新しい国際環境のなかで― 1972年12月14～17日 68名26校（内留学生18名）

細谷　千博（一橋大学教授）
中嶋　嶺雄（東京外国語大学助教授）
青柳　正規（東京大学助手）
道明　三保子（武蔵野美術大学講師）
広野　良吉（成蹊大学教授）
小堀　巖（東京大学助教授）
小倉　武一（アジア経済研究所会長）

第３回 アジアの平和と開発―日本を考える 1973年10月12～14日 74名22校（内留学生13名）

渡辺　昭夫（明治大学助教授）
中嶋　嶺雄（東京外国語大学助教授）
広野　良吉（成蹊大学教授）
米山　俊直（京都大学助教授）
杉山　二郎（東京国立博物館東洋考古室長）
丸山　静雄（朝日新聞論説委員）
J・L・スチュアート（アジア財団日本代表）

第４回 アジアの平和と開発 ―新しいアジア像を求めて― 1974年12月12～15日 89名30校（内留学生27名）

中根　千枝（東京大学教授）
深作　光貞（京都精華短期大学学長）
田中　忠治（東京外国語大学教授）
飯田　経夫（名古屋大学助教授）
伊藤　正憲（名古屋大学修士課程）
岡部　達味（東京都立大学助教授）
三輪　公忠（上智大学教授）
アリフィン・ベイ（ブリタ・ブアナ特派員）
ウォレン・リード（日豪経済合同委員会奨学生）
川田　侃（上智大学教授）
中嶋　嶺雄（東京外国語大学助教授）

第５回 文化接触と日本 1977年12月16～18日 125名31校（内留学生27名）

武者小路　公秀（国連大学副学長）
グレゴリー・クラーク（上智大学客員教授）
武者小路　公秀（国連大学副学長）
鈴木　孝夫（慶應義塾大学教授）
内田　星美（東京経済大学教授）
金山　宣夫（評論家）
渡辺　武（日米欧委員会日本委員長）

特別企画 国際学生シンポジウム（国際セミナー館落成記念） 1978年６月23～24日 115名　26校

鶴見　和子（上智大学教授）
大江　健三郎（作家）
大木　英夫（東京神学大学教授）
西川　潤（早稲田大学教授）
グレゴリー・クラーク（客員研究員）
公文　俊平（東京大学教授）
川田　侃（上智大学教授）

第６回 文化接触と日本 1979年３月19～21日 129名32校（内留学生20名）

佐伯　喜一（㈱野村総合研究所社長）
野元　菊雄（国立国語研究所日本語研究センター長）
戴　国煇（立教大学教授）
三輪　公忠（上智大学教授）
石附　実（天理大学教授）
中嶋　嶺雄（東京外国語大学助教授）

第７回 文化接触と日本 ―相互依存のなかで― 1980年３月17～19日 126名38校（内中学生13名）

P・ミルワード（上智大学教授）
平野　健一郎（東京大学助教授）
菊地　靖（早稲田大学教授）
片倉　もとこ（津田塾大学教授）
中川　文雄（筑波大学助教授）
広野　良吉（成蹊大学教授）

第８回 文化接触と日本―移入と創造― 1981年10月30～11月１日 98名26校（内留学生19名）

加藤　秀俊（学習院大学教授）
上垣外　憲一（東洋大学助教授）
横田　洋三（国際基督教大学教授）
道家　達将（東京工業大学教授）
熊田　禎宣（東京工業大学教授）
緒田原　涓一（上智大学教授）
村井　吉敬（上智大学助教授）

第９回 発展と平和のモデルを求めて―日本再考― 1982年10月29～31日 92名27校（内留学生15名）

吉野　文六（特命全権大使）
松本　洋（国際協力推進協会専務理事）
南　亮進（一橋大学教授）
渡辺　利夫（筑波大学助教授）
ダグラス・ラミス（津田塾大学教授）
菊地　靖（早稲田大学教授）
藤本　芳男（外務省領事移住部部長）

第10回 発展と平和のモデルを求めて 1983年10月28～30日 87名27校（内留学生16名）

高坂　正堯（京都大学教授）
ジョン・ウェルフィールド（国際大学助教授）
鈴木　一郎（津田塾大学教授）
斎藤　志郎（日本経済新聞編集委員・元東南アジア総局長）
渡辺　昭夫（東京大学教授）
山澤　逸平（一橋大学教授）
浜西　栄一（国際交流基金人物交流部受入課）
阿部　美哉（放送教育開発センター教授）
神谷　弘司（国際協力事業団青年海外協力隊事務局）
鈴木　信一（国際協力事業団派遣事業部）
青柳　真智子（立教大学教授）
高山　純（帝塚山大学教授）

第11回 発展と平和のモデルを求めて 1984年12月７～９日 56名23校（内留学生15名）

松田　武彦（東京工業大学学長）
庄野　克房（上智大学教授）
佐藤　繁（富士通研究所川崎研究所情報処理研究部長）
高橋　裕（東京大学教授）
長谷川　三千子（埼玉大学助教授）
山沢　逸平（一橋大学教授）
桜井　清彦（石川島造船化工機顧問）
津田塾大学助教授　菊地　京子
沢谷　一夫（日本工営コンサルタント海外事業部計画調査部長）

第12回 発展と平和のモデルを求めて ―海外体験をどう活かすか― 1985年11月29～12月１日 50名18校（内留学生11名）

杉浦　英男（本田技研工業㈱前会長・常任相談役）
阿部　美哉（放送教育開発センター教授）
中村　輝子（共同通信文化部次長）
菊地　靖（早稲田大学教授）
藤村　建夫（国際協力事業団人材養成課長）
広野　良吉（成蹊大学教授）
松井　やより（朝日新聞東京本社編集委員）
木全　ミツ（労働省職業能力開発局海外協力課長

第13回 ＜開かれた＞日本・総点検 ―＜開かれた＞とは何か― 1986年10月24～26日 64名22校（内留学生６名）

古森　義久（毎日新聞社編集委員）
大畠　英樹（早稲田大学社会学部教授）
マリオン・スティール（国際基督教大学教養学部準教授）
島野　卓爾（学習院大学経済学部教授）
コリン・マッケンジー（オーストラリア国立大学豪日研究センター研究員）
江淵　一公（福岡教育大学教育学部教授）
ラリー・ハケット（国際基督教大学高校教諭）
シャロン・トラウィーク（マサチューセッツ工科大学準教授）
小高　章子（ゼネラルエレクトリック・テクニカルサービスカンパニー炉心管理部）

第14回 ＜開かれた＞日本・総点検 —君は Japan Problem をどう考えるか— 1987年11月６～８日 71名24校（内留学生17名）

カレル・V・ウォルフレン（ジャーナリスト）
井上　宗有迪（丸紅㈱国際経済研究室長）
キム・クァワン・ドゥー（韓国西江大学校経済学部教授）
唯是　康彦（千葉大学法経学部教授）
草野　厚（東京工業大学工学部助教授）
小池　和男（京都大学経済研究所教授）
山野上　素充（㈱神戸製鋼人事部派遣人事室長）
阪中　友久（青山学院大学国際政治経済学部教授）
ジョン・B・ウェルフィールド（国際大学大学院国際関係学研究科准教授）

第15回 ＜開かれた＞日本・総点検 —日本は何ができるか— 1988年10月28～30日 86名25校（内留学生31名）

藤田　公郎（内閣外政審議室長）
村井　吉敬（上智大学外国語学部教授）
伊藤　健一（JICA 青年海外協力隊事務局次長）
平野　健一郎（東京大学教養学部教授）
西野　文雄（東京大学工学部教授）
ゼン・アンガラ（フィリピン大使館一等書記官）
菊地　京子（津田塾大学学芸学部助教授）
宮島　喬（お茶の水女子大学教育学部教授）
山神　進（法務省入国管理局課長補佐）

第16回 日本にグローバル・ストラテジーはあるか —21世紀の世界と日本— 1989年10月27～29日 85名27校（内留学生19名）

大来佐　武郎（国際大学名誉学長・元外務大臣）
大島　賢三（外務省経済協力局政策課長）
R・オアー（テンプル大学教養学部助教授）
毛里　和子（静岡県立大学国際関係学部助教授）
秋野　豊（筑波大学社会科学系助教授）
広野　良吉（成蹊大学経済学部教授）
山根　裕子（明治学院大学国際関係学部助教授）
内田　満（早稲田大学政治経済学部教授）

第17回 地球時代の生き方を求めて（１） —開発と環境— 1990年10月26～28日 99名27校（内留学生18名）

佐藤　大七郎（日本野生生物研究センター理事長）
北畠　佳房（筑波大学社会工学系助教授）
松井　謙（東京国際大学商学部教授）
桜井　国俊（国際協力事業団国際協力専門員）
熊本　一規（明治学院大学国際学部助教授）
井手　敏彦（廃棄物を考える市民の会代表）
杉野　二郎（サヘルの会農業技術者）
河野　栄次（生活クラブ生協理事長）
菊地　靖（早稲田大学理工学部教授）
豊田　由貴夫（亜細亜大学経済学部助教授）
下斗米　伸夫（法政大学法学部教授）
表　寿一（創価大学生命科学研究所助教授）

第18回 地球時代の生き方を求めて（２） —湾岸戦争の問いかけるもの— 1991年10月25～27日 87名28校（内留学生10名）

鈴木　佑司（法政大学法学部教授）
山内　昌之（東京大学教養学部助教授）
田中　明彦（東京大学東洋文化研究所助教授）
功刀　達朗（国際基督教大学国際関係学科教授）
鴨　武彦（東京大学法学部教授）
武者小路　公秀（明治学院大学国際学部教授）
大塚　和夫（国立民族学博物館第三研究部助教授）
志鳥　學修（武蔵工業大学工学部教授）
高橋　和夫（放送大学教養学部助教授）
油井　大三郎（一橋大学社会学部教授）
添谷　芳秀（慶應義塾大学法学部助教授）

第19回 地球時代の生き方を求めて（３） 国境は越えられるか 1992年11月13～15日 117名35校（内留学生20名）

梶田　孝道（津田塾大学教授）
柴　宣弘（東京大学助教授）
今井　圭子（上智大学教授）
田中　恭子（静岡県立大学教授）
田辺　寿夫（NHK チーフ・ディレクター）
鶴見　和子（上智大学名誉教授）
田中　俊郎（慶應義塾大学教授）
グスタボ・アンドラーデ（上智大学イベロアメリカ研究所長）

第20回 地球時代の生き方を求めて（４） 変わりつつある世界秩序と日本 1993年11月19～21日 102名29校（内留学生19名）

渡辺　昭夫（青山学院大学教授）
神谷　万丈（防衛大学校専任講師）
山崎　公士（香川大学教授）
高木　誠一郎（埼玉大学教授）
寺西　俊一（一橋大学教授）
秋山　紀子（青山学院女子短期大学教授）
竹田　いさみ（独協大学教授）
石井　米雄（上智大学教授）
田勢　康弘（日本経済新聞社編集委員兼論説委員）
増田　祐司（東京大学教授）
永井　陽之助（青山学院大学国際政治経済学教授）

第21回 アジア・太平洋における対立と協調 1994年11月18～20日 99名32校（内留学生22名）

中江　要介（元駐中国大使）
大塚　和夫（東京都立大学人文学部助教授）
森　孝一（同志社大学神学部教授）
志鳥　学修（武蔵工業大学工学部教授）
栗原　弘善（核物質管理センター参与）
滝田　賢治（中央大学法学部教授）
徳久　勲（NHK 放送文化研究所主任研究員）
岡田　臣弘（㈱日経リサーチ取締役・研究推進室長）
小田川　圭輔（新日本製鉄株式会社・日本カラジャス鉄鉱石担当部長）
有賀　貞（一橋大学法学部教授）
宇佐美　滋（東京外国語大学外国語学部教授）

第22回 アジア・太平洋地域の行方 —そのシナリオを考える— 1995年１月24～26日 89名29校（内留学生35名）

宇佐美　滋（日本大学国際関係学部教授）
朱　建栄（東洋学園大学人文学部助教授）
関場　誓子（外務省北米局北米第一課課長補佐）
今川　瑛一（創価大学経済学部教授）
笠井　信幸（八千代国際大学政治経済学部教授）
土山　實男（青山学院大学国際政治経済学部教授）
小川　伸一（防衛庁防衛研究所第一研究室長）
佐藤　英夫（筑波大学社会工学系教授）
古城　佳子（国学院大学法学部助教授）

第23回 転換期の世界 1996年11月22～24日 105名32校（内留学生26名）

佐藤　英夫（筑波大学社会工学系教授）
滝田　賢治（中央大学法学部教授）
高杉　忠明（神田外語大学外国語学部助教授）
上坂　昇（桜美林大学国際学部教授）
金重　紘（時事通信社解説委員）
宇佐美　滋（日本大学国際関係学部教授）
渋谷　司（拓殖大学海外事情研究所）
関場　誓子（聖心女子大学文学部教授）
菊池　努（南山大学法学部教授）
佐藤　英夫（筑波大学社会工学系教授）
信田　智人

第24回 21世紀に期待される国連の役割 1997年11月21～23日 114名37校（内留学生22名）

斉藤　千香子（国連難民高等弁務官事務所主任広報官）
納家　政嗣（上智大学国際関係研究所教授）
土山　實男（青山学院大学国際政治経済学部教授）
大芝　亮（一橋大学法学部教授）
阿部　義章（早稲田大学客員教授）
関場　誓子（聖心女子大学文学部教授）

星野　俊也
（日本国際問題研究所主任研究員）
宇佐美　滋（日本大学国際関係学部教授）
内田　孟男（中央大学経済学部教授）
佐藤　英夫（筑波大学社会工学系教授）
ビル・クリアリー
（筑波大学国際総合学類教授）

第25回　アジアの危機とその衝撃 —われわれはどう対処すべきか—　1998年11月20～22日　114名26校（内留学生21名）

川勝　平太
（国際日本文化研究センター教授）
関場　誓子（聖心女子大学文学部教授）
須田　明夫
（外務省総合外交政策局審議官）
勝俣　誠（明治学院大学国際学部教授）
北沢　洋子（アジア太平洋資料センター）
滝田　賢治（中央大学法学部教授）
天児　慧
（青山学院大学国際政治経済学部教授）
宇佐美　滋（日本大学国際関係学部教授）
友田　錫（亜細亜大学アジア研究所教授）
大芝　亮（一橋大学法学部教授）
首藤　もと子（駒澤大学法学部教授）

第26回　21世紀の世界秩序をどう創っていくか？ —パワー・マネー・エシックス—　1999年11月19～21日　84名22校（内留学生16名）

波多野　敬雄
（フォーリン・プレスセンター理事長）
滝田　賢治（中央大学教授）
山本　吉宣（東京大学教授）
渡邊　啓貴（東京外国語大学教授）
金子　譲（防衛庁防衛研究所）
宇佐美　滋（日本大学教授）
茅原　郁生（拓殖大学教授）
勝俣　誠（明治学院大学教授）
石見　徹（東京大学教授）
大芝　亮（一橋大学教授）
ロナルド・A・モース（麗澤大学教授）

第27回　グローバリゼーションの光と影 —世界、日本、市民—　2000年11月17～19日　93名24校（内留学生22名）

齊藤　健
（通商産業省機械情報局国際協力室長）
山田　敦（一橋大学法学部講師）
山内　康英（国際大学教授）
滝田　賢治（中央大学法学部教授）
関場　誓子（聖心女子大学文学部教授）
大芝　亮（一橋大学法学部教授）
勝俣　誠（明治学院大学国際学部教授）
渡邊　啓貴
（東京外国語大学外国語学部教授）
山本　吉宣（東京大学教養学部教授）
奥田　和彦（国際大学大学院教授）
ロナルド・A・モース
（麗澤大学経済学部教授）

第28回　グローバルイシュ—と日本　2001年12月22～24日　70名15校（内留学生13名）

有馬　龍夫
（日本国政府代表・早稲田大学教授）
星野　智（中央大学法学部教授）
松下　和夫
（(財)地球環境戦略研究機関福所長代行）
今井　圭子（上智大学外国語学部教授）
勝俣　誠（明治学院大学国際学部教授）
納屋　政嗣
（一橋大学大学院法学研究科教授）
山本　吉宣
（東京大学大学院総合文化研究科教授）
滝田　賢治（中央大学法学部教授）
関場　誓子（聖心女子大学文学部教授）
奥田　和彦
（国際大学大学院国際関係学教授）
ワフラ・オクム（国連大学教授）

第29回　グローバル化する地域紛争　2002年12月13～15日　90名29校（内留学生21名）

広瀬　崇子
（大東文化大学国際関係学部教授）
堀本　武功
（国立国会図書館調査及び立法考査局長）
清水　学（宇都宮大学国際学部教授）
湯浅　剛
（防衛庁防衛研究所第２研究部研究員）
池田　明史
（東洋英和女学院大学国際社会学部教授）
平山　健太郎（元 NHK 解説委員）
天児　慧（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）
若林　正丈
（東京大学大学院総合文化研究科教授）
滝田　賢治（中央大学法学部教授）
石井　修（明時代学院大学法学部教授）
小和田　恒
（(財) 日本国際問題研究所理事長）

第30回　アメリカのリーダーシップと抵抗する世界　2003年11年22～23日　54名24校（内留学生11名）講演のみ98名

岡崎　久彦
（NPO 法人岡崎研究所理事長・所長）
渡邊　啓貴
（東京外国語大学外国語学部教授）
高橋　和夫（放送大学教養学部助教授）
中居　良文（学習院大学法学部教授）
小針　進
（静岡県立大学国際関係部助教授）
高木　誠一郎
（青山学院大学国際政治経済学部教授）

第31回　中国はいま、どこへ —中国の現在・将来・日中関係—　2004年12月11～12日　33名（内留学生18名）

溝口　雄三（東京大学名誉教授）
大橋　英夫（専修大学経済学部教授）
園田　茂人（中央大学文学部教授）
中居　良文（学習院大学法学部教授）
谷垣　眞理子
（東京大学大学院総合文化研究科助教授）
劉　傑（早稲田大学社会学部教授）

第32回　NGO への招待　2005年12月10～11日　15名（内留学生５名）

福元　満治（図書出版石風社代表・ペシャワール会広報担当理事）
渡辺　龍也
（東京経済大学現代法学部助教授）
長畑　誠（いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク）
毛利　聡子（明星大学人文学部助教授）
伊藤　道雄（立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授）

第33回　東アジアの将来秩序 —東アジア共同体構想を巡って—　2006年９月30～10月１日　60名（内留学生27名）

田中　明彦（東京大学大学院情報学環・東洋文化研究所教授）
上田　信（立教大学文学部教授）
高原　明生
（東京大学大学院法学政治研究科教授）
五味　俊樹（大東文化大学法学部教授）
深川　由起子
（早稲田大学政治経済学部教授）

第34回　実現なるか、東アジア共同体！　2007年９月29～30日　32名（内留学生22名）

白石　隆（政策研究大学院大学副学長・政策研究科教授）
絵所　秀紀（法政大学教授）
渡邊　啓貴
（東京外国語大学外国語学部教授）
青木　健（杏林大学総合政策学部教授）
大庭　三枝（東京理科大学准教授）
滝田　賢治（中央大学法学部教授）

第35回　文化的多様性と現代社会　2008年９月27～28日　34名（内留学生14名）

小倉　和夫（独立行政法人国際交流基金理事長・前青山学院大学教授・元駐仏大使）
武内　進一（日本貿易振興機構アジア経済研究所主任研究員）
能登路　雅子
（東京大学大学院総合文化研究科教授）
長谷川　秀樹
（横浜国立大学教育人間科学部准教授）
岩崎　育夫（拓殖大学国際学部教授）
平野　聡（東京大学大学院法学政治学研究科准教授）

第36回　アメリカ発世界経済危機と現代世界　2009年11月28～29日　34名17校（内留学生13名）

小倉　和夫（独立行政法人国際交流基金理事長・前青山学院大学教授・元駐仏大使）
五十嵐　武士（桜美林大学教授）
長部　重康（法政大学教授）
浦田　秀次郎（早稲田大学教授）
中兼　和津次（青山学院大学教授）
宇野　重規（東京大学准教授）

第37回 日本はどこへ —世界の中の日米中関係— 2010年10月23～24日 44名20校（内留学生18名）

北岡　伸一（東京大学大学院教授）
高木　誠一郎（青山学院大学教授）
佐々木　卓也（立教大学教授）
河野　康子（法政大学教授）
山本　信人（慶應義塾大学教授）
太田　宏（早稲田大学教授）

第38回 アジア・太平洋地域はどこへ —新たな国際秩序の模索— 2011年11月26～27日 44名24大学（内留学生18名）

田中　均（株式会社日本総合研究所・国際戦略研究所理事長）
佐々木　卓也（立教大学教授）
唐　亮（早稲田大学教授）
平岩　俊司（関西学院大学教授）
菊池　努（青山学院大学教授）
浦田　秀次郎（早稲田大学教授）

第39回 東アジアを考える 2012年11月24～25日 50名（内留学生15名）

三谷　博（東京大学大学院教授）
金　美徳（多摩大学経営情報学部教授）
小松　久男（東京外国語大学大学院特任教授）
李　成市（早稲田大学文学学術院教授）
上田　信（立教大学文学部教授）

第40回 新時代の東アジア国際関係 —日米中、そして ASEAN— 2013年11月16～17日 38名（内留学生７名）

渡邉　昭夫（東京大学名誉教授）
大庭　三枝（東京理科大学准教授）
清水　一史（九州大学教授）
中山　俊宏（青山学院大学教授）
川島　眞（東京大学准教授）

第41回 アジア・太平洋の歴史と未来 —国際関係論と地域研究の視点から— 中嶋嶺雄前理事長追悼セミナー 2014年11月22～23日 87名20大学（内留学生21名）

渡辺　利夫（拓殖大学総長）
濱本　良一（国際教養大学教授）
大﨑　雄二（法政大学教授）
松田　康博（東京大学教授）
山﨑　直也（国際教養大学准教授）
澤田　ゆかり（東京外国語大学教授）
曽根　康雄（日本大学教授）
伊豆見　元（静岡県立大学教授）
小針　進（静岡県立大学教授）
五島　文雄（静岡県立大学教授）
諏訪　一幸（静岡県立大学教授）
名越　健郎（拓殖大学教授）
河原地英武（京都産業大学教授）
勝又美智雄（国際教養大学教授）
井尻　秀憲（東京外国語大学教授）
中本　義彦（静岡大学教授）
中嶋　聖雄（早稲田大学准教授）

国際教養セミナー開催一覧（2007-2010）

回次	テーマ	会期	参加状況（人数）
第１回	**多文化共生の道を探る** **—グローバル化の中の他文化と日本—** 船曳　建夫（東京大学大学院総合文化研究科教授） 川田　順造（神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員） 大塚　和夫（東京外国語アジア・アフリカ言語文化研究所教授・所長） 花澤　聖子（企画委員長、神田外語大学外国語学部准教授） 渡邊　啓貴（東京外国語大学外国語学部教授）	2007年11月16～17日	45名　20校、その他
第２回	**イスラーム世界における「他者」との共生** **—宗教・宗派・民族の相違を超えて—** 大塚　和夫（企画委員長、東京外国語アジア・アフリカ言語文化研究所教授・所長） 八尾師　誠（東京外国語大学外国語学部教授） 酒井　啓子（東京外国語大学大学院地域文化研究科教授） 西井　凉子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授） 飯塚　正人（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）	2008年10月４～５日	61名　32校、その他
第３回	**曲がり角のアメリカ** 久保　文明（東京大学法学部教授） 小檜山　ルイ（東京女子大学現代教養学部教授） 岡山　裕（慶應義塾大学法学部准教授） 佐々木　卓也（立教大学法学部教授） 古矢　旬（企画委員長、東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター長／教授）	2009年11月14～15日	36名　20校、その他

第４回	**文化交流は日中間の溝を埋められるのか** 李　年古（日本ナレッジセンター代表） 袁　英明（桜美林大学准教授・京劇俳優） 山下　一夫（慶應義塾大学准教授） 高井　潔司（北海道大学教授） 花澤　聖子（企画委員長、神田外語大学准教授）	2010年10月22～23日	33名　17校、その他

ＥＵセミナー開催一覧（2012-2016.10）

回次	テーマ	会期	参加状況（人数）
1	岐路に立つヨーロッパ ――ＥＵのガバナンス――	2012.9.28～30	74名
2	ＥＵ危機を越えて ――ユーロ、連帯、ソーシャルヨーロッパ――	2013.9.20～22	73名
3	新段階を迎えるＥＵ ――銀行同盟、欧州デモクラシー、安全保障――	2014.9.19～21	71名
4	ＥＵの新たな挑戦 ――危機をチャンスに変えて――	2015.9.18～20	103名
5	EU の新たな試練 ―英国の EU 離脱後のヨーロッパ―	2016.9.23～25	90名

大学教員懇談会／大学教員セミナー開催一覧（1970-2012）

回次	主　　題	会　　期	参加状況
1	日本における大学改革の反省と展望	1970.9.19～20	68名25校
2	大学改革の反省と展望	1971.2.13～14	67名24校
3	大学改革の反省と展望	1971.5.15～17	60名21校
4	大学入試改革の現状をさぐる	1971.9.25～26	70名25校
5	大学における外国語教育について	1972.1.29～30	58名23校
6	大学設置基準と大学交流について	1972.7.1～２	73名32校
7	共通利用講義について	1973.2.17～18	32名19校
8	大学入試期日について ―特に国立大学の一期・二期に関連して	1973.6.16～17	51名18校
9	わが国の大学における国際交流の諸問題	1974.2.5～６	61名26校
10	新しい大学像を求めて	1974.6.29～30	42名26校
11	わが国の大学における国際交流の諸問題 ―教員・研究者の交流をめぐって	1975.1.18～19	46名19校
12	今後の大学院教育のあり方について	1975.6.27～28	79名30校
13	学歴と職業―「指定校に関連して」	1976.9.24～25	49名23校
14	学歴社会と大学―能力が生かされる社会を求めて	1977.7.5～６	56名28校

15	今日の大学教育の問題点	1978.12.15～17	64名28校
16	大学入試を考える ―第１回「共通第一次学力試験」の成果と課題をめぐって	1979.9.29～30	73名31校
17	留学生の受け入れをめぐる諸問題―現状とその改善	1980.11.15～16	62名31校
18	大学教育のあり方一般教育を中心として	1981.9.26～27	64名32校
19	国際化時代の大学 ―教員と研究者を中心とした交流の現状と将来	1982.10.2～３	62名30校、１短大
20	時代の変遷に伴う大学の将来像そのⅠ	1983.10.8～９	68名31校、２短大
21	時代の変遷に伴う大学の将来像そのⅡ ―大学はこれでよいのか	1984.10.6～７	62名33校、２短大
22	大学の社会的役割―問われる大学・問う大学	1985.6.8～９	57名27校、２短大
23	大学教育の充実と個性化―臨教審第二答申をめぐって	1986.10.4～５	57名26校、１短大
24	大学の魅力開発	1987.10.3～４	49名28校
25	続・大学の魅力開発	1988.10.8～９	48名27校、１短大
26	大学教員の魅力開発―FD プログラムの実践	1989.1.20～21	53名21校、４短大
27	よりよい大学教育の方法を求めて	1990.9.29～30	63名25校、２短大
28	改正大学設置基準のめざすもの ―よりよい大学教育を実現するために	1991.9.28～29	68名30校、１短大
29	動き出したか？　大学改革	1992.9.26～27	63名31校、１短大
30	いま、大学の理念を問う―どういう人間を育てるのか	1993.10.2～３	67名36校、１短大
31	大学院改革の理想と現実	1994.10.8～９	53名30校
32	学問への動機づけはいかにあるべきか	1995.10.7～８	57名43校、１短大
33	大学、改革はしたけれど	1996.10.5,～６	54名35校
34	入試と就職、そのはざまにある大学	1997.10.4～５	56名31校
35	混迷する社会の中の教育と大学―大学の役割	1998.7.4～５	86名54校、２短大
36	入りやすく、出にくい大学？―大学審議会答申への対応	1999.7.10～11	89名56校、１短大
37	目標見えぬ大学教育―少子化・大衆化時代の中で	2000.7.8～９	108名74校、１短大
38	大学の新世紀	2001.7.7～８	89名52校、２短大
39	大競争時代における大学教員の生き方	2002.7.6～７	75名51校
40	教員の教育力を高める―評価の時代の大学教員のあり方	2003.9.13～14	72名59校
41	ｅラーニングと大学教育	2004.9.4～５	84名65校
42	プロが担う大学教育―法人化時代の教学経営	2005.2.5～６	35名27校
43	語学教育の在り方 ―グローバル社会の中での大学教育を考える	2005.9.3～４	79名59校
44	大学の国際戦略を考える	2006.3.19～20	45名35校
45	キャリア教育と大学	2006.9.2～３	83名62校

46	徹底討論・キャリア教育	2007.3.～4	42名35校
47	大学改革と教育の質保証	2007.9.11～12	44名36校
48	１８歳人口減少と私立大学の将来戦略	2008.3.3～4	46名35校
49	学士力を考える――中教審答申への対応――	2008.9.22～23	57名46校
50	徹底討論・学士力を考える	2009.3.2～3	30名25校
51	留学生問題のいまとこれからを考える	0209.10.17～18	54名34校
52	全入時代の大学教育のあり方	2010.10.16～17	23名20校
53	大学の学修時間の確保について考える	2012.9.13～14	29名21校

大学職員セミナー開催一覧（1999-2016.10）

回次	主　　題	会　　期	参加状況
1	国・公・私立の殻を破って話し合おう ―これからの大学をどう支えるか	1999.7.14～15	87名59校
2	国・公・私立の殻を破って話し合おう ―これからの大学をどう支えるか part 2	1999.10.12～13	60名40校
3	大学職員の役割 ―新しい発想の下での教育・研究支援から大学運営まで	2000.7.25～26	111名58校
4	存在意義のある大学へ―問われる職員の自己改革―	2001年7.23～25	123名73校
5	大学危機回避　モラールとミッションの再構築 ―今、大学人がなすべき原理原則を考える	2003.1.24～25	143名62校
6	大学危機回避―今、職員がなすべきことを考える	2003.7.4～5	134名74校
7	大学危機回避　いま、大学人がなすべきこと ―国立大学法人化　変わる大学、変わらない大学	2003.10.3～4	28名44校
8	大学改革　大学はどのように見られているか ―国公私立の垣根を越えて職員の責務と役割を考える	2004.1.23～24	65名40校
9	大学改革／昨日今日明日－個性の輝きを演出するために－	2004.7.2～3	85名63校
10	高等教育のボーダレス化と留学生の受け入れ	2004.10.29～30	59名32校
11	これからの大学改革 －あらためて職員に問われる原理原則－	2005.1.21～22	50名31校
12	競争時代を支える大学の人材養成を考える	2005.7.1～2	47名37校
13	大学経営を活かす財務感覚	2005.10.21～22	53名37校
14	個性が輝く大学を創る企画力	2006.3.3～4	56名38校
15	輝く大学を創る――新しい職員の役割分担を考える――	2006.7.7～8	66名49校
16	激動の時代に輝く大学を創る ――大学職員が担うべきこと――	2006.10.27～28	58名28校
17	激動の時代に輝く大学を創る ――職員に求められるコミュニケーション力を磨く――	2007.1.26～27	22名18校

18	激動の時代に輝く大学を創る――職員の役割を問う―― 〈第Ⅰ回　総合的学生支援体制の構築における職員の役割〉	2007.9.14～15	43名22校
	激動の時代に輝く大学を創る――職員の役割を問う―― 〈第Ⅱ回　大学のブランド戦略の構築における職員の役割〉	2007.10.26～27	35名23校
	激動の時代に輝く大学を創る――職員の役割を問う―― 〈第Ⅲ回　大学の社会的責任と危機管理体制の構築における職員の役割〉	2007.12.7～8	45名30校
19	激動の時代に輝く大学を創る――職員の役割を問う―― 〈第Ⅰ回　あらためて総合学生支援体制のあり方と職員の役割を問う〉	2008.7.11～12	29名23校
	激動の時代に輝く大学を創る――職員の役割を問う―― 〈第Ⅱ回　FDとSD、教員と職員の連携を通して、職員の役割を問う〉	2008.9.19～20	51名42校
	激動の時代に輝く大学を創る――職員の役割を問う―― 〈第Ⅲ回　地域協力と国際化戦略、それぞれの大学における現状を通して、職員の役割を問う〉	2008.11.14～15	51名37校
20	大学の教育力を支える職員の役割を問う	2009.7.10～11	52名40校
21	教員と職員の協働を可能にするＳＤのあり方	2009.9.25～26	50名37校
22	大学の新たな教育――キャリア開発支援と職員の役割――	2010.7.9～10	51名40校
23	学生支援の高度化と職員の役割――質保証の新たな展開の中で――	2010.11.26～27	32名25校
24	大学職員としてのアイデンティティ――大学職員の可能性を考える	2011.7.8～9	51名38校
25	大学職員としてのアイデンティティ ――職員が変われば大学は変わる――	2011.12.2～3	57名41校
26	大学職員の挑戦と実践――職員が変われば大学は変わるⅡ――	2012.7.13～14	37名27校
27	大学職員の挑戦と実践――職員が変われば大学は変わるⅢ――	2012.12.7～8	43名30校
28	大学職員の挑戦と実践 ――企画立案実践のできる大学職員を目指して――	2013.6.29～30	42名27校
29	大学職員の挑戦と実践 ――企画立案実践のできる大学職員を目指してⅡ――	2013.11.29～30	31名21校
30	大学職員の可能性――大学改革を牽引する職員を目指してⅠ――	2014.7.11～12	40名27校
31	大学職員の可能性――大学改革を牽引する職員を目指してⅡ――	2014.11.28～29	32名23校
32	大学職員の可能性――大学改革を牽引する職員を目指して――	2015.11.27～28	37名36校
33	職員が拓く大学の未来――大学職員に期待されるもの――	2016.7.1	55名28校1団体

新任教員研修セミナー開催一覧（2011-2016.10）

回次	テーマ	会期	参加状況（人数）
1	わが国の高等教育の現状と課題・他	2011.9.5～7	52名33校
2	シラバスと授業設計・他	2012.9.3～5	42名33校
3	大学教員の基礎・他	2013.9.2～4	37名16校
4	学術の創造・継承そして公共性を担う大学 ――大学教育の質保証――・他	2014.9.1～3	33名16校

5	「教える教育」から「支援する教え方」へ・他	2015.8.29～31	27名18校
6	新任教員研修セミナー	2016.9.5～7	37名30校

古代史セミナー（2004-2014）

回次	テーマ	会期	参加状況（人数）
1	海のロマンと日本の古代――古田武彦先生を囲んで――	2004.11.13～14	58名
2	万葉・古今が語る日本の古代――古田武彦先生を囲んで――	2005.11.12～13	60名
3	筑紫時代 ――日本古代史の新区分「奈良時代以前」をめぐって――	2006.11.11～12	64名
4	日本を深くする古代史批判	2007.11.10～11	71名
5	日本古代史・新考・自由自在――古田武彦先生を囲んで――	2008.11.8～9	69名
6	日本古代史・新考・自由自在（その二）	2009.11.7～8	74名
7	日本古代史・新考・自由自在（その三）	2010.11.6～7	85名
8	日本古代史・新考・自由自在（その四）	2011.11.5～6	86名
9	日本古代史・新考・自由自在（その五）	2012.11.10～11	87名
10	日本古代史・新考・自由自在（その六）	2013.11.9～10	96名
11	日本古代史・新考・自由自在（その七）	2014.11.8～9	108名

教員免許状更新講習開催一覧（2008-2016.10）（対面式）

回次	テーマ	会期	参加状況（のべ人数＊）
1	［必修領域］［選択領域］	2008.7.28～31	600名
2	［必修領域］［選択領域］	2008.12.27～30	655名
3	［必修領域］［選択領域］	2009.7.27～30	260名
4	［必修領域］［選択領域］	2011.12.25～28	347名
5	［必修領域］［選択領域］	2012.8.4～7	325名
6	［必修領域］［選択領域］	2012.12.24～27	405名
7	［必修領域］［選択領域］	2013.7.31～8.3	295名
8	［必修領域］［選択領域］	2013.12.24～12.27	265名
9	［必修領域］［選択領域］	2014.8.3～6	345名
10	［必修領域］［選択領域］	2014.12.24～27	438名
11	［必修領域］［選択領域］	2015.1.21～24	358名
12	［必修領域］［選択領域］	2015.8.3～6	484名
13	［必修領域］［選択領域］	2015.12.24～27	372名
14	［必修領域］［選択領域］	2016.1.20～23	351名
15	［必修領域］［選択領域］	2016.8.1～7	212名

＊6時間を科目単位とし、各科目の人数を足し合わせたもの。

（e ラーニング）

回次	テーマ	会期	参加状況（のべ人数＊）
——	［選択領域］	2016.1.13～3.31	61名

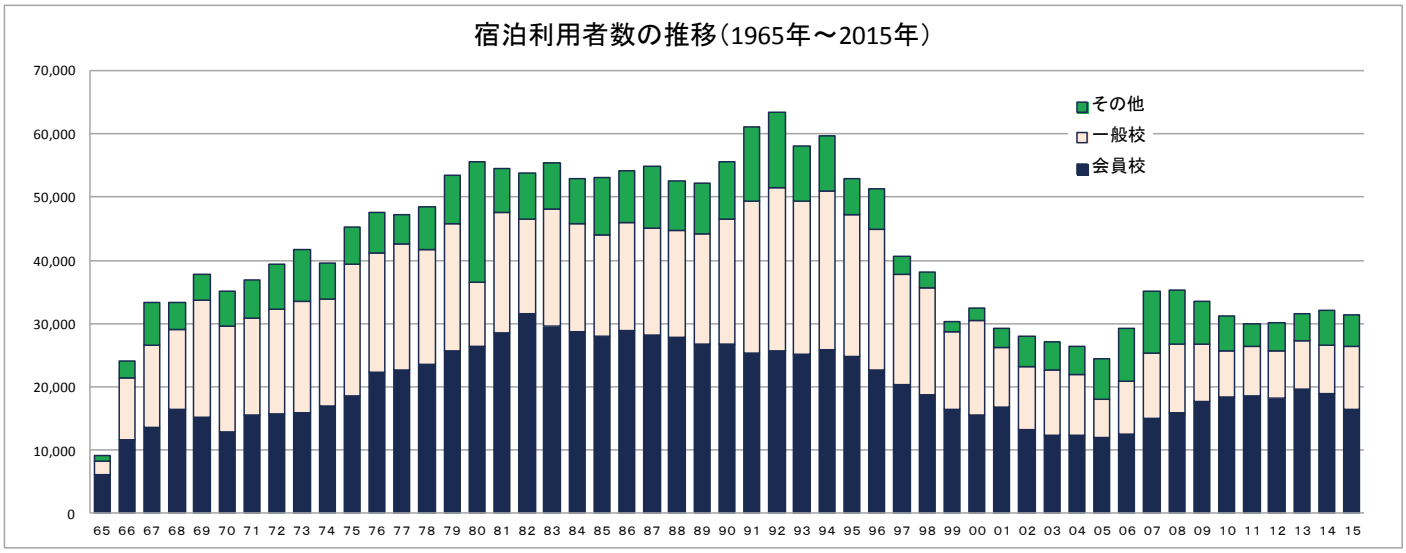
＊6時間を科目単位とし、各科目の人数を足し合わせたもの。

宿泊利用者の推移

（1965年7月5日～2016年3月31日）

〔単位：人〕

年度	会員校 宿泊延人数	一般校 宿泊延人数	その他 宿泊延人数	宿泊延人数計
1965	6,065	2,236	891	9,192
1966	11,668	9,780	2,674	24,122
1967	13,693	12,970	6,690	33,353
1968	16,484	12,517	4,388	33,389
1969	15,293	18,388	4,196	37,877
1970	12,944	16,605	5,597	35,146
1971	15,519	15,288	6,069	36,876
1972	15,715	16,586	7,071	39,372
1973	15,913	17,529	8,294	41,736
1974	16,940	16,933	5,654	39,527
1975	18,620	20,792	5,885	45,297
1976	22,351	18,895	6,385	47,631
1977	22,725	19,961	4,521	47,207
1978	23,537	18,170	6,832	48,539
1979	25,791	20,014	7,632	53,437
1980	26,329	10,277	9,002	55,608
1981	28,527	19,090	6,930	54,547
1982	31,489	15,077	7,233	53,799
1983	29,701	18,453	7,316	55,470
1984	28,672	17,144	7,122	52,938
1985	27,999	16,098	9,057	53,154
1986	28,980	17,019	8,159	54,158
1987	28,269	16,887	9,688	54,844
1988	27,778	16,926	7,825	52,529
1989	26,851	17,337	7,991	52,179
1990	26,737	19,769	9,105	55,611
1991	25,431	23,915	11,816	61,162
1992	25,736	25,833	11,916	63,485
1993	25,181	24,177	8,780	58,138
1994	25,793	25,209	8,704	59,706
1995	24,873	22,291	5,706	52,870
1996	22,766	22,121	6,442	51,329
1997	20,383	17,415	2,797	40,595
1998	18,685	17,069	2,479	38,233
1999	16,417	12,254	1,689	30,360
2000	15,530	15,059	1,943	32,532
2001	16,799	9,429	2,979	29,207
2002	13,281	9,959	4,766	28,006
2003	12,313	10,436	4,393	27,142
2004	12,432	9,533	4,421	26,386
2005	11,998	6,066	6,416	24,480
2006	12,473	8,482	8,329	29,284
2007	15,105	10,262	9,718	35,085
2008	15,839	10,985	8,444	35,268
2009	17,702	9,118	6,651	33,471
2010	18,385	7,251	5,638	31,274
2011	18,533	7,818	3,569	29,920
2012	18,199	7,495	4,502	30,196
2013	19,707	7,654	4,290	31,651
2014	18,879	7,778	5,390	32,047
2015	16,406	10,009	4,894	31,309
合計	1,023,436	758,359	318,879	2,110,674



紛争休戦セミナーは満員

八王子郊外

教授と泊りこみ勉強

五千人越し、六十組断る

1969年大学紛争中でも大学セミナーハウスを学生で賑わった

講堂・図書館へ行く道（1967年）

一福亭（1978年）

発　行　2016年11月12日
執筆・編集　孫　国鳳
監　修　鈴木　康司・外村　幸雄
発行人　佐藤　東洋士
発行所　公益財団法人 大学セミナーハウス
〒192-0372　東京都八王子市下柚木1987-１
TEL：042-676-8511(代)　FAX：042-676-1220
URL：https://iush.jp/
印刷所　泰成印刷株式会社

大学セミナーハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE
50th Anniversary
Since 1965